View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by UTokyo Repository

博士論文

論文題目：　源氏物語正篇の研究

—光源氏形象論—

氏名　：　權桃楹

源氏物語正篇の方法

―光源氏形象論―

目次

序章

序章　光源氏の生を語る物語を考えるために　……3

第一部　若年期の光源氏像

第一章　頭中将の視線―源氏の「隠ろへごと」に関連づけて―　……14

第二章　若紫登場の意義―藤壺に対する源氏の情念を中心に―　……29

第二部　壮年期の光源氏像

第一章　六条御息所の再登場―母と女の位相に注目して―　……44

第二章　玉鬘十帖の意義　……59

第三部　若菜巻以降の光源氏像

第一章　光源氏の老い　……75

第二章　幻巻の一年　……89

第三章　夕霧巻再考　……104

終章

終章　子どもに照らし出される時間　……116

初出一覧　……133

序章

序章　光源氏の生を語る物語を考えるために

第一節　正篇の時間

本論文においては、『源氏物語』の正篇における光源氏がいかに形象されているかを考究する。光源氏の形象に関する考究は、一見すると人物論のように思われるが、光源氏の生を象る物語の中で彼の形象を考究することは、単なる人物論に留まらない。物語に象られた彼を理解するためには准拠・表現・創作された時代などをも考慮に入れなければならないためである。言い換えれば、物語における光源氏の造型が多様な方法によってなされたとも言えようが、そのことは物語を読み解く方法の多様性をも意味しよう。それらの方法の中で本論文は特に時間というものに焦点を当ててゆく。本論文を光源氏の若年期・壮年期・若菜以降と分けて構成した所以である。

『源氏物語』の時間に関しても多様な観点から論じることができよう。例えば、年立や年中行事など物語の表面を流れる時間があれば、筋の展開とともに物語に沈降してくる時間がある。のみならず、すでにあった過去の出来事を語る物語の特性を考えると、語りの表現構造も時間と無関係ではない。このような多層的な時間の中で、本論文では主に、物語の展開によって蓄積される時間に焦点をあてる。

右に述べた時間に関する本論文の関心は、若菜巻以降の物語の方法を論じた秋山虔氏の一連の論文[(1)]に引き起こされたものである。秋山氏は、明石の姫君の出産に関する叙述に関して言及する際に、「物語世界の過去をここにひき出すことによって過去を照らしだすとともにそれに強く規定されて、いま書かれて行く現在を物語世界の時間の秩序のなかに相対化する独自の精神運動をかたちづくる」ことを説いた。[(2)]「相対化」という規定の曖昧さがあるものの、その一連の論考は正篇を貫通する軸としての時間を示唆したもののように思われる。

以下、本論文における問題意識を述べてゆくが、その前に、本論文における『源氏物語』の引用の際には小学館の『新編日本古典文学全集』を用い、巻数・巻名・頁数を適宜示すことを記しておく。

第二節　二つの時間

時間の重要性に関しては、吉岡曠氏も「光源氏の生涯は、こういう年立的な見方をする以外に全体として捉える観点を見つけにくいのである。」と論じている。[(3)]だが、それを論

ずる際に吉岡氏は、「この物語を流れている時間が、物語の時間というよりも、われわれが実人生で体験する時間の実感に酷似したものであり、それがこの物語の与える、無比の、もっとも深い感動になっている」とまで説いたものの、一方では「光源氏の生涯が、偶然の事件の継起にすぎなくて、それを統一するなり、要約するなりして、こういう一生であるということのできる主題をもっていない」とも述べている。この吉岡氏の論は、所謂紫上系と玉鬘系を区分して捉える成立論の成果を基にしたものだが、大朝雄二氏が論じたように、問題はその両系列がどのように接触するかにある[(4)]ように思われる。

右の大朝氏も『源氏物語正篇の研究』において時間の重要性を指摘している。氏は、正編の物語世界を綿密に検討した上で、

物語世界が光源氏を軸にした継続し累計する歳月を写し出すことによって、長編物語の実質が確保されている…すなわち、光源氏が超越的な理想者として説明的に外側から語られるものなのではなく、理想者たる光源氏が彼のみに許された独自の生活を積み重ねていく実際が物語られるというかたちで、光源氏の生活的持続が描かれることに、源氏物語の長編性の本体があるのではないか

という結論を下した。この結論には大いに肯かれるものの、氏が、そこで「予言によって予定調和的に保たれている長編構造なのではなく、持続する物語の様態によって長編物語たりえている」と論じた[(5)]ことについては、予言と時間の前後関係を考える必要もあるように思われる。日向一雅氏が「時間に付属して予言があるのではなく、また予言が単なる物語の外枠の規定にすぎないのでもなく、予言を根拠としてあるいは母胎となって事件が分泌されるのである」と論じたような考え方[(6)]も成り立つと思われるためである。大朝氏の論には時間に対する一種の偏った見方があると言えようが、恐らくそれは、正篇世界を貫く一つの軸を見出すことをあまりにも重視したためだと思われる。が、なおも、第一部世界の問題意識としては、源氏の運命を導く予言を中軸に据えた展開とそれとの関連性の薄い物語の内容を接触させる方法を探る大朝氏の問いは有効であろう。

本論文の問題意識の一つとして、右に確認した大朝氏のそれを受けつぐが、それを考える際には前に触れた秋山氏の方法が有効のように思われる。先に掲げたように、秋山氏は、第二部世界の方法を究明するに際して、物語の表面を流れる年立的な時間と、物語によって想起されるもう一つの時間とを区分しているが、少女巻や玉鬘十帖においても、年立的な時間と位相を異にする時間が見られるように思われる。少女巻における五節に関する記述や、玉鬘巻における玉鬘の登場を語る記述には時間の蓄積があったことに対する源氏の

意識が著しく顕れている。例えば、往時に関わった筑紫の五節に源氏から「をとめごも神さびぬらし天つ袖ふるき世の友よはひ経ぬれば」（③少女63）という歌が送られることや、夕顔の死後仕えていた右近を源氏が「年経ぬるどち」（③玉鬘119）と言っていることなどがあげられるが、源氏に意識されるこれらの蓄積された時間は、桐壺巻や澪標巻に取り上げられる予言の実現をたどる展開からははみ出ているかに見える。無論、時間を紡ぎ出すために予言が奉仕するか、それとも予言の実現のために物語が時間を必要としたかは、先に述べたように、前後関係を定めかねる問題である。だが、源氏によって振り返られる時間にかぎって言えば、桐壺巻や澪標巻の予言が実現する展開においては不要なものだとまずは言えよう。桐壺巻や澪標巻に「国の親となりて、帝王の上なき位にのぼるべき相おはします人の、そなたにて見れば、乱れ憂ふることやあらむ。朝廷のかためとなりて、天の下を輔くる方にて見れば、またその相違ふべし」（①桐壺40）、「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」（②澪標285）などと語られる予言の実現のためなら、物語の表面を流れる年立的な時間だけでも十分なはずである。[7] にもかかわらず、物語は予言の実現とは関わりのないように見える時間の蓄積を、源氏に振り返らせ、俎上にのせている。言い方をかえれば、予言の実現に向かって流れゆく時間と源氏によって振り返られる蓄積した時間が物語を構築し、それらがいかに関わるかが問題となっていると言えよう。

年立的な時間の流れにのっとって蓄積されてきた時間の意味は、朱雀院による女三の宮の婿選びによって書き起こされる第二部世界においていよいよ重みを増してくる。高木和子氏の指摘したように、物語内の真実というべき俯瞰的な事態の把握が次第に欠落してゆく第二部世界を描くに際して、物語はすでに語ってきた時間を捉える登場人物たちの主観に依拠して展開する。[8] このような方法に支えられる第二部世界が、主人公の側に立った一面的な物語ではなく、さまざまな角度から出来事の意味が問われる重厚なものとなったのは三田村雅子氏の論じた通り[9]で、一見すると柏木や夕霧を中心に据える展開は六条院世界の解体[10]を語っているようにも見える。ところが、若菜上巻から女三の宮と柏木の密通が精巧に仕組まれていることを念頭に置くと、清水好子氏が指摘したように、第二部世界の、藤壺と密通を犯した源氏の過去が照らされ、彼の一生を問いなおす展開[11]はやはり看過できない。

右のような、清水氏が指摘した第二部の捉え方を本論文におけるもう一つの問題意識として設定しておくが、清水氏の立場は先に言及した六条院の解体を論じた論考とは対峙す

るように思われる。確かに、第二部世界における事件は柏木や夕霧といった源氏の子にあたる世代によって引き起こされ、源氏は受動的な立場または傍観する立場に回されている。柏木と女三の宮の密通はかつての源氏が犯した藤壺との密通を照らし出すものの、それが新たな出来事を引き起こすことはない。源氏は柏木と女三の宮の密通によって生まれた薫を、その誕生の秘密を知っていながら、わが子として育ててゆくのみである。また、夕霧が柏木の未亡人の落葉の宮を掌中に収めてゆく展開においても源氏は端役に回されている。このような源氏の位相から考えると、第二部においては、彼を中心に据えた世界の解体が行われているようにも見える。しかしながら、この物語の時間が、先に引いた吉岡氏の「われわれが実人生で体験する時間の実感に酷似したもの」であることを考慮に入れれば、源氏が受動的な立場や傍観する立場に回されたことは、彼の一生を語る物語ではあり得る展開ではないだろうか。すなわち、受動的な立場や傍観する立場に象徴される源氏の老いをもって初めて、物語世界を生きてきた彼の一生が問い直され得たという考えである。

以上のことから本論文の関心が察せられたと思われるので、以下に本論文の各部の問題意識をもう少し具体的に述べる。が、その前に本論文における、若年期・壮年期・若菜以降という部立てが源氏の生をたどる物語の時間に沿っていることを記しておく。巻名で言うと、桐壺巻から花宴巻までが若年期、葵巻から藤裏葉巻までが壮年期にあたるが、これは便宜上の区分に過ぎない。若年期と壮年期、さらには老年期という区分が明快な境界をもたないためだが、花宴巻と葵巻を境目にしたのはその間にある隔たりを感じるためである。朧月夜の登場が語られる花宴巻まで、物語は藤壺に対する源氏の情念によって様々な女君を登場させるが、葵巻以降はそのような登場が見られない。源氏の女性関係に変化が生じたと言えようが、それを裏付けるかのように、彼の女性関係を暴き出そうと努力してきた頭中将の視線にも変化が生じている。先に述べたように、若年期と壮年期という境界の曖昧さゆえに、それを一つの境界にした。そして、本論文で言う中年期においても、薄雲・朝顔巻における源氏像の変化[12]を考慮に入れるべきだったかも知れない。が、先に述べたように、予言に導かれる展開とそれとは関連性の薄い内容とを接触させる方法に注目したためにあえて一括りにした。なお、若菜以降を老年期と言わなかったのは、源氏の老いが彼の主観によってのみ捉えられる傾向が強いためである。このような部立ての意図の下に設けた具体的な問題意識を以下にもう少し詳しく述べておく。

第三節　若年期の光源氏像

本論文の第一部では、二つの章に分けて、「まめ」と「すき」という光源氏の性格が物語の展開といかに関わるかを考察する。源氏の性格に関しては、秋山虔氏が、「・・・（源氏ハ）さしもあだめき目馴れたるうちつけのすきずきしさなどは好ましからぬ御本性にて、まれには、あながちにひき違へ心づくしなることを御心に思しとどむる癖なむあやにくにて、さるまじき御ふるまひもうちまじりける。」（①帚木53～54）とある叙述に着目して、好色とは距離のある日常的な「本性」と、それとは矛盾・背反する「癖」があることを指摘し、「癖」に発動する女性関係が物語の世界に敷設された現実の秩序のなかの人生との緊張関係を作り出し、その日常性を照らし出しつつ源氏の人生を複雑にあやどると論じたもの[13]が注目に値する。秋山氏の区分に不満があるわけではないが、「まめ」と「すき」に注目したのは、末摘花巻と紅葉賀巻に見られる叙述のためである。

末摘花巻には、源氏を末摘花のところに手引きする大輔の命婦という人物が、「上（＝桐壺帝）の、（源氏ヲ）まめにおはしますともて悩みきこえさせたまふこそ、をかしう思うたまへらるるをりをりはえれ。」（①末摘花270）と語るところがあるが、この言葉は紅葉賀巻で「（源氏ニ）すき心なしと、（世間ガ）常にもて悩むめるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」（①紅葉賀338）とある桐壺帝の言葉と照応する。「まめ」と「すき」が語り手ではなく登場人物によって用いられるが、それは世間に見られる源氏という、本論文の第一部の視点に関係する。

若年期の源氏の女性関係は、右に掲げた桐壺帝の思惟からも察せられようが、基本的に世間に知られないものである。藤壺との関係はもとより空蝉・夕顔・末摘花などとの女性関係も隠されたものだが、露見した暁には源氏の破滅に繋がりかねない前者はやはり格別なもののように思われる。本論文ではそのような前者と区分される後者を「隠ろへごと」として捉えるが、この表現は、「光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ語りつたへけん人の言ひさがなさよ。」（①帚木53）と語られる帚木巻の冒頭による。とどのつまり、若年期の源氏の女性関係は、一身の破滅に繋がるものと「軽びたる名」が憂慮されるものとに分けられるという考えだが、このような視点から眺めると幼い紫の上の位置が問題になってくるように思われる。

若紫巻には幼い紫の上の引き取りを決心した源氏が「聞こえありて、すきがましきやうなるべきこと、人のほどだにものを思ひしり、女の心かはしけることと、推しはかられぬべくは世の常なり、父宮の尋ね出でたまへらむも、はしたなうすずろなるべきを」（①若

紫252）と思うところがあるが、「すきがましきやうなるべきこと」を憂慮する源氏の様子は、帚木巻の冒頭にあった「隠ろへごと」を連想させる。幼い紫の上には空蝉・夕顔・末摘花と共通するところがあり、それが頭中将という人物を通して窺えるように思われる。

ところで、幼い紫の上の場合、藤壺との関わりも看過できない。伊藤博氏は「源典侍挿話の周辺―紅葉賀・花宴巻断想―」という論文で、幼い紫の上によって源氏と藤壺の密通が露見しかねないことを指摘しているが[14]、藤壺に似る人物として登場する幼い紫の上には、源氏と藤壺の関係を隠すところにも寄与しているように思われる。第二章においては若紫巻から紅葉賀巻までを射程に入れて、その問題を取り上げる。

第四節　壮年期の光源氏

本論文の第二部では、物語の展開によって蓄積された時間が光源氏の造型とどのように関わっているかを確認する。が、手順としてまずは、薄雲巻で養女の斎宮女御に思いを訴える源氏の様子を押さえておく。二人の養女である斎宮女御と玉鬘に対して恋情を覚える源氏の様子が異なっているように思われ、その両者を比較するためである。斎宮女御に対する源氏の態度を確認するにあたっては六条御息所を中心に考えるが、斎宮女御と源氏の関係に六条御息所の影が底流しているためであり、六条御息所の描かれ方と物語の目指す方向とが関わり合っているように思われるためでもある。本論文の第二部においては、蓄積された時間に対する物語の関心が顕わになる以前の展開を押さえるところに意義があると言えようが、六条御息所の母と女の揺れ動く位相[15]は、この物語の第二部を読み解く際にも一つの指針となるように思われる。

母であり女でもある六条御息所の両義的な位相は、「まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君（＝ノチノ秋好中宮）、斎宮にゐたまひしかば、大将（＝源氏）の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて下りやしなまし、とかねてより思しけり。」（②葵18）と叙されるところや、死霊となった彼女が源氏に対して「中宮（＝秋好中宮）御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りても見たてまつれど、道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらん、なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむとまるものなりける。」（④若菜下236～237）と語ることろから垣間見られよう。これら葵巻や若菜下巻の例を見る限りでは、斎宮女御の母という六条御息所の位相は彼女の抱えた苦悩を際立たせる副次的なもののように思われるが、源氏が政治家としての力量を発揮し始める澪標巻を視野に入れると、母としての彼女の位相には副

次的と言い切れないものがあるように思われる。

澪標巻での六条御息所は、娘を源氏に託しながら、「うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に（娘ヲ）思しよるな。・・・（娘ニハ）いかでさる方（＝宿命的ナ女人苦）をもて離れて見たてまつらむと思うたまふる」（②澪標311～312）という遺言を残す。その娘に関して「いかにねびなりたまひぬらむと、ゆかしう思」っていた源氏（②澪標309）が、好色心を自制し彼女を入内させたのは、母六条御息所の遺言の影響によると考えられよう。絵合巻で源氏がかつての親友頭中将側と帝寵を競って対決する内容があることから考えると、六条御息所の遺言が政治家としての源氏を描くことに寄与するとも言えるが、薄雲巻での源氏はそれに逆らって、「あはれとだにのたまはせずは、いかにかひなくはべらむ」（②薄雲460）と斎宮女御に思いをうち明けている。物語の関心が政治家としての源氏を描くところから離れたことを象徴する出来事のように思われるものの、物語にはなおも六条御息所の遺言が影響を与えている。第一章ではその仕組みを確認し、第二章においては玉鬘というもう一人の養女との関係を通して源氏を好色人として描き直す方法に関して考える。

玉鬘巻には、帚木巻における雨夜の品定めの際にその存在が知らされた（①帚木82）玉鬘が、母の夕顔を亡くして養女として源氏に迎えられるまでの経緯が記される。その際には玉鬘の成長を記すべく、彼女の年齢がこまめに刻まれているが、まずその意味を考える。結論を先に述べておくと、玉鬘の年齢に関する記述は、源氏が過ごして来た歳月を示している、ということだが、玉鬘に心惹かれる源氏の様子は歳月の流れから逸脱したかのような印象を受ける。そのような源氏の造型は同じ養女の斎宮女御への思いとも関わる問題のように思われ、第二章で合わせて取り上げる。なお、第二章においては、玉鬘と源氏の関係を通して夕霧が源氏の後継者として成長した様子が語られることをも確認しておきたい。

第五節　若菜巻以降の光源氏像

若菜巻以降に関しては、光源氏の造型における時間の働きを中心に考察する。その際には源氏の老いを取り上げる物語の方法と幻巻における源氏の時間認識を問題にする。第二部世界においては時間に対する源氏の想念とともに、物語の抒情が深まりつつあるように思われるためである。

年を取ったという源氏の認識は、常夏巻で夕霧や殿上人などとともに納涼をしていた彼

が、「心やすくうち休み涼まむや。やうやうかやうの中に厭はれぬべき齢にもなりにけりや」（③常夏227）と言う箇所や、篝火巻で夕霧や柏木らによる奏楽の際に「御簾の内に、物の音聞き分く人ものしたまふらんかし。今宵は盃など心してを。盛り過ぎたる人は、酔泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」（③篝火259）と言うところからすでに窺えるものだった。そのような彼が、若菜上巻において女三の宮の降嫁に関する朱雀院の意向を伝えらて「院（＝朱雀院）の御代の残り少なしとて、ここ（＝源氏）にはまたいくばく立ち後れたてまつるべしとてか、その御後見のこと（＝女三ノ宮ノ降嫁）をば承けとりきこえむ。」（④若菜上39）と、余命の少なさに言及することから考えると、時間の経過とともに年老いたという認識が深化したと言えよう。ところが、四十歳になった源氏の様子が、玉鬘の目線から「いと若くきよらにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおぼゆるさまの、なまめかしく人の親げなくおはします」（④若菜上56）と語られることを視野に入れると、異様な時間の流れが浮上してくる。蓄積された源氏の時間が登場人物によって両義的に捉えられていると言えようが、まずは、そのような老いを通して顕わになってくる源氏像を確認する。

第二章では、幻巻における時間に対する源氏の認識について考える。若菜巻以降、登場人物の視線に即して両義的に捉えられていた源氏の時間が、幻巻では源氏の内面における問題として表れているように思われるためである。そのことは、紫の上に死なれたのち、悲しみに沈んで日々を暮らす源氏が「人の言ひ伝ふべきころほひをだに思ひのどめてこそは（出家ヲ遂ゲヨウ）と念じ過ぐしたまひつつ」いる様子（④幻527～528）や、自分の出家後に紫の上が丹精を込めて造った庭の荒れ果てることを悲しんで詠んだ「今はとてあらしやはてん亡き人の心とどめし春の垣根を」（④幻530）の歌に見られる時間の経過に対する認識から察せられる。源氏は出家が遂げられる時間を待ちながらも、時間の経過によって紫の上を偲ばせる庭が荒れ果てることを悲しんでいる。流れる時間に対する相反する感慨に苛まれていると言え、それが最晩年の源氏像をいかに形象するかについて考察する。

なお、第三章においては、「まめ人」と評される夕霧が落葉の宮に迫る内容が取り上げられる意義を考える。親友柏木の死後、その未亡人の落葉の宮に心惹かれるようになった夕霧は、ついに彼女を掌中に収めることとなる。夕霧巻にはその経緯が取り上げられるが、そこでの源氏は端役ないしは観察者としか言えない人物となっている。夕霧巻が「末端肥大症を呈する」[16]と言われた所以だと思われる。だが、二人の関係を見聞きした源氏や紫の上が訓戒し、思いを述べるところを視野に入れると、源氏や紫の上によっては語り得なか

ったものを語っているように思われる。言い換えれば、夕霧と落葉の宮の関係が源氏と紫の上の生き方を照射するということである。第三章においてはそのことを、第二部の物語に著しくなった女の生き方の問題に注目しつつ考える。

最後に本論文を締めくくる論として、時間に対する源氏の意識を子どもとの関係を通して確かめる。本論文の第二部や第三部において試みた方法の応用であり、最初に述べた問題意識を中心に据えた考察でもある。

【注】

(1)秋山虔「源氏物語の方法に関する断章―若菜巻の冒頭をめぐって―」『国文学論叢 第三輯』一九五九年十一月、のち『源氏物語の世界』東京大学出版会 一九六四年十二月、同「「若菜」巻の一問題―源氏物語の方法に関する断章―」『日本文学』一九六〇年七月、同「「若菜」巻の問題ひとつ―源氏物語の方法に関する断章―」『国文学』関西大学国文学会 一九六〇年十月、同「源氏物語の方法に関する断章―光源氏四十賀の記事をめぐって―」『日本文学古典新論』河出書房 一九六二年十二月、同「外的時間と内的時間―「若菜上」巻における明石物語、その一―」『国文学』一九七〇年五月、同「源氏物語の方法に関する断章―「若菜」巻における明石物語・続―」『源氏物語とその周辺―古代文学論叢第二輯―』武蔵野書院 一九七一年六月

(2)秋山虔氏の注(1)の「外的時間と内的時間―「若菜上」巻における明石物語、その一―」。

(3)吉岡曠「宇治十帖への道」『源氏物語論』笠間書院 一九七三年十二月

(4)大朝雄二「序章」『源氏物語正篇の研究』桜楓社 一九七五年十月

(5)大朝雄二「光源氏世界の時間構造」『源氏物語正篇の研究』桜楓社 一九七五年十月

(6)日向一雅「光源氏論への一視点(二)―家の遺志と王権と―」『東京女子大学紀要論集』一九八〇年九月

(7)阿部秋生氏が「事件から事件へと積み上げてゆき、その事件が、准太上天皇への道を、変転を重ねつつも、一歩々々と終局へ向かって進展してゐる。つまり運命物語中における、それから、それからといふ読者の期待をひきずって事件が進展してゆく。」と説いたところから、予言の実現における時間の役割が窺えよう(『源氏物語研究序説』東京大学出版会 一九五九年四月、961頁)。

(8)高木和子「若菜巻発端の論理」『源氏研究』翰林書房 二〇〇一年四月、のち『源氏物語の思考』風間書房 二〇〇二年三月

(9)三田村雅子「他者のまなざし・他者の空間」『源氏物語―物語空間を読む』ちくま新書 一九九七年一月

(10)藤井貞和「光源氏物語主題論」『源氏物語の始原と現在 定本』冬樹社 一九八〇年五月、なお、土方洋一氏も「意味の差延化」や「意味の宙づり」などの表現を用いて第二部世界の解体を論じる（「『源氏物語』第二部の〈語り〉と〈言説〉―若菜上下巻を中心に―」『源氏物語の〈語り〉と〈言説〉 双書〈物語学を拓くⅠ〉』有精堂 一九九四年十月、のち『源氏物語のテクスト生成論』笠間書院 二〇〇〇年六月）。

(11)清水好子「源氏物語の主題と方法―若菜上・下巻について―」『源氏物語研究と資料―古代文学論叢第一輯―』武蔵野書院 一九六九年六月

(12)高木和子「光源氏像の変貌―賢木巻から薄雲・朝顔巻へ―」『国語と国文学』一九九三年二月、のち「光源氏の「癖」」『源氏物語の思考』風間書房 二〇〇二年三月

(13)秋山虔「好色人と生活者―光源氏の「癖」」『国文学』一九七二年十二月、のち『王朝の文学空間』東京大学出版会 一九八四年三月

(14)伊藤博「源典侍挿話の周辺―紅葉賀・花宴巻断想―」『文学論輯』一九七一年三月、のち『源氏物語の原点』明治書院 一九八〇年一一月

(15)沢田正子「源氏物語の母」『源氏物語の探究』風間書房 一九八一年八月、奥村英司「娘の内なる母―秋好中宮造形論―」『むらさき』一九九一年十二月

(16)野村精一「若菜巻試論拾遺―悲劇的状況について」『源氏物語の創造』桜楓社 一九六九年九月

第一部　若年期の光源氏像

第一章　頭中将の視線

―源氏の「隠ろへごと」と関連づけて―

第一節　光源氏の「隠ろへごと」

頭中将という官職名で知られる左大臣家の嫡子は源氏の親友を演じ、また政敵を演じる人物である。彼は弘徽殿方からの勘当を恐れずに源氏の流謫している須磨を訪れた親友だった（②須磨213）。が、須磨・明石から帰京した源氏が政治家としての風貌を備えるようになると、今度は源氏と政治的に対立する人物となる。この落差のためか、頭中将に関する研究は人物像の変貌を取り上げる論考が多い。その問題に関しては、物語世界の変容に応じて「好色者」から「政治家」へ変貌したという武原弘氏の論[1]が正鵠を射ていよう。ところで、頭中将という人物に関する研究は、武原氏の論もそうだが、政治家としての側面に関心が偏る傾向があり、彼が政治家としての面貌を顕わにする澪標巻以前に関する研究は比較的少ない。本稿で、頭中将が本格的に活躍し始める帚木巻から葵の上の死を取り上げる葵巻までを考察の対象にする所以である。

政治家としての面貌から離れた頭中将に関しては、源氏の「隠ろへごと」と関連づけて論じた金孝淑氏の研究[2]が注目にあたいしよう。氏は玉鬘の物語が末摘花の物語を経由することを論証するにあたって、頭中将が源氏の「隠ろへごと」を照射することを指摘した。空蝉・夕顔・若紫・末摘花との関係を源氏の「隠ろへごと」だと捉えた重松信弘氏の論[3]を継承発展させた金氏の論は大いに首肯される。が、頭中将が登場してくる意義は源氏の「隠ろへごと」を照射するところだけに止まらない。

「隠ろへごと」とは、当該箇所はのちに掲げるが、帚木巻の冒頭にある表現である。源氏の身分に釣り合わない中の品の女との交渉ゆえの秘密という萩原広道の解釈が通常のようである。が、実際の理解においては諸説があり、統一的な見解はまだない。前述の重松氏のように若紫や末摘花を中の品に入れて数える立場[4]や、高田祐彦氏のように葵の上を除外した源氏の女性関係をすべて「隠ろへごと」に見なす立場[5]などと多様な説がある[6]。この章では源氏の「隠ろへごと」の範疇も視野に入れつつ、頭中将の登場意義を考察する。

第二節　観察者の頭中将　―葵巻から紅葉賀巻へ―

葵の上の四十九日を繰り上げて終えた源氏は、妻の不在を強く感じながら左大臣家に籠もっていた（②葵54）。そこに三位中将に昇進しているかつての頭中将が度々やって来る。

物語は慰め合う二人の貴公子の様子を、

・・・（頭中将ハ）世の中の御物語など、まめやかなるも、また例の乱りがはしきことをも聞こえ出でつつ（源氏ヲ）慰めきこえたまふに、かの内侍（＝源典侍）ぞうち笑ひたまふくさはひにはなるめる。・・・かの十六夜のさやかならざりし秋のことなど、さらぬも、さまざまのすき事どもをかたみに隈なく言ひあらはしたまふ、はてはては、あはれなる世を言ひ言ひてうち泣きなどもしたまひけり。　（②葵54）

と伝える。物語は慰めに来た頭中将の心遣いと彼に応じて戯れ合う源氏の様子を描く。かつての「すき事」を語り合う二人の貴公子の様子は葵の上を亡くした悲しみから逃れようとするかのように思われる。まずは二人が、源典侍や末摘花[7]のような、ともに関わり合った女性だけでなく、各々の女性関係を「隈なく言ひあらはし」たことに注目したい。

周知の如く、「すきがましきあだ人」（①帚木54）の頭中将は雨夜の品定めで内気な女との関係を打ち明けた人物である。そのためだろうか、彼が源氏の前で「すき事」を語ることには不自然さがない。しかし、頭中将に源典侍との逢瀬を見られて「いと口惜しく」（①紅葉賀344）思っていた源氏が「さまざまのすき事ども」を打ち明けたことには違和感を覚えずにはいられない。一応は葵の上を亡くした悲しみを癒やそうとした源氏があえて語ったものだと考えられよう。が、それは結局のところ、葵の上を亡くした悲しみを浮上させる結果となる。源氏の「すき事ども」の一因が、生前の葵の上の「思はずにのみとりないたまふ心づきなさ」（①紅葉賀316）にあることを考えると、「つひには（葵ノ上ガ）おのづから見なほしたまひてむとのどかに思ひて、なほざりのすさびにつけても、つらしとおぼえられたてまつりけむ」（②葵48）と語られる後悔を読者に再度印象づけるために、物語が頭中将の前で「すき事ども」を打ち明ける源氏を描いたと言えよう。[8]

物語は「すき事ども」に没頭していて葵の上を顧みなかったことを後悔する様子を通して妻を亡くした源氏の悲しみを語るが、その様子は頭中将の目にも度々映っていた。葵の上に死なれて悲嘆に暮れる源氏の様子は、

(A)・・・あやしう、年ごろはいとしもあらぬ御心ざしを、ⓘ（桐壺）院などゐたちてのたまはせ、ⓘⓘ（左）大臣の御もてなしも心苦しう、大宮の御方ざまにもて離るまじなど、かたがたにさしあひたれば、（葵ノ上ヲ）えしもふり棄てたまはで、ⓘⓘⓘ（源氏ハ）ものうげなる御気色ながらあり経たまふなめりかしといとほしう見ゆるをりをりありつるを、まことにやむごとなく重き方はことに思ひきこえたまひけるなめり、と見知るに、

（頭中将ハ）いよいよ口惜しうおぼゆ。　（②葵56）

と、頭中将の視線を通して語られる。ここでは葵の上の死を悲しむ源氏の様子から頭中将が違和感を覚えることに留意したい。何年もの間、源氏が葵の上には心が惹かれないかのように振る舞ってきたための違和感である。頭中将の目に映った源氏の様子は、「(若紫ヲ迎エタコトヲ)心うつくしく例の人のやうに(葵ノ上ガ)恨みのたまはば、我もうらなくうち語りて慰めきこえてんものを、思はずにのみとりないたまふ心づきなさに、さもあるまじきすさびごとも出で来るぞかし」(①紅葉賀316)と、葵の上を不満に思っていた様子と照応する。葵の上の心隔てに対する源氏の不満は、「世には心もとけず、うとく恥づかしきものに思して、年の重なるに添へて、御心の隔てもまさるを、(源氏ハ)いと苦しく思はずに、…」(①若紫226)と、「思はずに」の繰り返しによって表現されるが、頭中将の㋳「ものうげなる…」の推察は、そのような源氏の内面を見透かしていたかのようである。「右大臣のいたはりかしづきたまふ住み処(=四ノ君)」を「いとものうくして」いた頭中将(①帚木54)ならではの理解だろうか。ともあれ、頭中将は、源氏が葵の上を棄てない理由として、ⓘやⓘⓘに見る桐壺院や左大臣の努力を数えている。

源氏を葵の上のそばに留めておくための桐壺帝や左大臣の努力は紅葉賀巻からも窺える。桐壺帝は源氏が二条院に人を迎え入れたという噂を聞いた時、「いとほしく大臣の思ひ嘆かるなることも、げに。ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらじを、などか情なくはもてなすなるらん」(①紅葉賀334～335)と訓戒した。幼い頃から世話を焼いた左大臣の恩恵を知っていながら「情け」なく振る舞うと、源氏を詰るかのような桐壺帝の言葉だが、ⓘの「院など…」によると頭中将にもそれが耳に届いていたようである。無論、物語には頭中将が桐壺帝の言葉を直接聞いていたかどうかは語られない。が、帝に近侍する蔵人頭という官職から考えると充分に可能な設定であろう。なお、ⓘⓘ「大臣の…」も同様に考えられよう。彼は左大臣家の嫡子だったゆえに、

(左)大臣も、かく頼もしげなき(源氏ノ)御心を、つらしと思ひきこえたまひながら、見たてまつりたまふ時は、恨みも忘れてかしづきいとなみきこえたまふ。つとめて、(源氏ガ)出でたまふところにさしのぞきたまひて、…(左大臣ガ源氏ノ)御衣の後ひきつくろひなど、御沓を取らぬばかりにしたまふ、いとあはれなり。

(①紅葉賀323)

と源氏を世話する父左大臣の様子を難なく目の当たりにできたはずである。源氏が二条院に女を迎えたという噂を聞いた左大臣は源氏をつらく思っていた。しかし、源氏が前にい

ると恨めしいことを忘れて世話役を買って出る。婿を「ゆゆしううつくしと思ひきこえ」ていた左大臣が（①桐壺48）光という言葉に象られる源氏の美質[9]に心惹かれていたためでもあろう。が、右の引用で源氏を世話する左大臣に対する憐憫の情を催す語り手の姿勢に留意すると、大臣の行動は源氏を葵の上のそばに留めておくための努力として捉えるべきであろう。引用(A)のⓘⓘ「大臣の・・・」からは、頭中将がそのように理解していることが窺え、右の引用はその裏付けとなる。これらのことから引用(A)ではかつての物語に語られていた内容が観察者の視点から繰り返されていると考えられる。換言すれば、頭中将が右に確認した引用(A)のⓘⓘⓘと対応する出来事を語り手とともに見てきたということである。なお、引用(A)においても頭中将は、妻を亡くした源氏を観察することによって妹の葵の上の死をさらに口惜しく思うが、それに際して彼が葵の上に対する源氏の愛情を「まことにやむごとなく重き方はことに思ひきこえたまひける」と位置づけ直すことを押さえておく。

観察者としての頭中将の位相と言えば、源典侍と源氏の逢瀬が発覚する紅葉賀巻の描写も欠かせない。源典侍と源氏の関係を取り上げる物語の意義は、それを発見した桐壺帝の「（源氏ニ）すき心なしと、（世間ガ）常にもて悩むめるを、さはいへど、過ぐさざりけるは」（①紅葉賀338）とある言葉から窺えるように、源氏の「すき心」が露見するところにある。これを考え合わせると、葵の上の死後に頭中将の前で「さまざまのすき事ども」を残りなく言い顕したことによって、源氏の「すき事ども」は「隠ろへごと」ではなくなったことが確認できるのではないだろうか。無論、源氏の態度変化には葵の上の死によって左大臣家を意識する必要がなくなった状況の変化も看過できまい[11]。のみならず、それには源典侍との一件が頭中将に目撃されたことも関わっていよう。頭中将に源典侍との一件を見られていたために、源氏には「さまざまのすき事ども」が語りやすかったということである。そのような源氏の行動は、頭中将が自分に対する理解を欠いていたことを知ってのことかどうか。

桐壺帝に発見された源氏と源典侍の関係は、すぐに噂となって世間に広まる。その噂を聞いた人々が「思ひの外なることかな」（①紅葉賀339）と思ったこととは違ってて、頭中将は「いたらぬ隈なき心にて、まだ思ひよらざりけるよ」（①紅葉賀339）と競争心を燃やしていた。「すきがましきあだ人」に相応しい反応であり、そのような人物の競争心を操ることで物語は笑劇を繰り広げる準備を整えるのである。ところで、「齢のほどいとほしければ慰めむ」（①紅葉賀339）と源氏が源典侍に同情していたこと[13]を考えると、頭中将が「いたらぬ隈なき心」からの競争心を燃やしていたことは見当違いである。にもかかわら

ず、頭中将の発した「いたらぬ隈なき心」という言葉は説得力を持つ。頭中将に知られることはなかったものの、物語には源氏の「さまざまのすき事ども」が語られてきたのである。

源典侍との一件によって頭中将は、以前から疑惑を持っていた源氏の女性関係を目撃する。それを嬉しく思う頭中将の様子は、

頭中将は、この君（＝源氏）の、いたうまめだち過ぐして、常にもどきたまふがねたきを、つれなくてうちうち忍びたまふ方々多かめるを、いかで見あらはさむとのみ思ひわたるに、これ（＝源氏ト源典侍トノ逢瀬）を見つけたる心地いとうれし。かかるをりに、すこしおどしきこえて、御心まどはして、「懲りぬや」と言はむと思ひて、たゆめきこゆ。　（①紅葉賀341）

とあるところから察せられる。頭中将は自分の女性関係に対する非難の腹いせに、親友の女性関係を見顕わす機会を狙い続けて来た。源典侍と源氏の逢瀬によって漸くその機会を掴み得たと言えようが、裏を返せば、それまでの頭中将には源氏の「まめだち過ぐし」た面しか観察できなかったことになる。物語は「夜昼、学問をも遊びをももろとも」にし、「いづくにてもまつはれきこえ」ていた（①帚木54）親友の目を通して源氏が「すき事」を上手に隠していたことを表しているのである。が、頭中将には早くから源氏が「すき」を隠していることが感知されていた。源典侍との一件によって頭中将はその直感を確信するようになったのだが、葵の上の死を悲しむ様子を目撃する頭中将の思惟から察するとその確信も偏ったものである。「まめ」でもなく「すき」でもない源氏像を形象していくに際して物語は、源氏を観察する頭中将の視線を巧みに操っているのである。

第三節　「隠ろへごと」と頭中将　―帚木三帖を中心に―

源氏の日常を観察する役割を担っていたものの、頭中将には制約があった。源典侍との一件がある以前の彼には、源氏と「夜昼、学問をも遊びをも」ともにしながらも、友人の女性関係を見抜くことが許されなかった。本節ではその意味を探るが、その前にまず帚木巻の冒頭を確認しておく。

光る源氏、名のみことごとしう、言ひ消たれたまふ咎多かなるに、いとど、かかるすき事どもを末の世にも聞きつたへて、軽びたる名をや流さむと、忍びたまひける隠ろへごとをさへ語りつたへけん人のもの言ひさがなさよ。さるは、いといたく世を憚りまめだちたまひけるほど、なよびかにをかしきことはなくて、交野の少将には、笑は

れたまひけむかし。　（①帚木53）

これについては『弄花抄』が源氏の表面と内実とにおける相違を指摘したことが注目にあたいしよう。「光る君といふ名は、高麗人のめできこえてつけたてまつりけるとぞ言ひ伝へたるとなむ」（①桐壺50）とある桐壺巻の末尾を受け継ぐものの、「光る源氏」の実体はその「名」に齟齬していたのである。[14] その実体の一面として語り手は、軽薄だという噂を恐れて隠していた源氏の「すき事ども」を暴露する。いかにも源氏の「隠ろへごと」を知っているような口ぶりだが、語り手はそれを人に語り伝えることに抵抗を感じている。それは「隠ろへごと」を自分に語り伝えた人の「もの言ひさがなさ」を非難するところから窺える。が、「隠ろへごと」に言及する語り手の態度はかえって帚木・空蝉・夕顔の帚木三帖に繰り広げられる内容を推測させ、右の引用に照応する帚木三帖の末尾には、源氏の「隠ろへごと」に対する語り手の態度がより明らかにされる。

かやうのくだくだしきことは、（源氏ノ）あながちに隠ろへ忍びたまひしもいとほしくてみなもらしとどめたるを、など帝の皇子ならんからに、見ん人さへかたほならずものほめがちなると、作り事めきてとりなす人ものしたまひければなん。あまりもの言ひさがなき罪避りどころなく。　（①夕顔195～196）

空蝉や夕顔などとの関係を語った語り手は右のように語った時点で、すでに源氏の意に逆らっている。点線を施した部分には源氏の隠していた「すき事ども」を漏らした理由が語られる。物語は事実性を高める目的で語りを重層化[15]して源氏の「隠ろへごと」を露見させたのである。が、依然として語り手からは源氏の意に逆らうことに対する抵抗が垣間見られる。帚木三帖の序跋における語り手は、「隠ろへごと」の露見に携わっていながらも、それに抵抗を感じていたと言えよう。そのような相反する語り手の態度と類似する関係が帚木三帖での源氏と頭中将から見出せることを以下に確認する。

つれづれと降り暮らして、しめやかなる宵の雨に、殿上にもをさをさ人少なに、御宿直所も例よりはのどやかなる心地するに、（源氏ハ）大殿油近くて書どもなど見たまふ。近き御厨子なるいろいろの紙なる文どもを引き出でて、（頭）中将わりなくゆかしがれば、「さりぬべきすこしは見せむ。かたはなるべきもこそ」とゆるしたまはねば、「そのうちとけてかたはらいたしと思されむこそゆかしけれ。…おのがじし恨めしきをりをり、待ち顔ならむ夕暮などのこそ、見どころはあらめ」と怨ずれば、やむごとなく切に隠したまふべきなどは、かやうにおほぞうなる御厨子などにうち置き、散らしたまふべくもあらず、深くとり置きたまふべかめれば、二の町の心やすきなるべし。

（①帚木55）

雨夜の品定めでは理想の女性に巡り会うことの難しさと中の品の女性の良さとが説法の形を借りて繰り広げられる。[16] 中の品の女性を知らない源氏が、謂わば、頭中将や左馬頭などの説く説法をひたすら傾聴する立場にまわされたのである。のちに、「かやうの（空蝉ノヨウナ）並々までは思ほしかからざりつるを、ありし雨夜の品定めの後、いぶかしく思ほしなる品々あるに、いとど隈なくなりぬる御心なめりかし。」（①夕顔144）とある箇所に照らして考えると、源氏を中の品の女性との交渉に導くために雨夜の品定めが設けられたとも言える。

五月雨の夜に繰り広げられる雨夜の品定めは淑景舎にいる源氏と頭中将の様子を語ることから始まり、左馬頭と式部丞が合流することで本格的に盛り上がる。右の引用はそれを導くための準備と言うべく、点線を施した部分にはその背景となっている時間と空間が提示されている。物語は五月雨の夜に書物を読んでいる源氏とその横で色とりどりの紙を前にした頭中将の様子を描くことから、雨夜の品定めを語り始める。源氏は自分あての手紙を読みたがる頭中将に、さしさわりないものだけなら読ませると許した。一方、頭中将は、よそに見られては困るものが読みたいのだと文句めいたことを言いながらも、源氏あての手紙を読む。手紙を読みながらその送り主を推測する頭中将に対して源氏は「言少なにて、とかく紛らはしつつとり隠」す（①帚木56）。頭中将には源氏の女性関係に興味があるものの、その実体を詮索する試みは源氏によって遮断されていた。頭中将から「女の、これはしもと難つくまじきはかたくもあるかなと、…」（①帚木56）という女性論を引き出した源氏の言葉も自己防衛として理解できよう。すなわち、「そこ（＝頭中将）にこそ（手紙ヲ）多く集へたまふらめ。すこし見ばや。…」（①帚木56）とある源氏の言葉も頭中将の興味をそらすために発せられたということである。雨夜の品定めが、源氏の女性関係に対する頭中将の興味と、女性関係を隠す源氏との対立によって導かれているという考えである。ここではそのような二人の対立が帚木三帖で源氏の「隠ろへごと」を暴露する語り手の二元的姿勢と類似することを押さえておく。無論、前述の如く、頭中将が源氏の隠していた女性関係を目の当たりにするのは源典侍との一件である。それ以前の頭中将は源氏の隠している女性関係を詮索し続けるものの近づくことのできない人物である。

（頭）中将、「さらば、さるよしをこそ奏しはべらめ。昨夜も、御遊びにかしこく求めたてまつらせたまひて（桐壺帝ハ）御気色あしくはべりき」と（源氏ニ）聞こえたまひて、たち返り、「いかなる行き触れにかからせたまふぞや。（乳母ノ見舞デ下人ノ死

ニ遭遇シ、マタ風邪気味ダト）述べやらせたまふことこそ、まことと思ひたまへられね」と言ふに、（源氏ハ）胸つぶれたまひて、「かくこまかにはあらで、ただおぼえぬ穢らひに触れたるよしを奏したまへ。いとこそたいだいしくはべれ」とつれなくのたまへど、心の中には、言ふかひなく悲しきことを思すに、御心地もなやましければ、人に目も見あはせたまはず。（源氏ハ）蔵人弁を召し寄せて、まめやかにかかるよしを奏せさせたまふ。

（①夕顔174～175）

夕顔の突然の死に遭遇した源氏は、慌ただしい中でも「忍ぶとも世にあること隠れなくて、内裏に聞こしめさむをはじめて、人の思ひ言はんこと、…ありありて、をこがましき名をとるべきかな」（①夕顔169～170）と世間体を意識していた。そのような源氏の様子は夕顔の亡骸の処置をめぐって惟光と相談するところ（①夕顔171～172）からも確認でき、また右の引用からも窺える。夕顔の亡骸を惟光に預けた源氏は「人さわがしくなりはべらぬほどに」（①夕顔172）二条院へ戻る。そこで源氏は、桐壺帝の使者として訪ねて来た頭中将に、乳母の見舞に行って下人の死穢に触れたという作り話を語る。一方、頭中将はそれを桐壺帝に伝えると言いながら、昨夜の宴に源氏がいなかったために帝の機嫌がよろしくなかったことを語り出す。そして彼は源氏の作り話に対して「まことと思ひたまへられね」とひやかす。このひやかしからも頭中将が源氏の隠し事の真相を探っている人物だという印象を受ける。無論、「かの撫子（＝玉鬘）は（頭中将ガ）え尋ね知らぬを、重き功に、（源氏ハ）御心の中に思し出づ」（①末摘花273）とある叙述に鑑みると夕顔との関係が頭中将に露見しなかったことを源氏は知っていたと考えられる。にもかかわらず、頭中将のひやかしによって源氏は動揺し始める。正鵠を射る友人の言葉に平然を装いながらも、源氏は胸がしめつけられて人と目を合わすこともできない。そこからは世間での経験が少ない若者の初々しさが読み取れよう。ところで、物語における頭中将の突然な登場には、若者の初々しさだけでなく、源氏の「隠ろへごと」も関連しているように思われる。

右の引用で頭中将が桐壺帝の機嫌に関する話をするのは、某の院に夕顔を連れ出した時の源氏が「内裏にいかに求めさせたまふらんを、いづこに尋ぬらんと思しやりて、かつはあやしの心や、六条わたりにもいかに思ひ乱れたまふらん、…」（①夕顔163）と思った叙述と照応する。源氏は夕顔に耽溺して「ことさらに人来まじき隠れ処求め」て某の院を訪れていた（①夕顔160）。にもかかわらず、彼は桐壺帝が使者を使わして自分を探しているだろうと心配する。この突然な想起は、一見すると、夕顔に耽溺する源氏という設定のためには不要のように見えるが、源氏は桐壺帝が探していることを知っていながらも、あえ

て行方をくらましてまで夕顔に耽溺したのである。それを「あやしの心」だと思うところからは、不思議な恋の空間を作りあげる力[17]だけでなく、夕顔との関係を知らない帝に対する源氏の後ろめたさも読み取れよう。物語は夕顔と源氏の関係を知らない世界の住民として桐壺帝を位置づけているのである。その使者として二条院を訪れた頭中将は、謂わば、源氏の「隠ろへごと」を知らない世界から派遣された使者だと言えよう。無論、源氏に「隠ろへごと」の世界があることを感づいている頭中将は桐壺帝よりは敏感である。「すきがましきあだ人」としての経験と親友という立場とに支えられている[18]ためだろうが、そのような彼も源氏の隠した女性関係の内実までは触れられない。物語は源氏の内面を知らないにもかかわらず、知っているかのように振る舞う「すきがましきあだ人」を操ることで、「隠ろへごと」の露見を恐れる若い源氏の反応を描くのである。

第四節　「隠ろへごと」への手引き　―若紫巻・末摘花巻―

前節では帚木三帖における頭中将が「隠ろへごと」の露見を恐れる源氏の様子を浮き彫りにすることを確認した。引き続いて帚木三帖に次ぐ若紫巻と末摘花巻を中心に頭中将の役割を考察する。ここでは、若紫や末摘花を中心の品に入れるべきか否かの問題は差し措き、空蝉や夕顔と同じく源氏が若紫や末摘花との関係も隠そうとしたことに留意したい。末摘花と一夜を過ごしたことについて頭中将に「隠いたまふこと多かり」（①末摘花285）と言われ、「聞こえありて、すきがましきやうなるべきこと」（①若紫252）を心配して若紫の引き取りを隠した源氏である。無論、藤壺や朧月夜等との関係も含め、源氏の女性関係の大半は隠し事である。だが、藤壺との関係は言うまでもなく、「（源氏ガ朧月夜ニ）いと忍びて通はしたまふことはなほ同じさまなるべし。ものの聞こえもあらばいかならむと思しながら、例の御癖なれば、今しも御心ざしまさるべかめり。」（②賢木101）と語られる朧月夜との関係も源氏の破滅に関わる[19]。そのような二人との関係を、「軽びたる名」の流布を恐れて隠した女性関係と同次元で扱って良いだろうか。前者と後者とが頭中将の関与の有無によっても区分できることを考慮すればやはり両者は区別して考えるべきであろう。源氏の「隠ろへごと」である中の品の女性との交渉を導いた雨夜の品定めにおける頭中将の役割に関してはすでに触れたので、以下に若紫巻と末摘花巻を中心に頭中将が源氏の「隠ろへごと」の実体に接近しつつあること[20]を確認する。

末摘花巻では「思へどもなほあかざりし夕顔の露に後れし心地」（①末摘花265）を忘れることができない源氏がとんだ醜女を手に入れる内容が繰り広げられる。夕顔や空蝉との

「隠ろへごと」が忘れられない源氏に末摘花を紹介したのは、惟光と同様に乳母子でありながら彼ほどは信頼されない大輔命婦[21]という人物だった。大輔命婦に案内された源氏は頭中将に後をつけられたとは思いも寄らないで、末摘花の弾琴を聴いた（①末摘花268）。

(イ)君（＝源氏）は、（末摘花邸ノ透垣ニ立ツ男ヲ）誰ともえ見分きたまはで、我と知られじとぬき足に歩みのきたまふに、…、この君（＝頭中将）と見たまふに、（源氏ハ）すこしをかしうなりぬ。「人の思ひよらぬことよ」と憎む憎む、…（頭中将）「まことは、かやうの御歩きには、随身からこそはかばかしきこともあるべけれ、後らさせたまはでこそあらめ、やつれたる御歩きは、軽々しきことも出で来なん」とおし返し諫めたてまつる。かうのみ（忍ビ歩キヲ）見つけらるるをねたしと（源氏ハ）思せど、かの撫子（＝玉鬘）は（頭中将ガ）え尋ね知らぬを、重き功に、御心の中に思し出づ。

（①末摘花272～273）

頭中将も透垣に隠れて源氏の帰りを待ちながら、末摘花の弾琴を聴いていた。のちに「君たちは、ありつる琴の音を思し出でて、…人にももて騒がるばかりやわが心もさまあしからむなどさへ、（頭）中将は思ひけり」（①末摘花274）とあることから察すると、この尾行によって頭中将が末摘花に心惹かれるようになり、物語には醜女を競い合う二人の貴公子の様子が描かれる。二人の競い合う様子は、「その後、こなたかなたより文などやりたまふべし。」と始まる、手紙をめぐる逸話（①末摘花275）から窺える。そもそも末摘花に対して「深うしも思はぬことの、かう情なきを、すさまじく」思った源氏だったが、頭中将への競争心を燃やして大輔命婦に「まめやかに」相談するようになったのである（①末摘花275～276）。競争心の刺激ということから、頭中将が源氏と末摘花の関係に大きな貢献をしたと言えようが、まずは頭中将も末摘花に手紙を書いたことに注目したい。頭中将が末摘花に手紙を書き得たことは、彼にも宛先が「故常陸の親王の末にまうけていみじうかなしうかしづきたまひし御むすめ」（①末摘花266～267）だと知られていたことを意味しよう。換言すれば、後をつけられることによって源氏が興味を抱いている女性に関する情報を頭中将に突き止められたということである。無論、末摘花と一夜を過ごした源氏に対して「隠いたまふこと多かり」と言っている頭中将が親友の隠しごとをすべて知ったとは考えられない。繰り返しになるが、源典侍との一件がある以前の彼には源氏の「隠ろへごと」を見あらわすという課題が依然として達成されないまま残されている。そのためだろうか、頭中将が源氏の随身を買って出たことからは、夕顔巻における惟光のように、内部から源氏の隠しごとを暴き出したいという狙いが感じ取れる。

ともあれ、源氏は後をつけられることで、頭中将と醜女を競い合う羽目になった。頭中将に競争心を刺激されることで源氏が末摘花との関係に積極的になったことは右に触れた通りである。そのような展開に引用(イ)で傍線を施した内容が響くことを見逃してはなるまい。早い話だが、頭中将は有能な「随身」として源氏を女性の許に手引きする人物でもあるのである。

頭中将が源氏を女性の許に手引きするのは末摘花巻が初めてではない。頭中将は源氏が夕顔に近寄る際にも貢献していた。惟光から、夕顔に仕える右近と女童が交わした頭中将に関する対話を報告された源氏は、「もし（頭中将ノ）かのあはれに忘れざりし人にや」と思って、「（夕顔ヲ）いと知らまほしげなる御気色」を見せていた（①夕顔150）。源氏は雨夜の品定めで頭中将が忘れかねていた内気な女かも知れないと思い、得体の知らない女性にさらに心惹かれた。頭中将に忘れられない女性への好奇心だろうか、頭中将に対する競争心だろうか、源氏の期待は頭中将が関連していることでさらに膨らんだのである。

(ロ)（源氏ガ）御車に奉るほど、大殿（＝左大臣家）より、「いづちともなくておはしましにけること」とて、御迎への人々、君たちなどあまた参りたまへり。頭中将、左中弁、さらぬ君たちも慕ひきこえて、「かうやうの御供は仕うまつりはべらむと思ひたまふるを、あさましくおくらさせたまへること」と恨みきこえて、「いといみじき花の蔭に、しばしもやすらはずたちかへりはべらむはあかぬわざかな」とのたまふ。岩隠れの苔の上に並みゐて、土器まゐる。落ち来る水のさまなど、ゆゑある滝のもとなり。

（①若紫222～223）

源氏の女性関係における頭中将の関与は、夕顔や末摘花だけではなく若紫との関係からも確認できる。引用(ロ)は左大臣家の者たちが、瘧病の治癒のために北山を訪れた源氏を迎えに来た場面である。「御迎えの人々参りて、（源氏ノ）おこたりたまへるよろこび聞こえ、内裏よりも御とぶらひあり。」（①若紫220）の叙述がすでにあったことに照らすと、左大臣家では桐壺帝より源氏の行方を確認するのが遅かったと考えられる。恐らく、夕顔を連れて某院に隠れた時のように、源氏が行き先を知らせなかったためであろう。ともあれ、物語は左大臣家の迎えによって「この若君（＝若紫）、幼心地に、めでたき人かなと（源氏ヲ）見たまひて、…（女房）「さらば、かの人の御子になりておはしませよ」と聞こゆれば、（若紫ハ）うちうなづきて、いとようありなむと思したり。」（①若紫224～225）とある、若紫の思惟を描き得た。一旦帰途についた源氏を留めることによって、若紫に惹かれる源氏の気持ちが一方的なものではないことが示されたのである。そのような迎えの主軸が頭

中将であることは、帰京した源氏に左大臣が「（北山へ）御迎へにもと思ひたまへつれど、忍びたる御歩きに、いかがと思ひ憚りてなむ」（①若紫225）と語ったことから推察できる。傍線部や点線部の言葉は左大臣家の嫡子として父に替わって北山を訪れた頭中将の発したものだと考えられる。

頭中将の発した点線部の「いといみじき花の蔭に・・・」は、源氏の北山訪問を「三月のつごもりなれば、京の花、盛りはみな過ぎにけり。山の桜はまだ盛りにて、・・・」（①若紫199～200）と語った叙述を背景にし、「宮人に行きてかたらむ山桜風よりさきに来ても見るべく」（①若紫220）と詠んだ源氏の歌と照応する。この「花の蔭」は桜の花蔭を指す表現で、『古今和歌集』の仮名序にある大伴黒主に関する叙述との関連[22]や春を惜しむ躬恒の和歌の引歌[23]がすでに指摘されている。が、右に述べた頭中将登場の意義に注目すると、「雲林院の親王のもとに、花見に、北山の辺にまかれりける時に、詠める」の詞書を有する素性の「いざ今日は春の山辺にまじりなむ暮れなばなげの花の蔭かは」（『古今和歌集』春下95）[24]も看過できないように思われる。常康親王の居所を指す「雲林院の親王のもと」と花見の場所である「北山」とをどのように解釈するかに関する説の多い詞書[25]だが、「花の蔭」の頼もしさを讃えて「春の山辺」へと誘う歌と捉えるのが通説のようである。素性のこの和歌と右の引用の点線部とにおける「花の蔭」がともに北山での花見へ誘う表現となっていることを見逃してはなるまい。なお、桜の喩があてられる若紫[26]が源氏に心惹かれる展開を念頭に置くと、素性の和歌における「花の蔭」の頼もしさも若紫巻に響き渡っているように思われる。すなわち、源氏に対する若紫の心境叙述を導く展開が素性の和歌を経由した頭中将の直感によるということである。

引用(ロ)における頭中将は若紫と源氏を結ばせようとする物語の意志を背負っていると言えよう。換言すれば、引用(ロ)によって源氏の北山来訪が病気治癒から女性の許への忍び歩きへとその性格を改めたということである。それは引用(ロ)の「かやうの御共は・・・」とある傍線部と引用(イ)の「まことは、かやうの御歩きには・・・」とある傍線部の類似からも察せられる。両方とも「かやうの・・・」や「おくら（さ）せ・・・」の表現を用いて同行を許さなかった恨みを訴えるものとなっている。無論、引用(ロ)における頭中将の言葉は、一歩後れた迎えという決まり悪さを紛らわすべく発せられたものであり、たまたま源氏を尾行して発した引用(イ)とは性格を異にするかに見える。だが、引用(イ)の直後に源氏と頭中将がともに左大臣家に向かう内容が繰り広げられることから察すると、そこからも左大臣家の構成員という頭中将の位相が窺えよう。頭中将には左大臣家の構成員として源氏の忍び歩き

を詮索する役割が担わされていたと考えられる。しかしながら、源氏が若紫に心惹かれる内容と引用(ロ)の傍線部との対応から察すると、頭中将には左大臣家の構成員でありながらも源氏を若紫の許に手引きする役割が担わされていたと言える。

第五節　頭中将の二面性

左大臣家の嫡子の頭中将は生活圏において源氏と共有する部分が多く、源氏の観察が容易な立場にいた。だが、彼は葵の上を顧みなかったかつての行動を後悔する様子を確認するまで、源氏を総体的に捉えることができない。葵の上の死があるまでの頭中将は源氏の「すき」と「まめ」とを片面しか目の当たりにすることができなかった。このような頭中将の登場が「まめ」でもなく「すき」でもない源氏像の形象に一助となっていると言えよう。

帚木巻での頭中将は、「軽びたる名」を恐れて源氏が隠していた「すき事ども」を探る人物である。物語は源氏の内面を知っているかのような頭中将の言動を用いることで「隠ろへごと」の露見を恐れる源氏像を築いて行く。無論、源氏は、不義の子冷泉帝出産につながった、藤壺との関係も隠している。だが、露見すると一身の破滅になりかねない藤壺との関係を、世間に知られても一身上の危機にまでは繋がらない女性関係と同一に扱っているとは考えられない。物語は「やむごとなく切に隠したまふべき」（①帚木55）源氏の女性関係を蔵の奥に隠して、「二の町の心やすき」（①帚木56）関係だけに触れさせるために頭中将を登場させたのではないだろうか。

結局のところ、頭中将は源氏の「隠ろへごと」を暴き出そうと努力する役割とともに、源氏を「すき」の世界に導く役割に担わされていた。まるで頭中将は「すきがましきあだ人」という性質で染めて行くかのように、中の品や末摘花・若紫のもとへと源氏を誘う人物でもあったのである。

【注】

(1)武原弘「頭中将論―その人物像の変貌と主題との関連性」『日本文学研究』一九七四年一一月、のち「頭中将とその物語世界」『源氏物語論』桜楓社　一九七六年九月

(2)金孝淑「『源氏物語』玉鬘十帖における「隠ろへごと」の再生産―末摘花巻との対比関係から―」『国文学研究』二〇〇七年六月

(3)重松信弘『源氏物語研究叢書Ⅲ　源氏物語の主題と構造』風間書房　一九八一年一一月

二一七頁

(4)重松信弘氏の注(4)の著書。

(5)高田祐彦「光源氏の忍びの恋―『源氏物語』冒頭諸巻の仕組み」『文学』二〇〇六年九月

(6)他に「隠ろへごと」に関する論として、伊能健司氏が「「帚木三帖」の方法―「隠ろへごと」としての―」で失敗を隠すことに注目した(『中古文学論攷』一九八〇年十一月)。

(7)「かの十六夜のさやかならざりし秋のこと」に関する解釈の問題は、田坂憲二氏の「〈研究手帳〉かの十六夜のさやかならざりし秋の事」(『いずみ通信』一九八六年十一月)を参照した。本稿では作者のケアリスミスだと捉える島津久基の説に従う。

(8)葵の上との結婚生活への不満が帚木三帖の女性関係を導くことの指摘は、伊藤博「葵上」『国文学』一九六八年五月、中川正美「光源氏の時を刻む葵上」『むらさき』二〇〇八年十二月などに見られる。

(9)秋山虔「光源氏論」『王朝女流文学の世界』東京大学出版会 一九七二年六月

(10)伊藤博「源典侍挿話の周辺―紅葉賀・花宴巻断想―」『文学論輯』一九七一年三月、篠原昭二「運命と行為―たがい目の実現をめぐって―」『国文学』一九七一年六月

(11)高木和子氏は「情報操作の政治力」(『男読み 源氏物語』朝日新聞出版 二〇〇八年七月)で、葵の上の兄弟の頭中将に左大臣家の一構成員という立場があることを重視する。

(12)武原弘氏の注(1)の論文。

(13)田畑千恵子「源典侍」『源氏物語講座 第二巻 物語を織りなす人々』勉誠社 一九九一年九月

(14)高木和子「「思考」としてのことば―『源氏物語』の「名」について―」『叢書 想像する平安文学 第4巻 交渉することば』 勉誠出版 一九九九年五月、のち『源氏物語の思考』風間書房 二〇〇二年三月

(15)高橋亨「物語の語り手(1)―帚木三帖の序跋」『講座 源氏物語の世界〈第一集〉 一九八〇年九月

(16)阿部秋生『源氏物語研究序説』東京大学出版会 一九五九年四月

(17)今井久代「夕顔巻の『あやし』の迷路―頭中将五人説を手がかりとして」『国語国文学』一九九六年三月、のちに修正され「夕顔物語の「あやし」の迷路―現実の脈絡とことばの脈絡―」『源氏物語構造論―作中人物の動態をめぐって』(風間書房 二〇〇一年六月)。

(18)森一郎氏は「頭中将論」(『源氏物語作中人物論集』勉誠社 一九九三年一月)で、夕顔

巻において源氏と同次元的世界で活躍していない頭中将を指摘した。

(19)『新編日本古典文学全集』の頭注、なお玉上琢彌氏も『源氏物語評釈』で朧月夜が源氏にとって非常な困難危険を伴う相手だと論じる。

(20)高木和子氏は注(11)の論考で、源氏の正妻の兄弟という頭中将の立場から「あまり深刻な話がバレたのでは具合が悪い」ことを指摘している。

(21)吉海直人「末摘花巻の乳母達」『平安朝の乳母達―『源氏物語』への階梯―』世界思想社 一九九五年九月

(22)玉上琢彌『源氏物語評釈 第二巻』角川書店 一九六六年一月 77～78頁

(23)西耕生「「花のかげ」覚書―夕顔若紫両巻の連続性と躬恒の引歌―」『愛知大学法文学部論集 人文学編』二〇〇七年三月

(24)引用は『新編国歌大観』によるが、読みやすさを図って仮名を適宜に漢字に直した。なお、括弧の中には巻・歌番号を記す。

(25)異説に関しては、竹岡正夫『古今和歌集評釈 古注七種集成』(右文書院 一九八六年十一月)を参照した。

(26)原岡文子「『源氏物語』の「桜」考」『源氏物語 両義の糸―人物・表現をめぐって―』有精堂出版株式会社 一九九一年一月

第二章　若紫登場の意義

―藤壺に対する源氏の情念を中心に―

第一節　序

源氏が生涯にわたって愛した紫の上は、天真爛漫な様子で物語世界に登場してくる。瘧病の治療のために訪れた北山で発見した幼い少女に源氏が心惹かれたのである。彼女が理想の恋人、藤壺に良く似ていたためである。その相似関係は、「親王（＝兵部卿宮）の御筋にて、かの人（＝藤壺）にも通ひきこえたるにや」（①若紫213）と、血の繋がりによって源氏に納得される。この藤壺の「ゆかり」として登場する若紫が源氏にとって掛け替えのない人に成りかわってゆき、その変化がこの物語の長編性を支える[1]一つの軸となることは言い古されたことである。近年の研究では若紫巻から藤壺に区別される若紫の独自性を見出す論もあるが[2]、藤壺に似た幼い若紫という設定には看過できないものがある。本論文で、藤壺に対する源氏の思いの露見と隠蔽に焦点をあてる所以である。

藤壺に対する源氏の思いは、支配しうる若紫の身体と支配し得ない藤壺の身体を重ね合わせる源氏の眼差しからも窺える[3]。が、若紫は、その幼い身体をもって藤壺を想起させる存在にとどまらず、清水好子氏が指摘したように、藤壺と異質な存在ではなく、つねに二重に重なる人物[4]のように思われる。とりわけ、藤壺との密通が語られる以前、源氏が病気治療のために訪れた北山で偶然若紫を発見して心惹かれる展開においては、物語には二人に対する彼の思いが二重写しになっているように思われる。まずはそれに関して考えるが、その際には三谷邦明氏が、

> 第一回の読みはその〈叙述の時間〉に沿って、〈虚構の時間〉―「年立」的なものを想定してよいだろう―を構築して行くことが標的の一つとなるのだが、しかし、その想到した〈虚構の時間〉を〈叙述の時間〉と響き合せることは、二回目以上の読みでしか可能ではないのである。

と、〈叙述の時間〉と〈虚構の時間〉を分離して物語の構造を捉えた方法[5]が有効のように思われる。というのも、若紫巻で密通場面がある以前の藤壺は、「かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや」（①若紫209）や「限りなう心を尽くしきこゆる人」（①若紫207）などとぼやかされたまま登場し、「藤壺の宮、なやみたまふことありて、…」（①若紫230）と、密通場面を切り開く叙述があるまでは源氏との関係が確かめられないためである。すなわち、初め〈叙述の時間〉にのっとって若紫巻の北山の場面を読むと、ぼやかされた誰かの存在には感づくものの、〈虚構の時間〉における源氏の内面は見出せない、というこ

とである。まずは、藤壺に対する絶望的な源氏の情念が存する〈虚構の時間〉に注目して源氏が北山で若紫に思いをうち明ける場面を考え、そこに藤壺と若紫が二重写しになっていることを確かめる。

ところで、物語世界を生きる登場人物たちには、幼い若紫に対する源氏の思いが、「かの人」や「限りなう心を尽くしきこゆる人」と表現される藤壺に起因することは隠されている。随身の惟光さえも「さもかからぬ隈なき御心かな、さばかりいはけなげなりし（若紫ノ）けはひを」（①若紫229）と、若紫に対する源氏の思いが好色から発すると考える。惟光は夕顔・朧月夜・中川の女性などと、源氏の忍び歩きにしょっちゅう顔を出す人物だが、そのような惟光でさえ、否、そのような惟光だからこそ可能な思考だろう。そのような惟光の思惟が、孫の若紫に対する思いをうち明けた源氏の和歌を前に、「この君（＝若紫）や世づいたるほどにおはするとぞ思すらん」（①若紫217）と思う尼君の考えと趣を同じくすることを合わせて考えれば、物語世界を生きる登場人物たちには幼い少女に対する源氏の興味と藤壺の関係が一向に知らされなく、若紫に対する源氏の興味が好色に起因すると思われていると言えよう。藤壺に対する情念を隠すことと若紫の関連性が感じられる。藤壺との関係を隠す源氏の好色に関しては、紅葉賀巻における源典侍との一件を取り上げた伊藤博氏の論考[6]がある。源氏が好色だと思われることによって藤壺との関係が露見されなかった、という伊藤氏の結論には賛同するものの、源氏が世間に好色だと思われる過程においては若紫との関係も考慮する必要があるように思われる。そのことを、若紫に藤壺との関係を隠す役割が背負われていることに合わせて以下に考察する。

第二節　藤壺に対する源氏の情念を表す方法

若紫巻における源氏と藤壺の密通場面には「（藤壺ノ）宮もあさましかりしを思し出づるだに、世とともの御もの思ひなるを、さてだにやみなむと深う思したるに、…」（①若紫231）と、二人がすでに深い関係だったことを仄めかす叙述がある。現行の物語ではそれがあるまで、藤壺に対する源氏の思いが直接窺える箇所は、「心の中には、ただ、藤壺の御ありさまをたぐひなしと思ひきこえて、さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな」（①桐壺49）とある叙述程度である。若紫巻における密通以前、物語は源氏と藤壺がいつ逢瀬をもったかといった事情を語らないまま、「限りなう心を尽くしきこゆる人」の代わりを求める源氏の様子を描いたことになる。輝く日宮巻という欠巻が想定され、そこに源氏と藤壺の恋の進展が取り上げられていた[7]と言われる所以だが、その有無を

確かめる術は現在はないので、ここではまず若紫巻以前の源氏と藤壺の関係が推測できる箇所を押さえておきたい。

若紫巻には藤壺との逢瀬ののち、自邸の二条院に帰った源氏が二三日籠もる内容が、

殿におはして、泣き寝に臥し暮らしたまひつ。御文なども、例の、（藤壺ガ）御覧じも入れぬよしのみあれば、（源氏ハ）つらういみじう思しほれて、内裏へも参らで二三日籠もりおはすれば、また、いかなるにかと（桐壺帝ハ）御心動かせたまふべかめるも、…　（①若紫232）

と語られる。自邸に帰った源氏は藤壺に手紙を送ったものの、初回の逢瀬以来「もの思ひ」にとらわれて源氏を避けていた彼女はそれを一向に受け付けない。そのことによる源氏の失意が藤壺を「つらういみじう」く思うところから窺えようが、源氏はそのような藤壺の反応を承知の上彼女に手紙を送ったのではないだろうか。逢瀬から帰宅した源氏の流す涙が、その絶望的な状況に対する彼の認識を物語っているように思われる。波線部の「泣き寝」に関して『河海抄』は、上洞門院の「逢ふことの今はなきねの夢ならでいつかは君をまたも見るべき」の歌との関わりを指摘する。『新古今集』にはその上同門院の歌が、「一条院かくれたまひにければ、その御ことをのみこひなげき給ひて、ゆめにほのかにみえたまひければ」という詞書きが添えられて、「逢ふことも今はなきねの夢ならでいつかは君をまたは見るべき」（哀傷・811）[8]と伝わる。ともあれ、『河海抄』の指摘によると、藤壺との逢瀬から帰宅した源氏は再会の期し難いことを知っていたことになろう。源氏は自分との関係を「さてだにやみなむ」と思う藤壺を「つらういみじ」く思いながらも、彼女に対して燃えるような情念を抱えていたのである。

ところで、藤壺への情念に苦しんでいる源氏の内面は、右の引用があるまでは知られない。北山の場面における物語はそれを隠したまま、「限りなう心を尽くしきこゆる人」に似る若紫を「かの人の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや」と思う源氏の様子を描いている。先に掲げた、藤壺に似た人を据えたいという桐壺巻における源氏の思惟に照らすと、「かの人」という表現でぼやかされている人物が推察できなくもないが、「明け暮れの慰め」として若紫を求める源氏の思いの切実さは、右に確認した、伝えようのない情念に苦しむ源氏の様子があるまでは察し得ない。

初夜といひしかども、夜もいたう更けにけり。内にも人の寝ぬけはひしるくて、…ほどなく近ければ、外に立てわたしたる屏風の中をすこしひき開けて、（源氏ガ）扇鳴らしたまへば、おぼえなき心地すべかめれど、聞き知らぬやうにやとてゐざり出づ

る人あなり。すこし退きて、（女房）「あやし。ひが耳にや」とたどるを聞きたまひて、（源氏）「仏の御しるべは、暗きに入りてもさらに違ふまじかなるものを」とのたまふ御声のいと若うあてなるに、うち出でむ声づかひも恥づかしけれど、（女房）「いかなる方の御しるべにかは。おぼつかなく」と聞こゆ。（源氏）「げに、うちつけなりとおぼめきたまはむもことわりなれど、

初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ

と聞こえたまひてむや」とのたまふ。（女房）「さらにかやうの御消息うけたまはり分くべき人ももしたまはぬさまはしろしめしたりげなるを、誰にかは」と聞こゆ。（源氏）「おのづから、さるやうありて聞こゆるならん、と思ひなしたまへかし」とのたまへば、入りて聞こゆ。（①若紫215～217）

瘧病の治癒のために北山に訪れた源氏は、偶然藤壺に似た幼い少女を発見する。その発見ののちには、少女の祖母の兄弟の僧都の招きによって源氏が僧坊で一夜を過ごす内容が繰り広げられる。引用は、初夜の勤行のために僧都が席を外した時、源氏が若紫への思いを祖母の尼君にうち明ける場面である。源氏の歌における「初草」や「つゆ」は、若紫を垣間見た時聞いた尼君と女房の贈答歌の表現を踏襲したものである。病気の尼君は、源氏が垣間見ているのも知らないで、「生ひ立たむありかも知らぬ若草をおくらす露ぞ消えんそらなき」と、自分の死後に残される孫娘を心配する気持ちを詠む。そして居合わせていた女房が「初草の生ひゆく末も知らぬ間にいかでか露の消えんとすらむ」と涙ながら返歌する（①若紫208）。「初草」や「つゆ」の言葉を源氏が踏襲したことが窺えようが、源氏が引き継いだのはその言葉だけではあるまい。尼君に対して「あはれにうけたまはる（若紫ノ）御ありさまを、かの過ぎたまひにけむ（母ノ）御かはり思しないてむや。（源氏自身ハ）言ふかひなきほどの齢にて、睦ましかるべき人にも立ちおくれはべりにければ、・・・」（①若紫217～218）と言葉という発する源氏には、かつての自分と同じ境遇に置かれた少女に対する憐憫[9]もあったと考えられよう。すなわち、「旅寝の袖もつゆぞかわかぬ」に見られる源氏の涙からは、若紫の将来を憂慮する尼君や女房の歌と同じく、憐憫が見出せる、ということである。

ところで、源氏が尼君に贈った歌は、言うまでもなく、若紫に対する恋慕をうち明けるものとしても読みとれる。それは、若紫を垣間見した感慨を「たまさかに立ち出づるだに、かく思ひの外なることを見つるよ」と思うところ（①若紫209）や、僧都との対面において「昼の（若紫ノ）面影心にかかりて恋しければ、・・・」（①若紫212）と語られる叙述からも

推測できよう。また、物語はそのような読みを導くかのように、尼君に「この君（＝若紫）や世づいたるほどにおはするとぞ思すらん」（①若紫217）と思わせ、取り次ぎの女房に「さらにかやうの御消息うけたまはり分くべき人ものしたまはぬさまはしろしめしたりげなるを、誰にかは」と言わせている。これらのことから源氏が若紫に対して憐憫とともに恋慕を感じていたと言えよう。が、初草の若葉のような若紫を見てから旅宿りをする自分の袖も涙に濡れて少しも乾かない、という源氏の歌からは、若紫への思いだけでなく、藤壺に対する絶望的な情念も読みとれる。

つらつきいとらうたげにて、眉のわたりうちけぶり、いはけなくかいやりたる額つき、髪ざしいみじううつくし。ねびゆかむさまゆかしき人（＝若紫）かな、と（源氏ハ）目とまりたまふ。さるは、限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり、と思ふにも涙ぞ落つる。（①若紫207）

引用は、北山で源氏が若紫を垣間見る場面だが、彼は若紫の容貌から目を離すことができない。顔・眉・額・髪へと移る源氏の視線からは、幼い少女に理想の恋人を重ね合わせる彼の思いが察せられよう。[10] 藤壺に似た少女を発見した源氏の感激の涙は、先に掲げた、尼君に贈った和歌において「旅寝の袖もつゆぞかわかぬ」と表現されている。桐壺巻において「さやうならむ人をこそ見め、似る人なくもおはしけるかな」と語られた念願が叶った感激の表現だと、まずは言えよう。だが、「限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似たてまつれるがまもらるるなりけり」と、若紫を見守る理由に気づく源氏の思考の方向に注意すれば、彼の涙からは藤壺への絶望的な情念が読みとれる。無論、それは源氏に藤壺への絶望的な情念があることを知ってこそ可能だが、若紫を見守る理由が藤壺に起因することに気づいた瞬間、源氏は絶望的な情念をも改めて感じ始めるようになったのではなかろうか。藤壺に似た若紫を垣間見る以前の源氏は、「（北山ノ）山の桜はまだ盛りにて、入りもておはするままに、霞のたたずまひもをかしう見ゆれば、かかるありさまもならひたまはず、ところせき御身にて、めづらしう思されけり。」（①若紫200）や、源氏が供人たちに「かかる所（＝北山）に住む人、心に思ひ残すことはあらじかし」（①若紫202）と語るところから窺えるように、美しい景色に少しはその気分を紛らわしていた。源氏は、垣間見で藤壺に似た若紫を発見した途端、再び絶望的な情念の苦しみを感じたのではなかろうか。無論、彼には慰められる人を見つけたという喜びもあったはずであろう。苦しみと喜びが交差する源氏の涙が浮上するが、そのような涙の性質を考慮に入れれば、「初草の若葉のうへを見つるより旅寝の袖もつゆぞかわかぬ」の歌も重層的な意味を帯びて来よう。

すなわち、若紫への思いをうち明ける贈歌であると同時に、京を離れた北山でも絶望的な情念に苦しみ続ける心境を表した独詠歌でもある、ということである。

第三節　藤壺との関係を隠す「夢」

前節では、北山の場面における若紫が藤壺に対する源氏の絶望的な情念の表出を支えることを確認したが、北山の場面においては、それと裏腹に、若紫は源氏と藤壺の関係を世間に隠す表現とも関わっているように思われる。

この物語における「夢」は、睡眠時に見るものの他に、男女の情事や登場人物たちの身を置いた現実を喩えるものとしても用いられる。朧月夜と源氏の情交が「はかなかりし夢」（①花宴361）と表現され、明石の君と源氏の関係が紫の上に告げられる際には「あやしうものはかなき夢」（②明石259）だと喩えられている。これらの例から男女の情事が夢に喩えられる例を見出すことができよう。また、登場人物たちが身を置いた現実の喩えとして用いられる例は、葵の上の父の左大臣が源氏の須磨退去を「かかる夢」（②須磨166）だと言うところや、落葉の宮の母一条御息所が婿の柏木の死とそれによる娘の傷心を「夢のやうなること」（④柏木330）として捉えるところがあげられる。「夢」という言葉の豊かな象徴性を示してくれる例だが、若紫巻にはそれらに属さない「夢」が見られる。

前節に引用した、源氏が僧都に招かれて一夜を過ごす場面の始まりだが、そこには、

僧都、世の常なき御物語、後の世のことなど聞こえ知らせたまふ。わが罪のほど恐ろしう、あぢきなきことに心をしめて、生けるかぎりこれを思ひなやむべきなめり、まして後の世のいみじかるべき思しつづけて、かうやうなる住まひもせまほしうおぼえたまふものから、昼の面影心にかかりて恋しければ、（源氏）「ここにものしたまふは誰にか。尋ねきこえまほしき夢を見たまへしかな。今日なむ思ひあはせつる」と聞こえたまへば、うち笑ひて、（僧都）「うちつけなる御夢語りにぞはべるなる。…

（①若紫211～212）

と、僧都と源氏の対面が繰り広げられる。僧都から無常な世と後世に関する話を聞いた源氏は、藤壺との関係を「あぢきなきこと」だと思い、現世だけでなく来世にまで響く煩悩を断ち切るべく、出家にまで思い及んだ。が、彼はそれと同時に昼間垣間見た若紫への興味も感じている。このような思惟からも、源氏が藤壺と若紫を重ね合わせていることが窺えよう。ともあれ、昼間垣間見た若紫を思い出した源氏は、彼女の素性を探るべく僧都に尋ねる。以降、若紫の素性を語る僧都の言葉が続くが、ここでは僧都に「うちつけ」だと

言われた源氏の「尋ねきこえまほしき夢」に注目したい。源氏が実際に夢を見たわけではないので、彼が霊夢に託けて紫の上の素性を聞き出そうとしたと考えられる。その際に用いられる「夢」は、霊夢が信じられる世界観によって導かれたものである、とまずは言えよう。ところが、次に掲げる密通場面でも「夢」が用いられていることを合わせて考えば、「尋ねきこえまほしき夢」からは霊夢が信じられる世界観以上の意味が見出せよう。

何ごとをかは聞こえつくしたまはむ、くらぶの山に宿もとらまほしげなれど、あやにくなる短夜にて、あさましうなかなかなり。

（源氏）見てもまたあふよまれなる夢の中にやがてまぎるるわが身ともがな

とむせかへりたまふさまも、さすがにいみじければ、

（藤壺）世がたりに人や伝へんたぐひなくうき身を醒めぬ夢になしても

思し乱れたるさまも、いとことわりにかたじけなし。（①若紫231～232）

密通に際して源氏と藤壺は右の歌を交わす。そこには、ともに「身」・「夢」が用いられるものの、逢瀬に対する二人の態度は異なっている。源氏が夢の中に溶け入りたいと逢瀬の感激を表現したことに対して、藤壺は世間の知るはずもない夢の中でも逢瀬の露見が恐ろしいと歌っている。藤壺の歌からは、源氏が絶望的な情念に苦しむ根本的な理由が垣間見られるように思われる。彼女は二人の関係が露見することが一身の破滅に繋がりかねないので、源氏を避けていたのである。その逢ってはならない者たちが交わした右の贈答歌においては、『伊勢物語』の六十九段の斎宮と昔男が交わした贈答歌との関連性が指摘されている。(11) 昔男との逢瀬ののち、斎宮は「君や来しわれやゆきけむおもほえず夢かうつつか寝てかさめてか」の歌を贈り、男から「かきくらす心のやみにまどひにき夢うつつとは今宵さだめよ」の返歌をもらう（『新編日本古典文学全集 伊勢物語』六十九段173～174）。斎宮の歌では逢ってはならない人との密会が実感のない夢の中の出来事として表現され、それが引用の源氏の歌に踏まえられている。(12) 藤壺との関係に関する源氏の意識は、帚木巻に自分の噂をする女房たちの話を聞いた彼が、「思すことのみ心にかかりたまへれば、まづ胸つぶれて、かやうのついでにも、人の言ひ漏らさむを聞きつけたらむ時、…」（①帚木95）と思うところから窺える。右の引用における源氏の歌と『伊勢物語』の斎宮の歌は、世間の目を盗んだ逢瀬の感激を実感のない夢の中の出来事として表現したことが類似するのである。

ところで、右の引用では、藤壺の歌を導く、『古今集』に見られる発想も垣間見られる。引用の点線部は、初夏の短い夜の逢瀬が終わることを惜しむ源氏の気持ちに即した叙述だ

が、そこにおける「くらぶの山」は「短夜」とともに暗闇を連想させる。「くらぶの山」が、実感のない短い逢瀬の夜を延ばしたい気持ちを表すと言えようが、それは同時に、二人の関係が世間に露見してはならないことを物語っているように思われる。「くらぶの山」や「短夜」に連想される暗闇が人目を避ける通路となっている、という考えだが、このような発想は、『古今集』の「住の江の岸による浪よるさへや夢の通ひ路人目よくらむ」（恋二・よみ人しらず559）[13]の歌に見られる。この歌では暗闇の「よる」や「夢」が人目を避ける必要のない時空となっていて、和歌の話者はそこでさえ人目を憚って現れない人を恨んでいる。類似する発想は「うつつにはさもこそあらめ夢にさへ人目をよくと見るがわびしさ」（『古今集』恋三・小町656）の歌からも見られる。人目を避ける通路の「夢」という『古今集』の発想が藤壺の歌で裏返しにされていると言えようが、源氏に「くらぶの山」の宿を求めさせ、「夢」の中に溶け入りたいと歌わせたことを考えれば、一層広範な影響が言えるのではなかろうか。

右に確認してきた「夢」における『古今集』の影響を押さえた上で、再び北山における源氏と僧都の対面場面に戻る。源氏が「夢」に託けて若紫の素性を訪ねるところからは、先に述べたように、霊夢の信じられる物語の世界観を見出すこともできる。だが、より注目すべきことは「夢」という言葉によって藤壺に対する源氏の情念が僧都に隠されることではなかろうか。その対面で、僧都から「世の常なき御物語、後の世のことなど」を聞いた源氏は、「わが罪のほど恐ろしう、…」の点線部に見られたように、藤壺との関係による罪業の深さを知り出家にまで思い及んでいる。にもかかわらず、彼は「限りなう心を尽くしきこゆる人にいとよう似」た若紫の素性を聞き出す。「かの人（＝藤壺）の御かはりに、明け暮れの慰めにも見ばや」という思いに発する行動であることを念頭におけば、藤壺への情念をも隠している「夢」という言葉が浮かんでくるのではなかろうか。このことからも若紫巻での源氏と藤壺の関係には人目を避ける通路の「夢」という『古今集』の発想が底流していると言えよう。そのような「夢」に導かれて素性が明らかになる若紫には、人目を避ける通路としての「夢」という発想を受けついでいるように思われるが、次節では、それを含めて、前節で確認したような藤壺に対する源氏の情念を表す位相に関して考える。

第四節　紅葉賀における若紫

源氏が北山で若紫を発見した年の十月には朱雀院の行幸があった。紅葉賀巻はそれに備

えて内裏で行われた試楽より書き起こされる。行幸に同行できない女御や更衣たち、中でも藤壺に対する桐壺帝の配慮による催しで、そこで源氏は頭中将とともに青海波を披露する。その様子に人々は感涙し、藤壺も源氏の素晴らしい容貌に感嘆する。その感嘆は翌朝まで続き、源氏が珍しくも藤壺から返書をもらう機縁となる。紅葉賀巻には、他に若紫巻での密通によって懐妊した藤壺の出産、源氏と不義の子の対面などが左大臣家の騒ぎや若紫の成長を語る記事を挟んで続き、藤壺と源氏の関係による重苦しい空気を打ち返すかのように老女の源典侍を巡る源氏と頭中将による笑劇が繰り広げられる。この源典侍が中心となった笑劇は一見唐突に見えるものの、それまで語られてきた物語の内容と無縁なものではない。その意義に関しては伊藤博氏が、源氏と藤壺の関係に対する桐壺帝の不審を払い落とすところにあると論じている。(14) それまで断層のある巻として読まれてきた紅葉賀巻に一貫した流れがあることを証した論で、氏の結論には大いに肯かれる。が、氏の論においては若紫と源氏の関係が平面的なものとして扱われる面もあるように思われる。

伊藤氏は、二条院に人を迎えたという噂を聞いた桐壺帝の反応に関して、源氏が「口を開いて若草の君のことをうち明ければ、なぜそうした童女をあえて迎えたか不審とされるは必定である。…帝も木偶ではない。すでに藤壺の兄兵部卿宮から一女失踪の件を耳にしていたことは十分考えられるし、いかに信じているとはいえ先日の藤壺・源氏の挙措の乱れに全く気づかぬというのはかえって奇妙であろう。」と説き、若紫の実体が桐壺帝に知らされることで藤壺と源氏の秘密が露見しかねないことを示唆する。該当場面はのちに掲げるが、若紫にはそれとまったく裏腹な役割も担わされているのではなかろうか。そのことを確かめるために、朱雀院の行幸ののちに語られる左大臣家の騒ぎの様子を押さえておく。

朱雀院の行幸ののち、藤壺の里下がりとともに語られる左大臣家の騒ぎの様子は、

（藤壺ノ）宮は、そのころまかでたまひぬれば、例の、隙もやと（源氏ハ）うかがひ歩きたまふを事にて、大殿（＝左大臣家）には騒がれたまふ。いとど、かの若草尋ねとりたまひてしを、「二条院には人迎へたまふなり」と人の聞こえければ、いと心づきなしと思いたり。うちうちのありさまは知りたまはず。（①紅葉賀316）

のところに窺える。源氏は、懐妊のために里下がりした藤壺に逢える機会を窺い歩くのに余念がなく、左大臣家では源氏の来訪がないことに騒ぐ。その頃、左大臣家には源氏が二条院に女を迎えたという噂が聞こえてくる。若紫巻に「（二条院ノ西ノ対ハ）うとき客人などの参るをりふしの方なりければ、男どもぞ御簾の外にありける。（源氏ガ）かく人迎

へたまへり、とほの聞く人は、「誰ならむ。おぼろけにはあらじ」とささめく。」（①若紫256～257）と語られる叙述に照らして考えると、噂が二条院の客人によって広がったことが推測できよう。ともあれ、源氏が二条院に女を迎えたという噂を聞いた左大臣家の視線に即して言えば、源氏の来訪がないのはその女が原因である、ということになろう。ここからも藤壺と若紫が重ねられていることが窺えよう。さらに、

かうやうに（若紫ニ）とどめられたまふをりをりなども多かるを、おのづから漏り聞く人、大殿（＝左大臣家）に聞こえければ、「誰ならむ。いとめざましきことにもあるかな。今までその人とも聞こえず、さやうにまつはし戯れなどすらんは、あてやかに心にくき人にはあらじ。内裏わたりなどにてはかなく見たまひけむ人をものめかしたまひて、人や咎めむと隠したまふなり。心なげにいはけて聞こゆるは」など、さぶらふ人々も聞こえあへり。（①紅葉賀334）

と語られるところを視野に入れれば、若紫に関する噂によって藤壺との関係が世間から隠されたとも言えよう。女房たちは、源氏の足を葵の上から遠のかせた二条院に迎えられた人が身分の高い教養ある人ではないかと憂慮していたようで、その正体が「心なげにいはけ」た人だと知って安堵する様子である。傍点を付したところから噂を推察すると、源氏が宮中あたりで見つけた思慮の足らない子どもっぽい人を、世間にとやかく言われはしないかと隠している、という内容らしい。この噂は若紫を盗み出す際の源氏が「いかにせまし、聞こえありて、すきがましきやうなるべきこと、人のほどだにものを思ひしり、女の心かはしけることと、推しはかられぬべくは世の常なり」（①若紫252）と憂慮していたことを連想させる。左大臣家の女房たちは、源氏が予想していた通り、子どもっぽい人を迎えたと陰口をたたいている。源氏が藤壺との対面の機会を窺い歩くことから始まった左大臣家の騒ぎが、若紫に関する噂によって静まったと言えよう。帚木巻に「大殿（＝左大臣家）には絶え絶えまかでたまふ。忍ぶの乱れや、と疑ひきこゆることもありしかど、…」（①帚木53）と語られる叙述に照らして考えると、紅葉賀巻の以前も左大臣家では源氏の女性関係に関する疑念があり、そのために引用においても源氏がまともな相手でもない人に心奪われていることが信じられたと思われる。が、このような左大臣家の女房たちの反応は、直後に語られる桐壺帝の反応と対照的である。

内裏にも、かかる人ありと聞こしめして、「いとほしく（左）大臣の思ひ嘆かるなることも、げに、ものげなかりしほどを、おほなおほなかくものしたる心を、さばかりのことたどらぬほどにはあらじを、などか情なくはもてなすなるらん」とのたまはす

れど、かしこまりたるさまにて、御答へも聞こえたまはねば、心ゆかぬなめりといとほしく思しめす。さるは、すきずきしううち乱れて、この見ゆる女房にまれ、またこなたかなたの人々など、なべてならずなども見え聞こえざめるを、「いかなるものの隈に隠れ歩きて、かく人に恨みらるらむ」とのたまはす。（①紅葉賀335）

引用は、二条院に据えられた人に関する噂を聞いた桐壺帝が源氏と対面する場面である。これに関する伊藤氏の論を先に紹介したが、そこで指摘されているように、確かに引用においては若紫によって源氏と藤壺の関係が露見される可能性が示唆されている。源氏が「まめにおはしますともて悩」んでいる桐壺帝（①末摘花270）には、「すきがまし」さゆえに二条院に思慮分別の足らない子どもっぽい人を据えたことが信じ難い。藤壺への情念を慰める代わりという若紫の位相を適確に見抜いた推察である、とまずは言えよう。だが、桐壺帝が源氏と藤壺の関係に感づいているか否かは曖昧である。桐壺帝が「いとほしく大臣の思ひ嘆かるなることも・・・などか情なくはもてなすなるらん」と、左大臣に対して思いやりなく振る舞う源氏を詰るかのように訓戒した言葉からは、葵の上と源氏の結婚を申し出た帝の窮屈が感じられるものの、「いかなるものの隈に隠れ歩きて、かく人に恨みらるらむ」と続く言葉を視野に入れると、「まめ」である源氏が左大臣家から恨まれることを心配して発したもののように見える。が、のちの若菜下巻で柏木と女三の宮の密通を知った源氏が「故院の上（＝桐壺帝）も、かく、御心には知ろしめしてや、知らず顔をつくらせたまひけむ」（④若菜下255）と振り返ることに照らして考えると、彼にとっては桐壺帝の言葉が自分の犯した不義を知って発せられたもののように聞こえたようである。そのことは、

例の、中将の君（＝源氏）、こなた（＝藤壺ノ御殿）にて御遊びなどしたまふに、（桐壺帝ガ若宮ヲ）抱き出でたてまつらせたまひて、「皇子たちあまたあれど、そこをのみなむかかるほどより明け暮れ見し。されば思ひわたさるるにやあらむ、いとよくこそおぼえたれ。いと小さきほどは、みなかくのみあるわざにやあらむ」とて、いみじううつくしと思ひきこえさせたまへり。中将の君、面の色かはる心地して、恐ろしうも、かたじけなくも、うれしくも、あはれにも、かたがたうつろふ心地して、涙落ちぬべし。物語などして、うち笑みたまへるがいとゆゆしううつくしきに、わが身ながらこれに似たらむは、いみじういたはしうおぼえたまふぞあながちなるや。（藤壺ノ）宮は、わりなくかたはらいたきに、汗も流れてぞおはしける。中将は、なかなかなる心地のかき乱るやうなれば、まかでたまひぬ。（①紅葉賀329）

と語られる場面においても言えよう。右は源氏が密通によって生まれた若宮と内裏で初めて対面する場面である。「あさましきまで紛れどころなき（若宮ノ）御顔つきを、（桐壺帝ハ）思しよらぬことにしあれば、また並びなきどちはげに通ひたまへるにこそは」（①紅葉賀328）と語られる桐壺帝の思惟から考えると、点線部の言葉からは、源氏に似た若宮を得た帝の喜びが読みとれる。が、後ろめたい秘密を隠して若宮を抱いた源氏は、その言葉を聞いて万感交到る。彼は、初めてわが子を抱いた感激と、その子の誕生に纏わる秘密が桐壺帝に感知されるかも知れない、という畏怖を同時に感じている。これらのことから、紅葉賀巻においては桐壺帝の言葉が源氏の内面における秘密露見の危機を照らし出していると言えよう。先に掲げた桐壺帝との対面場面で物語は、「いかなるものの隈に隠れ歩きて、かく人に恨みらるらむ」と言われた源氏の内面を語らないが、恐らく源氏は、右の場面以上に畏怖を感じていたであろう。藤壺の代わりとして若紫を迎えたという、誰も知らないはずのことを桐壺帝が推察したのである。源氏が「まめ」だと思われるかぎり、幼くして迎えられた若紫は、藤壺に対する源氏の情念を露見させる危険を伴う。源典侍の一件を通して桐壺帝が源氏の「すきがまし」さを目撃する展開は、藤壺と源氏の関係を隠すだけでなく、以降に源氏の妻となる若紫が物語世界で闊歩するためにも必要だったのであろう。

ところで、二条院に人を迎えた源氏の「すきがまし」さに対する桐壺帝の不審が示すのは、若紫によって藤壺に対する源氏の情念が露見する可能性だけではないように思われる。源氏が二条院に子どもっぽい人を迎えたという噂を聞いた左大臣家の女房たちと桐壺帝の反応が対照的であることはすでに述べたが、桐壺帝の不審はそれまで世間で疑いなく受け止められていた「すきがまし」い源氏像に対するものでもある。そこには源氏が相応しくない相手に関わるはずがないという思惟が横たわっていようが、この桐壺帝の思惟は、紅葉賀巻でその成長ぶりが記される若紫が「まめ人」の源氏に愛される人物になることをも予見するものでもあるのではなかろうか。すなわち、過去と現在と未来との抜き差しならぬ連関を意味づける会話の言葉[15]のような働きが、源氏の「すきがまし」さに対する桐壺帝の不審からも見出せる、ということである。

五、結

以上、若紫巻から紅葉賀巻までを射程に入れて、藤壺に対する源氏の情念を表し、またそれを隠す若紫の位相を確認した。彼女は藤壺に対する源氏の絶望的な情念を表しながら

物語世界に登場する。それを通して物語は若紫に、藤壺に対する源氏の情念を物語世界に露見させかねない位相があることを示したと思われるが、幼い彼女にはそれとまったく対極に位置する位相もある。

人目を避ける通路の「夢」という『古今集』の発想に導かれて素性が明かされる若紫は、紅葉賀巻ではその表現が担っていた役割を受けついだかのように、藤壺と源氏の関係を世間から隠す。その幼さをもって世間に源氏を「すきがまし」いと思わせることに一助とする。が、源氏が「まめ」だと思われるかぎり、若紫は藤壺に対する彼の情念を露見しうる存在である。源典侍の一件によってその可能性が消え去ったことは、すでに紹介した伊藤氏の指摘の通りだが、源典侍の一件は以降の物語世界を闊歩する若紫のためでも必要だった。源氏を世間に「すきがまし」いと思わせることによって、物語は若紫から藤壺の「ゆかり」という秘密露見の危険性を取り除き、彼女に個性を発揮させる準備をしたのではなかろうか。

【注】

(1)鈴木一雄「源氏物語における“ゆかり”について」『むらさき』一九六五年十一月、横井孝「「ゆかり」の構造―朝顔の巻をめぐって」『平安文学研究』一九七四年七月、広田収「源氏物語における「ゆかり」から他者の発見へ」『中古文学』一九七七年十月、鷲山茂雄「源氏物語の一問題―紫のゆかり・形代のこと―」『日本文学』一九七九年八月、など。

(2)長瀬由美「若紫について」『国語と国文学』二〇〇一年四月

(3)河添房江「〈ゆかり〉の身体・異形の身体」『源氏物語試論集 論集平安文学 第四号』勉誠社 一九九七年九月

(4)清水好子「藤壺宮」『源氏の女君 増補版』塙新書 一九六七年六月、なお、原岡文子氏は、「若紫の巻をめぐって―藤壺の影」で、若紫巻が「あらゆる意味で藤壺を裏側に大きく想起させる巻であるからこそ、かの夢のごとき逢瀬の場面がみちびかれることになった」と論じた（『共立女子短期大学文科紀要』一九八二年二月）。

(5)三谷邦明「帚木三帖の方法―〈時間の循環〉あるいは藤壺事件と帚木三帖」『国語と国文学』一九八四年十一月

(6)伊藤博「源典侍挿話の周辺―紅葉賀・花宴巻断想―」『文学論輯』一九七一年三月、のち『源氏物語の原点』明治書院 一九八〇年一一月、他に源典侍の一件に関して類似す

る意義を見出す論としては、篠原昭二氏の「運命と行為―たがい目の実現をめぐって―」（『国文学』一九七一年六月）がある。

(7) 吉岡曠「源氏物語「輝く日の宮」巻について」『学習院大学文学部研究年報』一九六〇年三月、のちに加筆して「「かゝやく日の宮」巻について」『源氏物語論』笠間書院 一九七二年十二月、池田勉「かがやく日の宮」論―原桐壺巻の成立―」『講座源氏物語の世界 第一集』有斐閣 一九八〇年九月

(8) 引用は『新編国歌大観』によるが、読みやすさを図って漢字と仮名の表記を変えた。

(9) 増田繁夫「紫上の妻としての地位―十世紀末の貴族社会の結婚・夫婦関係―」『源氏物語の展望 第一輯』三弥井書店 二〇〇七年三月

(10) 河添房江氏の注(3)の論文。

(11) 石川徹氏は『古代小説史稿』（刀江書院 一九五八年五月）で「夢」・「うつつ」という表現の類似を指摘される。

(12) 玉上琢彌氏『源氏物語評釈 第二巻』角川書店 一九六五年一月 101頁

(13) 引用は『新編国歌大観』によるが、読みやすさを図って漢字と仮名の表記を変えた。

(14) 伊藤博氏の注(6)の論文。

(15) 秋山虔「表現の方法Ⅰ 状況と会話・内話」『国文学』一九百七七年一月

第二部　壮年期の光源氏像

第一章　六条御息所の再登場

―母と女の位相に注目して―

第一節　序

源氏物語の第二部世界を読んでいると不可思議な内容に遭遇する。澪標巻で亡くなることで物語世界から退場したはずの六条御息所が死霊となって再び登場してくるのである。怨念を持った存在が平安時代にしばしば取り沙汰されたことから、紫の上の発病や柏木による女三の宮との密通を繰り広げる際に六条御息所の死霊は都合の良い存在だったと考えられる。だが、単に場面転換のために設けられた装置であるならば、その死霊を必ずしも六条御息所に限定する必要はないはずである。にもかかわらず、若菜下巻の物語は死霊の存在を六条御息所に特定した。

若菜下巻における死霊について、六条御息所の再登場という点からその意義を考察した先行研究としては大朝雄二氏の論考(1)をあげることができる。氏は、六条御息所を再登場させることで紫の上の発病や柏木による密通事件が光源氏の絶対性の衰退として位置づけられたと論じるものの、その契機が恋人の死霊という個人的なものであるためにその衰退は源氏の内面にのみ関わるものと論じた。登場人物たちの内面が繋がりを得ない第二部世界で再び登場してきた六条御息所の意義を、あくまで源氏個人の内面に限定して捉える氏の論に首肯されるところもあるが、個の内面の問題へ還元した物語を、源氏の衰退などに結びつけることにはいささかの疑問が残る。

若菜下巻の六条御息所を考えるに際しては、物語が彼女に付与した二つの性質に注目したい。六条御息所は人間苦にまで連なる苦悩を抱えた女(2)であると同時に、源氏の栄華獲得にあたって大きな働きをする秋好中宮の母でもある。物語はそのような二つの性質を操りながら展開しているように思われる。六条御息所の二つの性質に注目した論としては沢田正子氏や奥村英司氏の論考(3)がある。沢田氏は、源氏物語における母性の意味と主題との関わりを究明する論考において、女の業が極めて強烈に問われている六条御息所にも母性があることを論じた。氏の論考では、六条御息所が源氏の栄華を支えることと、源氏によっては彼女の魂が救われないことを論じたところに大いに首肯される。一方、奥村氏は、沢田氏と同じく、娘の斎宮女御にその人生を受け継がせることを指摘したのちに、その時点を母の死んだ秋を好むという属性を付与された薄雲巻に特定する。甚だ示唆に富む論考であり、本稿ではこれらの論を踏まえて、六条御息所に付与された二つの性質が物語展開に

いかに関わっているかを考察する。

第二節　六条御息所の伊勢下向

葵巻には、夕霧を出産した葵の上が六条御息所の生霊に取り憑かれて亡くなり、妻を亡くした源氏が紫の上と新枕を交わすことなどが語られる。そのような展開においては六条御息所が、葵の上とともに物語世界から消え去ることで紫の上を源氏の妻に位置づける役を担っていると言えよう。だが、六条御息所という人物の場合は、高田祐彦氏の指摘したように、物語展開と女の苦悩とを結びつけるところにより大きな意義を見出すべきであろう。[4] 夕顔巻で「六条わたり」の女として登場していた六条御息所が葵巻で据え直される所以は、まさにそこにあるように思われる。

まことや、かの六条御息所の御腹の前坊の姫君、斎宮にゐたまひしかば、大将（＝源氏）の御心ばへもいと頼もしげなきを、幼き御ありさまのうしろめたさにことつけて、下りやしなまし、とかねてより思しけり。（②葵18）

葵巻には「六条わたり」に住んでいた高貴な女性が実は前坊との間に娘を設けた御息所であることや、その娘が斎宮に卜定されていることが突然語られる。そして六条御息所が娘とともに伊勢へ下ることを希望していることも新たに示される。「六条わたり」の女が六条御息所に据え直されたとたん、伊勢下向を希望する人物となったのである。この据え直しには、『河海抄』以来指摘されてきた通り、史実の人物、斎宮女御徽子が投影されている。

重明親王の娘であり、村上天皇の女御だった斎宮女御徽子は天皇の没後に斎宮に卜定された娘の規子に付いて伊勢に下向する。それは『日本紀略』の貞元二年（九七七年）九月十七日の記事に「伊勢斎王母女御相従下向、是無先例、早可令留者。」[5] と記されるところに確認できる。承平七年（九三七年）に朱雀朝の斎宮として伊勢下向した経験を持つゆえに斎宮女御と呼ばれた彼女にとっては二度目の下向だった。その際の彼女の感慨は、「世にふればまたも越えけり鈴鹿山昔の今になるにやあるらん」（『斎宮女御集』263）[6] と、娘とともに下向する途上で詠んだ歌に垣間見られる。『拾遺集』にも見えるこの和歌には四十年を隔てた再びの下向に対する感慨が窺え、十四年ぶりに禁中に入る六条御息所の感慨を詠んだ「そのかみを今日はかけじと忍ぶれど心のうちにものぞかなしき」（②賢木93）の和歌はこの斎宮女御の歌を想起させる。[8] が、徽子には、「鈴鹿山音に聞きける君よりも心の闇に惑ひにしかな」（『斎宮女御集』132）とある歌に見る如く、娘を思う母親の気持ちも

あったと思われる。徽子の歌が「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」（『後撰集』雑一1102）[9]とある、藤原兼輔の歌の表現を引いたことは言うまでもない。

そのような徽子が六条御息所に重ねられるのは、賢木巻に「親添ひて下りたまふ例もことになけれど、いと見放ちがたき（娘ノ）御ありさまなるにことつけて、うき世を行き離れむと思す」（②賢木83）と語られる内容が、娘に同行した伊勢下向の前例がないとする『日本紀略』の徽子の記述と同じくするためであろう。

娘を思う徽子女王の「心の闇」も、一見すると、右の引用に「幼き御ありさまのうしろめたさ」とある部分や賢木巻の「いと見放ちがたき（娘ノ）御ありさま」とある箇所に見る六条御息所の親心に対応するかに見える。ところが、傍点を施した「ことつけて」とある言葉からも確認できるように、六条御息所の親心は冷淡な源氏から逃れる口実に過ぎない。[10]まずは徽子女王の准拠は、六条御息所が源氏から逃れられるようにするために必要な設定だった、と言えよう。

ところで、六条御息所は源氏の冷遇から離れ去ることを希望するものの、それを潔く決心することができない。六条御息所には「人笑へ」への憂慮と男への愛情のために、源氏から離れ去ることができないのである。そのような六条御息所の心境を物語は「（源氏ヲ）つらき方に思ひはてたまへど、今はとてふり離れ下りたまひなむはいと心細かりぬべく、世の人聞きも人笑へにならんことと思す。」と伝える（②葵30～31）。世間に噂されていた源氏の冷淡な待遇から逃れるために伊勢下向を考慮するものの、六条御息所にはその下向によって源氏に見捨てられたと噂されるのではないかと心配だった。六条御息所には、源氏から離れるにしても、彼の側に留まるにしても世間の視線が苦しく感じられていたのである。無論、彼女の苦しみは世間体を意識することだけに止まらない。

うちとけぬ朝ぼらけに（源氏ガ）出でたまふ御さまのをかしきにもなほ（六条御息所ハ）ふり離れなむことは思し返さる。やむごとなき方（＝葵ノ上）に、いとど心ざし添ひたまふべきことも出で来にたれば、一つ方に思ししづまりたまひなむを、かやうに待ちきこえつつあらむも心のみ尽きぬべきこと、なかなかもの思ひのおどろかさるる心地したまふに、（源氏カラノ）御文ばかりぞ暮つ方ある。（②葵34）

葵の上側との車争い事件で屈辱を覚えた六条御息所は物思いに乱れ、そのような彼女を源氏が見舞いに訪れる。右には見舞いに来てくれた源氏の帰りを見送る六条御息所の心境が綴られている。源氏の美しさに改めて魅せられた六条御息所は、源氏から離れて伊勢へ下ることを躊躇せずにはいられなかった。が、彼女はすぐさまに、葵の上に子供が生まれ

るとますます源氏を待ち続けるしかなくなる自分の境遇に思い至る。そのような彼女の苦悩が「袖ぬるるこひぢとかつは知りながら下り立つ田子のみづからぞうき」（②葵35）という一首の和歌に凝縮されている。男に顧みられないことに苦しみながらも愛し続けるしかない絶望感を表現すべく、物語が源氏との別離を決めかねる六条御息所の苦衷を描いたと言えよう。

ところが、源氏と実際に別れるようになる展開においては、六条御息所の伊勢下向は自主的選択というより、やむを得ない選択となっている。それは、

…大殿の君（＝葵ノ上）も亡せたまひて後、さりともと、世人も聞こえあつかひ、宮の内にも心ときめきせしを、その後しも（源氏ガ）かき絶え、あさましき御もてなしを（六条御息所ハ）見たまふに、（源氏ニハ）まことにうしと思すことこそありけめと（六条御息所ハ）知りはてたまひぬれば、よろづのあはれを思し棄てて、ひたみちに出で立ちたまふ。（②賢木83）

と語られる、賢木巻の巻頭から窺えよう。物語は源氏の訪れがなかったために、六条御息所が「よろづのあはれを思し棄てて」伊勢下向を決心したと伝える。だが、右の傍線部からも分かるように、それを決心する以前の六条御息所には葵の上に代わる存在になり得るという期待があった。六条御息所は生霊になったことを「わが身ながらだに疎ましう」思いながらも（②葵42）、源氏の妻になることに期待をかけていたのである。そのような期待があったにもかかわらず、彼女はついに伊勢下向を選択せざるを得ない。「まことにうしと思すことこそありけめ」と、源氏が生霊になった自分に対する嫌悪感を抱いていると知ったためである。源氏の嫌悪感を察知した六条御息所には、男のそばに留まる選択肢が残されていなかったわけで、そのような別離は須磨に流謫した源氏が「あはれに思ひきこえし人（＝六条御息所）を、一ふしうしと思ひきこえし心あやまりに、かの御息所も思ひうむじて別れたまひにし」（②須磨194）と想起するところによって追認されよう。源氏との別離において娘が斎宮に卜定されたことを理由に源氏を離れるという設定は、御息所の離京という物語のなめらかな展開を保証するとともに、なおも源氏への愛執を断ち難く別離を悲しむ六条御息所を造型するにも有効だったのである。

六条御息所の伊勢下向の決意が語られたのちに、物語には源氏による秋の野宮訪問が設けられる。源氏は、桐壺院の病気もあり慌ただしい時期であったが、「（六条御息所ガ自分ヲ）つらきものに思ひはてたまひなむもいとほしく、人聞き情なくやと思しおこして」（②賢木84）野宮を訪れる。野宮の対面における源氏の心境は「あはれと思し乱るること限り

なし」（②賢木88）と叙されたところに端的に表わされているが、そのような感情の高潮をもたらした対面が、実は相手や世間から薄情者に思われまいという意識的努力に導かれたものだった。一方、六条御息所の心境の変化は「やうやう今はと思ひ離れたまへるに、さればよと、なかなか心動きて思し乱る。」（②賢木88）と語られる。源氏と対面した六条御息所は別離の決意が再び揺らいだのである。とは言うものの、六条御息所の伊勢下向は「うち返し定めかねたまふべきことならねば」（②賢木90）とあるように、避けられないものとなっていた。六条御息所は目前に迫った源氏との別離に茫然とするしかない。そのような六条御息所の心境は、

（源氏ガ）旅の御装束よりはじめ人々のまで、何くれの御調度など、いかめしうめづらしきさまにて、とぶらひきこえたまへど、（六条御息所ハ）何とも思されず、あはあはしう心うき名をのみ流して、あさましき身のありさまを、今はじめたらむやうに、（伊勢下向ガ）ほど近くなるままに、起き臥し嘆きたまふ。斎宮は、若き御心に、不定なりつる御出立のかく定まりゆくを、うれしとのみ思したり。　（②賢木90～91）

と、源氏から餞別の品々を贈られた時の反応に確認できる。野宮から帰宅した源氏は後朝の文とともに伊勢下向の際に必要な衣類や調度を贈った。物語は源氏から贈られた品々を前に「何とも思されず」にいる女の様子を通して別離に対する女の衝撃を語る。己の世間体を意識した源氏の訪問が六条御息所の心に波紋を起こし、再び彼女を苦悩の世界に突き戻しているかのようである。右の引用ではそのような六条御息所の様子が、「若き御心に、不定なりつる御出立のかく定まりゆくを」喜ぶ娘によって照射されることを押さえておきたい。そして、そのような斎宮の様子が伊勢下向の途上で詠んだ徽子の「世にふればまたも越えけり・・・」という和歌に対する返歌に見る、規子の様子に似通うことも押さえておく。「鈴鹿山しづのをだまきもろともにふるにはまさることなかりけり」（『斎宮女御集』264）という歌を詠んで母との同行を喜ぶ規子の様子は、右の引用における斎宮の様子に類似する。が、徽子とその娘が伊勢下向の途上で歌を交わしたという事実は、源氏が伊勢に下って行く六条御息所と和歌を交わす設定（②賢木94～95）に投影されているのではないだろうか。物語は斎宮女御徽子を准拠にしながらも、それをずらしながら源氏と六条御息所の関係を描いたと言えよう。

第三節　娘に内在化される女人苦

前節では斎宮女御徽子を准拠とする六条御息所の伊勢下向が、実は源氏に対する彼女の

愛執を引き立てることを確認した。引き続いては、澪標巻と薄雲巻を中心に六条御息所の母親としての側面が導く物語の変化に注目したい。

澪標巻には朱雀院の譲位と冷泉帝の即位、源氏の内大臣就任、明石の姫君誕生などの事件が物語られる。これらの事件から察せられるように、澪標巻からの物語は源氏にあてられた予言の実体化や、その準備として政治界に復権された源氏の様子を語ってゆく。そのような展開の中で六条御息所母娘が上京していることが、「まことや、かの斎宮もかはりたまひにしかば、・・・」（②澪標309）と語られる。娘の前斎宮が源氏の養女として冷泉朝の中宮になる以降の展開に鑑みると、澪標巻では御息所の帰京よりも前斎宮の帰京を取り上げることに眼目が置かれたと言えよう。帰京後まもなくして病で命を落とす六条御息所の上京は、以降の展開を導くべく、娘を源氏に託すための再登場なのである。

ここで前斎宮を源氏の養女に据えることの意義に関して少し触れておきたい。権力を基盤にして栄華を獲得してゆく源氏にとって養女の前斎宮が重要な意味を持つのは、彼女が不義の子冷泉帝に対する支援の形式に変化をもたらすためである。言い換えれば、世間の認識する源氏権力の根拠が、桐壺院の遺言に発する弟への後見から、養女の入内による、婚姻関係に基づく後見に変わったということである。このように摂関制下の実態に近づけることによって、源氏権力のリアリティーが高まったことは田中隆昭氏の指摘[11]通りである。ちなみに、絵合巻における弘徽殿女御側との対立もそのような後見の形式に支えられてこそ可能だったであろう。ともあれ、史実のリアリティーを虚構世界に取り入れたことの意義は、冷泉帝誕生に纏わる秘密を保持することから求められるのではないだろうか。冷泉帝が源氏権力の出発点であることは疑いを許さないが、その不義の子の誕生に纏わる秘密は、源氏の権力を脅かし得る致命的な弱点でもある。源氏権力を語る物語としては、その弱点を補う論理が必要であり、それを養女の前斎宮と冷泉帝の婚姻という、現実の論理が担っていると言えよう。考察の本題とさほど関わらないために、この問題にはさらに深入りはしないが、前斎宮を源氏の養女に位置づけるために、物語が娘の行く末を心配する六条御息所の母親としての心情を取り入れたこと[12]を見逃してはなるまい。

（六条御息所ノ死後娘ガ）心細くてとまりたまはむを、かならず事にふれて（源氏ハ）数まへきこえたまへ。また見ゆづる人もなく、たぐひなき御ありさまになむ。かひなき身ながらも、（六条御息所ガ）いましばし世の中を思ひのどむるほどは、とざまかうざまにものを思し知るまで見たてまつらむとこそ思ひたまへつれ

（②澪標310～311）

右の引用は、病気になって出家した六条御息所が見舞いに来てくれた源氏に残す遺言である。衰弱した体を脇息にもたげていた六条御息所には、几帳の向こうから源氏の泣き声が聞こえた。その時の御息所の様子を物語は「（源氏ガ）かくまでも思しとどめたりけるを、女（＝六条御息所）もよろづにあはれに思して、斎宮の御事をぞ聞こえたまふ。」（②薄雲310）と語る。「女」という表現によって源氏と六条御息所の男女関係が強調されること[13]には注意して良かろう。その表現から、なおも源氏に心惹かれる六条御息所の様子が垣間見られるためである。ともあれ、源氏に感動した六条御息所は涙ながら右の引用の言葉を発して娘を託した。その末尾に見る彼女の思惟は、冷泉帝に入内させる思惑から前斎宮を「ものの心知る人」（②澪標320）だと語る源氏のそれと対照的である。「ものを思し知らない娘のためにもっと世話をしてあげたかったと語る六条御息所の言葉からは、娘の行く末を心配する母親の心情が読み取れるのである。

娘の行く末を心配する母親の心情は、娘を源氏に託した六条御息所が、

(A)いと難きこと。…うたてある思ひやりごとなれど、かけてさやうの世づいたる筋に思しよるな。うき身をつみはべるにも、女は思ひの外にてもの思ひを添ふるものになむはべりければ、（娘ニハ）いかでさる方をもて離れて見たてまつらむと思うたまふる　（②澪標311～312）

という言葉を付け足すところからも確認できる。娘とは男女の付き合いをしてはならないと源氏を戒める六条御息所の遺言は、娘の前斎宮には愛執による苦悩を経験させまいと思う、母親の心境を垣間見させる。のみならず、前節に確認した、源氏への愛執に苦しんだ六条御息所の人生をも想起させる。御息所が己の経験に照らして源氏を戒めたと言えようが、その戒めが賢木巻に見られた前斎宮に対する源氏の「すき心」にも照応することを看過してはなるまい。

前斎宮に対する源氏の「すき心」は、彼が「…例に違へるわづらはしさに、かならず心かかる御癖にて、いとよう見たてまつりつべかりしいはけなき（斎宮ノ）御ほどを、見ずなりぬることねたけれ、世の中定めなければ、対面するやうもありなむかし」（②賢木92～93）と、伊勢下向を目前にした彼女を思うところに確認できる。伊勢に下る斎宮側から届いた返信を契機に「すき心」を露わにした源氏は、以降も斎宮への「すき心」を抱き続けている。澪標巻でも源氏は、帰京した母御息所には気が乗らないものの、前斎宮に対しては「いかにねびなりたまひぬらむと、ゆかしう思」った（②澪標309）のである。六条御息所が付け足した引用(A)の言葉が、そのような源氏の「すき心」を看破して発せられた

かのようである。一方、それを聞いた源氏の様子は、

(B)・・・あひなくものたまふかなと（源氏ハ）思せど、（源氏）「年ごろによろづ思うたまへ知りにたるものを、昔のすき心のなごりあり顔にのたまひなすも本意なくなむ。よしおのづから」とて、外は暗うなり、内は大殿油のほのかに物より透りて見ゆるを、もしやと思して、やをら御几帳のほころびより見たまへば、・・・はつかなれど、（前斎宮ハ）いとうつくしげならむと見ゆ。御髪のかかりたるほど、頭つきけはひあてに気高きものから、ひちちかに愛敬づきたまへるけはひしるく見えたまへば、（源氏ハ）心もとなくゆかしきにも、（六条御息所ガ）さばかりのたまふものを、と思し返す。

（②澪標312）

と語られる。前斎宮に対する「すき心」を戒められた源氏は、今の自分にはかつての「すき心」がないと切り返す。が、前斎宮の姿が見えやしないかと几帳の隙間を覗く彼の行動は、その言葉とは裏腹なものである。物語は源氏の行動を通して、彼には前斎宮に対する「すき心」がなおも健在であることを示した。しかしながら、右の傍線を施したところに見る如く、源氏は御息所の遺言を思い出して前斎宮への「すき心」を自制する。母御息所の遺言が源氏に影響を及ぼし、「すき心」の自制を促したと言えよう。

前斎宮の入内を繰り広げるために物語は源氏に「すき心」の自制を促す必要があったのである。桐壺巻や若紫巻にあった予言を実体化してゆく物語の論理に則ったために源氏が策略家のような面貌を見せることや、その初見が澪標巻で前斎宮の処遇を決める際であることは伊藤博氏の指摘[14]通りである。前斎宮を懇望する朱雀院の要請を黙殺し、彼女を冷泉帝に入内させようと画策する源氏の様子は確かに冷徹な政治家のそれである。ところが、藤壺の前で「亡き蔭にてもかの（六条御息所ノ）恨み忘るばかり」のこと（②澪標320）として前斎宮の入内を位置づける源氏の様子から察すると、彼を単に冷徹な政治家と言うのは躊躇われる。無論、前斎宮の処遇を藤壺に相談する以前から源氏が養女の入内を考慮したことや、藤壺との相談の意義が朱雀院の要請を謝絶する名分の確保にあることから考えると、源氏が六条御息所に言及することで藤壺を説得しているように見える。しかしながら、薄雲巻の源氏が「（六条御息所ガ）あさましうのみ思ひつめてやみたまひにしが、長き世の愁はしきふしと思ひたまへられしを、かうまでも（斎宮女御ニ）仕うまつり御覧ぜらるるをなむ、慰めに思うたまへなせど、燃えし煙のむすぼほれたまひけむはなほいぶせうこそ思うたまへらるれ」（②薄雲460）と発する言葉に照らすと、藤壺の前で発した源氏の言葉を、説得のためだけに発せられた出任せとは考えられない。源氏は女御となった前

斎宮への後見を一種の償いのように思っていたようである。そのような源氏の思惟は、梅枝巻に「宮（＝秋好中宮）にかく後見仕うまつることを、（六条御息所ハ）心深うおはせしかば、亡き御影にも（源氏ヲ）見なほしたまふらん。」（③梅枝416）とあるところや、次節の引用（Ⅰ）から繰り返して確認される。源氏が自らの「すき心」に対する真剣な反省を持っていたとは思われないものの、前斎宮の冷泉帝への入内を決定する彼には六条御息所に対する「いぶせ」さがあったと考えられよう。六条御息所に対する源氏の「いぶせ」さが冷泉帝の実父という彼の弱点を補強する行動を促したということである。このことから、源氏への愛情に苦しんだ六条御息所の経験が、源氏に残した遺言を通して娘の前斎宮の人生を切り開いたと言え、また権力を収めて行く源氏を支えているとも言えよう。

しかしながら、明石の姫君を二条院に引き取る事件や藤壺の死などが繰り広げられる薄雲巻では、亡くなった六条御息所の存在が右に見てきたものとは異なる方法で娘や源氏の人生に関わっている。その変化の切っ掛けは、源氏が御息所の遺言に逆らって斎宮女御に「すき心」を訴えたことである。引用(A)の遺言がもはや直接には源氏に影響を与えられなくなったのである。

理想の女性、藤壺に「いま一たび（愛情ヲ）聞こえずなりぬる」（②薄雲445）悲しみに堪えかねるかのように、源氏は女御となった前斎宮に、「あはれとだにのたまはせずは、いかにかひなくはべらむ」（②薄雲460）と、抑制してきた「すき心」を打ち明けた。六条御息所の遺言に逆らう源氏の様子は、母を偲ばせる秋を好むと言った女御に対して「君もさはあはれをかはせ人しれずわが身にしむる秋の夕風」（②薄雲463）という和歌を言いかけるところに繰り返し確認できる。無論、斎宮女御はそのような源氏の言動に一向に応ぜず、源氏自らも「すき心」を自制するので、二人が男女関係に発展することはない。そもそも物語には源氏に六条御息所の遺言を破らせる意図はなかったように見える。にもかかわらず、物語は六条御息所の遺言に逆らって斎宮女御に「すき心」を訴える源氏の様子を描いている。まるで権力を志向して行く源氏を描く物語の論理では彼の「すき心」が抑制できないことを示しているかのようである。

押さえ切れない「すき心」を斎宮女御に訴えたものの、「君もさはあはれをかはせ・・・」の和歌を言いかけたのちの源氏は、

このついでに、（源氏ハ）え籠めたまはで恨みきこえたまふことどもあるべし。いますこしひがことともしたまひつべけれども、（斎宮女御ガ）いとうたてと思いたるもことわりに、わが御心も若々しうけしからずと（源氏ハ）思し返して、うち嘆きたまへ

るさまのもの深うなまめかしきも、（斎宮女御ハ）心づきなうぞ思しなりぬる。

（②薄雲463）

と、再び「すき心」を自制する。「すき心」を訴え続けることが、女御に厭わしく思われ、また自ら考えても年甲斐もなくけしからないことだと判断したためである。一見したところには、「すき心」を自制する動機が源氏の内面にのみあるかに見える。だが、右の引用に見る源氏の自制を、引用(A)とそれに次ぐ引用(B)の叙述に照らし合わせて考えると、なおも引用(A)の遺言が源氏に影響を及ぼすことが確認できる。実は引用(B)の中略を施した部分には源氏に垣間見られた六条御息所母娘の様子が「（六条御息所ハ）御髪いとをかしげにはなやかに削ぎて、…帳の東面に添ひ臥したまへるぞ宮（＝斎宮女御）ならむかし、…頬杖つきて、いともの悲しと思いたるさまなり。」（②澪標312）と語られている。源氏に遺言を残す御息所の様子が「近き御枕上に御座よそひて、脇息におしかかりて」（②澪標310）と語られたことに考え合わせると、右の引用における源氏は女御も引用(A)の遺言を聞いたと考えていたのではなかろうか。すなわち、右の引用に見る自制には女御が母の遺言に逆らうはずがないという、源氏の諦観に似た思いも働いているということである。源氏は六条御息所の遺言の影響を直接に受けなくなったものの、母の遺言を守る斎宮女御が彼を疎むことでなおもその遺言は守られているということである。

以上に苦悩に満ちた六条御息所の人生が娘の斎宮女御や源氏の人生にいかなる影響を及ぼしているかを確認した。六条御息所は遺言を残すことで源氏に「すき心」を抑制させ、娘の人生を切り開く。それが、源氏が権力を志向してゆく物語の論理を支えることは言うまでもない。だが、薄雲巻での彼女には源氏を促して「すき心」を自制させることができない。彼女は娘の斎宮女御に守られる遺言を通して、源氏の栄華に影を潜めたまま、第二部で再び登場する機会を待つようになったのである。

第四節　死霊を操る物語の作為性

以上に述べたことを踏まえて、この節では若菜下巻で六条御息所が死霊となって登場することの意義を考えたい。若菜下巻に再登場する六条御息所は、源氏権力との関わりが見えず、娘との繋がりも薄らいでいるように思われる。そのことは死霊となって紫の上に取り憑いていた六条御息所が繰り広げる問わず語りから確認できよう。若菜下巻で源氏の前に姿を現した六条御息所は、

中宮（＝秋好中宮）御事にても、いとうれしくかたじけなしとなむ、天翔りても見た

てまつれど、道異になりぬれば、子の上までも深くおぼえぬにやあらん、なほみづからつらしと思ひきこえし心の執なむとまるものなりける。（④若菜下236～237）

と、秋好中宮を後見してくれたことを感謝し、死霊となった理由を明かすことで、長い問わず語りを切り出す。死霊の問わず語りは、後宮における競争や嫉妬への戒め、そして斎宮を務めた罪を消滅させる法要への促しで結ばれる。紫の上に取り憑いた経緯や成仏供養を頼む内容が、娘に関する話の間に挟まれたかのようである。このような配列は死霊となった六条御息所が娘への深い思いを持っているかに思わせる。だが、右の引用における死霊は、娘のことに感謝する念があるにもかかわらず、死んでいるために娘のことまではさほど深く思わなくなったのか、源氏への「心の執」が消え去らないと語っている。娘を思う気持ちがまったく読み取れないとまでは言えないものの、源氏への「心の執」がそれを上回ることは否めない。秋好中宮に対して後宮における競争や嫉妬を「ゆめ御宮仕えのほどに、人ときしろひそねむ心つかひたまふな。」（④若菜下237）と戒めた言葉も、「心の執」に苦しむ女の立場から発せられたものと考えるのが穏当であろう。ここでは、母親より女としての様子が強調される右の引用が、次の引用（Ⅰ）に照応することに注目したい。

（Ⅰいとあるまじき名を立ちて、身のあはあはしくなりぬる嘆きを、（六条御息所ガ）いみじく思ひしめたまへりしがいとほしく、げに、人柄を思ひしも、我（＝源氏）罪ある心地してやみにし慰めに、中宮（＝秋好中宮）を、かく、さるべき御契りとはいひながら、とりたてて、世の譏り、人の恨みをも知らず心寄せたてまつるを、（六条御息所ハ）かの世ながらも見なほされぬらん。（④若菜下209～210）

引用（Ⅰ）からは、前節にも触れたように、源氏が秋好中宮への後見を六条御息所に対する償いとして位置づけていることが読み取れる。六条御息所があの世から自分を見直しているはずだと語った源氏の言葉からは、秋好中宮への後見をもって六条御息所への償いを果たしたと思っている様子も見られる。源氏が紫の上の前で「恨むべきふしぞ、げにことわりとおぼゆるふしを、やがて長く思ひつめて深く怨ぜられしこそ、いと苦しかりしか。」（④若菜下209）と、六条御息所に恨まれたことを語り得た背景には、世間の非難を押し切って彼女の娘を中宮になしたという自負もあったようである。しかしながら、物語は愛執のあまりに死霊になった六条御息所を再登場させることで、娘への後見が母親への償いになるという源氏の考えが思い込みに過ぎなかったことを示した。言い換えれば、母親としてのあり方より女としてのあり方を前景化している六条御息所を描くことで、物語は癒やされない愛執の苦悩を浮上させたということである。言うまでもなく、女の抱えた苦悩を取り

上げようとする物語の要請による展開であろう。物語が展開に応じて六条御息所の母の側面を強調したり女の側面を強調したりすることが確認できようが、そのような六条御息所の造型から作為性を読み取ることができるのではなかろうか。

最後に、若菜下巻で描かれた六条御息所の再登場によって作り出された物語の磁場を確認しておきたい。結論を先に述べると、紫の上や女三の宮を苦悩の世界に引き留めるところに、御息所の再登場が一助すると言えよう。すなわち、紫の上や女三の宮の母親としての生き方が、彼女たちの女としての生き方を代償し得ないことを示すという考えである。

明石一族の運命を語った明石の入道の手紙によって過去を知った明石の女御に源氏は「あなた（＝紫ノ上）の御心ばへをおろかに思しなすな」（④若菜上129）と訓戒した。この源氏の訓戒によって紫の上は、明石一族の栄華に圧倒されそうな母親としての位相を漸く保つことができた。「などて、よろづのことありとも、また人をば（紫ノ上ニ）並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし」（④若菜上63～64）と、女三の宮の降嫁を後悔していた源氏が降嫁を承諾したお詫びとして紫の上に女御の母としての立場を保証しているかのようである。ともあれ、源氏によって強調された紫の上の母親としての立場は、

内裏の帝（＝今上）さへ、（女三ノ宮ニ）御心寄せことに聞こえたまへば、おろかに聞かれたてまつらんもいとほしくて、（源氏ガ宮ニ）渡りたまふこと、やうやう等しきやうになりゆく、さるべきこと、ことわりとは思ひながら、（紫ノ上ハ）さればよとのみやすからず思されけれど、なほつれなく同じさまにて過ぐしたまふ。春宮の御さしつぎの女一の宮をこなたにとりわきてかしづきたてまつりたまふ。その御あつかひになん、（紫ノ上ハ）つれづれなる御夜離れのほども慰めたまひける。

（④若菜下177～178）

と語られる状況に備えたもののように思われる。冷泉帝の譲位によって即位した今上が女三の宮を庇護することで、源氏の女三の宮を訪れる日数が増えた。その状況を予測していた紫の上は安からぬ気持ちでありながらも、平然とした様子を繕っていた。紫の上は明石の女御が生んだ女一の宮を世話しながら、源氏の夜離れを慰めていたのである。だが、六条御息所の死霊が登場して作り出した磁場の影響下では、そのような慰めでは女三の宮の降嫁によって抱えるようになった紫の上の苦悩は解消され得ないのであろう。

薫を残して出家した女三の宮の場合は、

人々（＝女房達）すべり隠れたるほどに、（源氏ハ）宮（＝女三ノ宮）の御もとに寄

りたまひて、「この人（＝薫）をばいかが見たまふや。かかる人を棄てて、背きはてたまひぬべき世にやありける。あな心憂」とおどろかしきこえたまへば、顔うち赤めておはす。（④柏木324～325）

とある場面にその母親としての側面が強調されている。薫の五十日の祝儀ののちに、わが子を見捨ててまで出家しなければならなかったのかと、源氏は詰るかのような言葉を女三の宮に発した。母親の立場を覚らせて女三の宮を「おどろかし」たその言葉は、彼女の出家が六条御息所の死霊に操られたことを知っている人物に発せられただけに、出家に際する女三の宮の立場を照射している。薫の出産によって「身の心憂きこと」（④柏木200）を心の底から感じるようになった女三の宮には、生まれた薫に対する源氏の疎ましい態度を恨む古女房の言葉を聞いて「さのみこそは（源氏ガ）思し隔つることもまさらめと恨めしう、わが身つらくて、尼にもなりなばやの御心」が生じた（④柏木201）。薫の誕生や古女房の言葉を受け止める女三の宮の様子は、母親よりも一人の女としての生き方を強調した六条御息所のそれと重なり合っていると言えよう。また、女三の宮は柏木との密通によって抱えるようになった女人苦ゆえに母としての生き方まで放棄して出家したとも考えられよう。だが、物語は「誰が世にか種はまきしと人問はばいかが岩根の松はこたへむ」（④柏木325）と詠んだ源氏の和歌を通して、薫の生みの母である限り、出家によっては女三の宮の不遇感が消え去らないことを露わにしている。

第五節　結

以上に六条御息所に付与された二つの性質を確認し、それが物語展開にいかに関わるかを確認した。物語は御息所を源氏への愛執に苦しむ人物に設定した上に、展開に応じては彼女に母としての側面を付随させる。特にその傾向は澪標巻に発せられた彼女の遺言に著しく現れて、権力を志向して行く源氏の支えとなっていた。だが、薄雲巻での源氏は御息所の遺言の影響を脱したと言わんばかりに、斎宮女御に「すき心」を訴える。その時点から母の遺志は娘の斎宮女御によって守られるようになり、御息所は物語の前景から姿を消す。

若菜下巻での六条御息所は、斎宮女御への後見が母親への償いになっているはずだという源氏の思惟を、その登場をもって否定した。そのことによってそれまで語られてきた権力や栄華の物語が源氏一人に帰属され、彼女の抱えていた女の苦悩は癒やされ得ないものとなった。女の救済問題に移行しようとした物語が、その準備として紫の上と女三の宮を

苦悩する一人の女に造型すべく、六条御息所を再登場させたとも言えよう。

六条御息所は常に源氏への愛執に苦しむ女として登場しているのであり、その母性も愛執に捕らわれた人生経験を娘に味わわせまいと思うところから見出すべきである。物語はそのような六条御息所を造型する際に、斎宮女御徽子の伊勢下向を巧みに准拠としながらも、それをずらして、母と女の挾間で相克する女の物語として新たに再生させたのである。

【注】

(1)大朝雄二「源氏物語の構想についての試論―六条御息所の死霊をめぐって―」『文芸研究　第五十集』一九六五年年十月、のち『源氏物語正篇の研究』桜楓社　一九七五年十月

(2)武者小路辰子「若菜巻と六条御息所」『日本文学』一九六四年六月

(3)沢田正子「源氏物語の母」『源氏物語の探究』風間書房　一九八一年八月、奥村英司「娘の内なる母―秋好中宮造形論―」『むらさき』一九九一年十二月

(4)高田祐彦「道綱母から六条御息所へ」『国語と国文学』一九九八年十一月、のち『源氏物語の文学史』東京大学出版会　二〇〇三年九月

(5)斎宮女御徽子の生涯に関しては森本元子氏の「斎宮女御と源氏物語」(『むらさき』一九七三年六月)を参照した。

(6)以下『斎宮女御集』本文の引用は『私家集大成　第1巻　中古Ⅰ』の「斎宮女御Ⅱ」によるが、読みやすさを図って仮名を適宜に漢字に直した。なお、括弧の中にはその歌番号を記す。

(7)奥村英司氏の注(3)の論考では伊勢下向に際する徽子から母性が垣間見られるという指摘があり、それには首肯される。しかし、徽子の「失った若き日々を取り戻そうとした心」を読み取った当該和歌から伊勢下向の動機を見出した考えは、ここでは採用しない。

(8)徽子の和歌が六条御息所の過去回想を描く発想の基盤となることに関しては高木和子氏の教示を得た。

(9)引用は『新編国歌大観』によるが、読みやすさを図って仮名を適宜に漢字に直した。なお、括弧の中には巻・歌番号を記す。

(10)上坂信男氏は「養女前斎宮」(『講座源氏物語の世界〈第四集〉』有斐閣　一九七〇年十一月)で、葵巻の源氏には六条御息所の娘を養女にして入内させる狙いがあったと論じる。一方、藤村潔氏は「六条御息所の遺言」(『講座源氏物語の世界〈第四集〉』有斐閣

一九七〇年十一月）で作者が六条御息所の遺言を物語った時、中宮要員としての玉鬘の役割を斎宮に移し替えたと論じる。ここでは構想の問題には立ち入りしない。

(11) 田中隆昭「二人の養女・秋好中宮と玉鬘―光源氏の栄華の構想―」『人物で読む『源氏物語』第七巻 六条御息所』勉誠出版 二〇〇五年六月

(12) 藤村潔氏の注(10)の論文。

(13) 『新編日本古典文学全集』の頭注。

(14) 伊藤博「「澪標」以後―光源氏の変貌―」『日本文学』一九六五年六月、のち『源氏物語の原点』明治書院 一九八〇年一一月

第二章　玉鬘十帖の意義

第一節　序

玉鬘十帖に関する研究は、『源氏物語』の研究の中で比較的少ない。のみならず、大きな見解の相違がある。玉鬘十帖に光源氏の栄華が讃えられることには一致を見るものの、そこに源氏の衰えがあるか否かに意見が分かれる。[(1)] 近年の研究としては玉鬘十帖の光源氏が『古今集』的恋歌の世界をさながら辿ることを指摘した高木和子氏の論[(2)]が注目にあたいするが、氏は玉鬘が髭黒と結ばれることによって源氏への愛情が永遠に保証されると論じて源氏の衰えを否定した。光源氏という存在が物語を突き動かす論理となっているという指摘と、記憶の反芻とそれに照らし出された現在の往還運動に物語を切り開く方法があるという高木氏の指摘は、特に示唆的である。そして六条院の新たな美質である「いまめかし」に注目した河添房江氏の論文[(3)]や、少女巻の夕霧に注目して大和魂の世界を論じた藤原克己氏の論文[(4)]も玉鬘十帖における光源氏像を垣間見させる論として有効である。また、自然を人為に加工する「みやびの業」が繰り広げられる世界を論じた秋山虔氏の論文[(5)]は示唆に富む。中でも、

…人間の本然的な生命力の不在、またそれと緊張的にはたらきかけあうことによって新しく人間によって発見される自然の不在、いいかえれば、人間が物を創造し、同時に自己を造り変えてゆくという積極的な文化能力を抛棄し、伝統化された規矩に身をゆだねる技術の煉磨熟達の中に、生の矛盾を解消しようとする人間矮小化を認識すべく、「四季の尊重」「恋の尊重」はそのことを前提としてこそいわるべきである

の文章からは、玉鬘十帖を切り開いた、惰性を拒む精神が垣間見られるように思われる。また、三角洋一氏が玉鬘や夕霧といった源氏の「子どもたちのがわが源氏のありようを相対化し、中年の年齢を刻み込んでいる」と論じたのも看過できない先行研究[(6)]である。

本論文では以上の研究を踏まえたうえで、少女巻をも視野に入れてこの十帖が正篇における光源氏の造型にどんな位相を占めるかを確認する。考察は玉鬘を登場させる物語の背景から始めて、彼女の登場が持つ意義と彼女を物語世界から退場させる方法の検討へと続けることにする。

第二節　玉鬘登場の方法

玉鬘巻での物語がそれまで流れてきた時間を逆行して玉鬘を登場させることに注目し、

物語を組織編成する方法の問題として取り上げたのは三谷邦明氏である。[7] 玉鬘巻の冒頭には「年月隔たりぬれど、飽かざりし夕顔をつゆ忘れたまはず、・・・」（③玉鬘87）と急死した夕顔を忘れかねる源氏に関する言及があるが、それは末摘花巻以来初めてである。それまで物語が触れてきた内容は冷泉帝の誕生、須磨・明石での流謫生活と政界復帰、そして六条院造営などと、夕顔との関係性は薄かった。が、玉鬘巻の冒頭で物語は突然、それまでの源氏にはいつも夕顔が忘れられなかったと語る。末摘花巻以降語られない世界に沈潜してしまった夕顔を取り巻く人物たちの時間が、再び表面に浮上するようになったのである。その長い歳月を示すべく物語は筑紫へ下向した四歳（③玉鬘88）、美しく成長した二十歳（③玉鬘93）などと、玉鬘の年齢を詳細に記す。玉鬘巻には夕顔の死から玉鬘が源氏に引き取られるまで、長い歳月が圧縮されて語られる。若紫巻に十歳程度だった紫の上を「女君は二十七八にはなりたまひぬらんかし」（③玉鬘119）と察する右近の視線や、源氏が玉鬘を発見したという報告を聞くために右近を呼んだ次の場面においてもそれが窺える。

（源氏ハ）大殿籠るとて、右近を御脚まゐりに召す。「若き人は苦しとてむつかるめり。なほ年経ぬるどちこそ、心かはして睦びよかりけれ」とのたまへば、人々忍びて笑ふ。「さりや、誰かその使ひならいたまはむをばむつからん、うるさき戯れ言いひかかりたまふを、わづらはしきに」など（女房タチハ）言ひあへり。「（紫ノ）上も、年経ぬるどちうちとけ過ぎば、はたむつかりたまはんとや。さるまじき心と見ねば、あやふし」など、（源氏ハ）右近に語らひて笑ひたまふ。いと愛敬づき、をかしきけさへ添ひたまへり。今は朝廷に仕へ、いそがしき御ありさまにもあらぬ御身にて、世の中のどやかに思さるるままに、ただはかなき御戯れ言をのたまひ、をかしく人の心を見たまふあまりに、かかる古人をさへぞ戯れたまふ。（③玉鬘119～120）

右に続いては夕顔の遺児を発見したという右近の報告があるが、そのことから察すると、「御脚まゐり」はその場を作る口実という性格が強い。源氏は紫の上の前での報告を憚っていた右近に玉鬘の話を聞くために、若者は嫌がるようだから「御脚まゐり」には気が合う年寄り同士が良いという冗談で彼女を呼んだのである。一方、源氏に呼ばれた右近は、夕顔の死を語る際に「服いと黒うして、容貌などよからねど、かたはに見苦しからぬ若人なり」（①夕顔182）と紹介されていたが、右の引用では「年経ぬるどち」や「古人」などの表現があてられる。これらのことからも玉鬘巻に圧縮された時間が察せられるが、その時間の中で源氏は夕顔を恋しく思い続け、右近は玉鬘を「いかで尋ねきこえむ」（③玉鬘

111）と願いつづけてきたのである。玉鬘巻では、それまで取り上げてきた物語の時間が意味づけ直されている、とも言える。物語は「若人」だった右近を「古人」に変えてその時間の長さを記し、その右近と長年を過ごしてきた源氏にも時間の蓄積があったことを暗示する。玉鬘は物語世界にそのような時間を示しながら源氏の娘として六条院に引き取られたのだが、そのような登場の仕方は少女巻での五節に関する叙述に類似する。

少女巻に登場する五節に関する記事は、雲居雁との仲を裂かれた夕霧の「心」を「慰」める（③少女60）べく挿入された[8]、と言っても過言ではない。藤壺と密通を犯した源氏は「わが御心ならひ」に夕霧を紫の上の居る二条院の西の対には近づけなかった。が、夕霧は五節準備の騒ぎの紛れにそこに入り込み、舞姫の惟光の娘を垣間見て心惹かれた（③少女61）。一方、五節の日に参内して舞姫を見た源氏は、

殿参りたまひて御覧ずるに、昔御目とまりたまひし少女の姿思し出づ。辰の日の暮つ方つかはす。御文の中思ひやるべし。

をとめごも神さびぬらし天つ袖ふるき世の友よはひ経ぬれば
年月の積もりを数へて、うち思しけるままのあはれをえ忍びたまはぬばかりのをかしうおぼゆるもはかなしや。（③少女63）

と、かつて縁を結んだ筑紫の五節を思い出し、手紙を贈る次第である。傍線部の「昔・・・思し出づ」、「神さびぬらし」、「よはひ経ぬれば」、「年月の積もり」からは源氏が時間の経過を感じていることが窺える。周知の如く、光源氏と五節の舞姫との関係が初めて確認できるのは、花散里巻で「かやうの（中流ノ）際に、筑紫の五節がらうたげなりしはや」（②花散里155）とある、源氏の回想である。人知れぬ恋の悩みに芳しくない政治状況が加わった源氏は、「忘れもはてたまはず、わざともてなしたまはぬ」花散里の悩みを推測して彼女の邸に向かう（②花散里153）。その途中、源氏は中川の女の心変わりを知って筑紫の五節を回想するが、このような展開から察すると、筑紫の五節は源氏に積極的に顧みられない女の心変わりという問題を背負っていたと言える。無論、澪標巻に「女（＝筑紫ノ五節）、（源氏ノタメノ）もの思ひ絶えぬを、親はよろづに思ひ言ふこともあれど、世に経んことを思ひ絶えたり。」（②澪標299）とあることから分かるように、筑紫の五節は積極的に顧みられなかったにもかかわらず源氏を忘れない女だった。右の引用での源氏はそのような筑紫の五節に対してふとした感懐を隠さないで手紙を送るようになっており、女はそれを「をかし」く思う。とはいうものの、「年月の積も」った今はもはや詮のないことである。

源氏と筑紫の五節は、「五節」という呼び方や、五節の舞姫を見て「御目とまりたまひし」人を思い出したこと、そして「かけていへば今日のこととぞ思ほゆる日かげの霜の袖にとけしも」（③少女63）という筑紫の五節の返歌などから、五節の舞の折に出会ったと考えられる。源氏と夕霧の親子が時を隔てて五節の舞姫として選ばれた女性に心惹かれたのである。(9)

少女巻における五節の舞姫は、周りから「若き御心」や「ものげなきほど」などと幼く思われていた夕霧（③少女33）が、雲居雁と恋に落ちるほど生長したことを再確認させる。と同時に、源氏に筑紫の五節を思い出させることで、彼が年をとったことを示す。五節の舞姫は、子の成長に伴う親の加齢という、時間の流れが作り出す当然な成り行きを記したかのようである。しかしながら、源氏の加齢は別途の記事をもって記さなければならない、夕霧の成長をもたらした時間では説明し切れないものである。ここに時間を一元化しようとしない物語の姿勢が垣間見られるが、このような交錯した時間は玉鬘十帖に受けつがれる。

玉鬘の登場の際に記される時間の経過に照応させるかのように物語は加齢を自覚する源氏の様子を取り上げる。六条院の東の釣殿で夕霧や殿上人などとともに納涼をしていた源氏は、「心やすくうち休み涼まむや。やうやうかやうの中に厭はれぬべき齢にもなりにけりや」（③常夏227）と言いながら玉鬘の居所に向かう。また、篝火巻で夕霧や柏木らによって奏楽が行われる場面でも「御簾の内に、物の音聞き分く人ものしたまふらんかし。今宵は盃など心してを。盛り過ぎたる人は、酔泣きのついでに、忍ばぬこともこそ」（③篝火259）と、源氏は自らを「盛り過ぎたる人」だと言う。一見すると、見事に寮試の予行を終えた夕霧に感動して「子のおとなぶるに、親の立ちかはり痴れゆくこと」（③少女29）と漏らした源氏の言葉のように、子供世代の成長に引き替えて年を取ってしまった源氏像を描いたかに見える。

しかしながら、源氏は老い行くことが許されない人物である。源氏は右近から「親と聞こえむには、似げなう若くおはしますめり、（玉鬘ト）さし並びたまへらんはしも、あはひめでたしかし」（③胡蝶179）と思われ、玉鬘からも「（兵部卿宮ヲ）活けみ殺しみ（玉鬘ヲ）いましめおはする（源氏ノ）御様さま、尽きせず若くきよげ」に見られている（③蛍203）。のみならず、野分巻の夕霧も「親ともおぼえず、若くきよげになまめきて、いみじき御容貌の盛りなり。」（③野分266）と思っていた。物語は中年となった源氏を描くべく、玉鬘の登場に際して歳月の経過を取り上げたものの、周りの視線を用いてなおも若い源氏

を描き続ける。このような源氏の特質は若菜巻に著しく表れているが、物語は加齢による衰えを知らない、なおも恋の世界に居続ける源氏を描く。

超越性とも言うべき、経過する歳月の中でも衰えない若さを持った源氏はその特質によって、玉鬘十帖で玉鬘の相手にもっとも相応しい男君として想定されていく。端午の節句に六条院の馬場殿で行われた競射ののちに花散里の居所に泊まる源氏は、兵部卿宮の話を持ち出す。

（源氏）「兵部卿宮の、人よりはこよなくものしたまふかな。容貌などはすぐれねど、用意気色などよしあり、愛敬づきたる君なり。忍びて見たまひつや。よしといへど、なほこそあれ」とのたまふ。（花散里）「（兵部卿宮ハ）㋐御弟にこそものしたまへど、ねびまさりてぞ見えたまひける。年ごろかくをり過ぐさず渡り睦びきこえたまふときはべれど、昔の内裏わたりにてほの見たてまつりし後おぼつかなしかし。いとよくこそ容貌などねびまさりたまひにけれ。帥親王よくものしたまふめれど、けはひ劣りて、大君けしきにぞものしたまひける」とのたまへば、ふと見知りたまひにけりと思せど、ほほ笑みて、なほあるを、よしともあしともかけたまはず。人の上を難つけ、おとしめざまのこと言ふ人をば、いとほしきものにしたまへば、㋑右大将などをだに、心にくき人にすめるを、何ばかりかはある、近きよすがにて見むは、飽かぬことにやあらむと見たまへど、言にあらはしてものたまはず。（③蛍207～208）

源氏の脳裡に玉鬘のことがあるのは、㋑で髭黒を「近きよすがにて見むは、飽かぬことにやあらむ」と想起したことから確認できる。源氏は婿定めでもするかのように、「昔の内裏わたり」の経験がある花散里に、「人よりはこよなくものしたまふ」兵部卿宮を見た感想を尋ねる。源氏の意図を知らない花散里は㋐で、弟であるが源氏より年上に見えると答えた。一見、兵部卿宮の成長ぶりを誉めたもののように見えるが、『細流抄』以来指摘されているように弟よりも若く見える源氏への賞賛である。その判定に対して「ふと見知りたまひにけり」と感服する源氏の様子からは賛同の意が読みとれるが、源氏は誰よりも優れた求婚者の兵部卿宮を凌ぐ[10]、若くありつづける求婚者だったのである。

源氏は歳月の流れに身を委ねて親になっていながらも、「すくよかに親がりはつまじき」（③胡蝶174）性質を持つために老いゆくことが許されない。そのような源氏の特質を取り上げるべく玉鬘が登場したと言えよう。源氏は玉鬘によって一直線に進行する時間から脱線し、若くありつづけることができたのである。

第三節　「親がりはつまじき」源氏

引き続き、玉鬘が登場する意義を確認するが、それは養女に対して源氏が恋情をうち明ける設定と深く関連するように思われる。玉鬘は源氏が思いを訴えられる養女として登場したのである。この問題に関して触れる前に、まず彼女が娘として六条院に迎え入れられてから一人の女として見られる経緯を確認する。

右近から玉鬘との邂逅を報じられた源氏は世間には我が子だと知らせて「すき者どもの心尽くさするくさはひ」にしたい（③玉鬘122）と語る。それを聞いた右近は玉鬘を助けるのが源氏の「罪」を「軽ませ」ることだと言う（③玉鬘122）。夕顔の死の責任が源氏にあると思っている右近が、償いとして玉鬘に対する庇護を要請したかのようである。源氏も「わが心長さ」を見果てなかった夕顔の形見として玉鬘を考えており（③玉鬘123）、玉鬘の六条院入りは庇護者としての源氏の理想性も強調している。が、庇護者の父親を求める玉鬘側の要請も看過できない。

庇護者を求める玉鬘の運命は、筑紫で彼女を養っていた少弐の「我さへうち棄てたてまつりて、いかなるさまにはふれたまはむとすらん。あやしき所に生ひ出でたまふも、かたじけなく思ひきこゆれど、何時しかも京に率てたてまつりて、さるべき人にも知らせたてまつりて、御宿世にまかせて見たてまつらむにも、・・・」（③玉鬘91）の遺言に端的に表れる。母の失踪や少弐の死といった庇護者の喪失が相次ぐ中で、玉鬘は「いかさまにして、都に率てたてまつりて、父大臣に知らせたてまつらむ。」（③玉鬘92～93）、「父大臣に聞こしめされ、数まへられたまふべきたばかり思し構へよ」（③玉鬘115）といった乳母の言葉に見られるように、庇護者として父親をもとめる展開となった。その設定には『住吉物語』の投影も看過できない。[11] が、殊更に父親に拘る理由には、源氏と玉鬘を親子関係にしておく必要があった物語の都合もあったと思われる。源氏を父親に位置づけようとする物語の態度は、

大臣の君（＝源氏）は、めでたくおはしますとも、さるやむごとなき妻どもおはしますなり、まづ実の親とおはする大臣にを知らせたてまつりたまへ　（③玉鬘115）

という、乳母の言葉からも垣間見られる。引用は源氏に玉鬘を迎える意志があることを右近から聞いて発せられた言葉だが、「実の親」による引き取りを望んでいた乳母は源氏が玉鬘を娘として迎え入れることを知ったのちに、「おのづから、さて人だちたまひなば、大臣の君も尋ね知り聞こえたまひなむ・・・」と六条院入りを説得する人々（③玉鬘124）の一人に回される。妻として六条院に迎えられることに反対していた乳母がその態度を変え

て六条院入りを勧めていることから、源氏を玉鬘の親として位置づけようとした物語の方向性が確認できる。

玉鬘巻で、六条院入りした玉鬘は右近にうち明けた源氏の望み通りに「すき者どもの心尽くさするくさはひ」となる。源氏の満足ぶりは、兵部卿宮の「すきたまへる心ばへを見るがをかしうもあはれ」にも思う（③胡蝶176）様子や、予想外の人物柏木の和歌に感嘆する様子から確認できる。が、「思ふとも君は知らじなわきかへり岩漏る水に色し見えねば」（③胡蝶177）とある和歌が柏木のそれだと知らなかった源氏は、返事の仕方や相手を選ぶべきことなどを、今は玉鬘に仕える右近を呼び寄せて訓育する。玉鬘を含めた、そこに居合わせた三人の様子が、

…（源氏ガ訓戒ヲ）聞こえたまへば、君（＝玉鬘）はうち背きておはする、側目いとをかしげなり。…（六条院ノ）人のありさまを見知りたまふままに、いとさまよう、なよびかに、化粧なども心してもてつけたまへれば、いとど飽かぬところなく、はなやかにうつくしげなり。㋕他人と見なさむは、いと口惜しかべう（源氏ハ）思さる。右近もうち笑みつつ見たてまつりて、㋖親と聞こえんには、似げなう若くおはしますめり、さし並びたらんはしも、あはひめでたしかし、と思ひゐたり。

（③胡蝶178～179）

と描写される。玉鬘から源氏、そして右近の順に移って行く語りの視点の移動によって、玉鬘を見る源氏と源氏を見る右近が映し出されていく。庇護者の親を装って教訓したものの、㋕の源氏は六条院に入ってから美しさを増した玉鬘を人に渡しかねると思う。㋖はそのような源氏を見る右近の視線だが、彼女は、源氏の様子が親としては相応しくないくらい若く、源氏と玉鬘が夫婦としても似合うと見ている。[12] 右近が、玉鬘との邂逅を報ずる際に修行者との色恋沙汰でもあったのかと「はかなき御戯れ言」を言われたこと（③玉鬘120）や、玉鬘の部屋に入る源氏の「この戸口に入るべき人は、心ことにこそ」と発した色恋めいた言葉[13]を聞いていたこと（③玉鬘129）から考えると、彼女の視線は日ごろの冗談の中に潜んでいた源氏の男女関係への興味を引きずったもののように思われる。源氏は消え去ることのない男女関係への興味を養女の玉鬘にかきたてられるようになったのである。

源氏が玉鬘に対して恋情を抱えている様子は、彼女を六条院に迎えた翌年の元日に「かく見ざらましかばと思ほすにつけては、えしも見過ぐしたまふまじくや」とあるところ（③初音148）から確認できるが、表面的には親として振る舞いながらも心に恋情を閉じ込めている相手としては玉鬘が初めてではない。彼女の他に、今は中宮となっている、斎宮女御

がいた。蛍巻にはそのような彼女に関する言及が、

（Ｉ）（源氏ハ）なほさる御心癖なれば、中宮なども、いとうるはしくやは思ひきこえたまへる、事にふれつつ、ただならず聞こえ動かしなどしたまへど、㋕やむごとなき方のおよびなくわづらはしさに、下り立ちあらはしきこえ寄りたまはぬを、この君（＝玉鬘）は、㋖人の御さまもけ近くいまめきたるにおのづから思ひ忍びがたきに、をりをり人見たてまつりつけば、疑ひ負ひぬべき御もてなしなどはうちまじるわざなれど、ありがたく思し返しつつ、さすがなる御仲なりけり。（③蛍202～203）

とある。源氏は斎宮女御に対しても恋情を抱えていながら、その身分ゆえに本気にならない。だが、身分高い中宮に対する思いを自制した代償でもあるかのように、源氏は同じく養女である玉鬘に傾斜していく。ここに玉鬘を養女に設定した意義があるように思われる。

胡蝶巻で右近に玉鬘への思いを察知された源氏は、間もなくして閉じ込めておけない思いを玉鬘にうち明ける。源氏は、母夕顔に言寄せた、「橘のかをりし袖によそふればかはれる身ともおもほえぬかな」（③胡蝶186）の和歌で思いをうち明けたが、それは女に近寄る源氏の常套手法である。薄雲巻で斎宮女御に思いをうち明ける際にも彼は、「つひに心もとけずむすぼほれてやみぬる」六条御息所の話を持ち出していた（②薄雲459）のである。そのような源氏に対して玉鬘は、「袖の香をよそふるからに橘のみさへはかなくなりもこそすれ」（③胡蝶186）と、才気を発揮して言い返したものの、養父の訴えに困じて落涙する。続く物語には、

（A）・・・（源氏ハ玉鬘ニ）あはれげになつかしう聞こえたまふこと多かり。まして、かやうなるけはひは、ただ昔の心地していみじうあはれなり。Ⓐわが御心ながらも、ゆくりかにあはつけきことと思し知らるれば、いとよく思し返しつつ、人もあやしと思ふべければ、いたう夜も更かさで出でたまひぬ。（源氏）「Ⓑ思ひ疎みたまはば、いと心憂くこそあるべけれ。よその人は、かうほれぼれしうはあらぬものぞよ。Ⓒ限りなく底ひ知らぬ心ざしなれば、人の咎むべきさまにはよもあらじ。ただ昔恋しき慰めに、はかなきことをも聞こえん。同じ心に答へなどしたまへ」と、いとこまかに聞こえたまへど、我にもあらぬさまして、いといとうしと思いたれば、（源氏）「いとさばかりには見たてまつらぬ御心ばへを。いとこよなくもⒹ憎みたまふべかめるかな」と嘆きたまひて、（源氏）「ゆめ気色なくてを」とて出でたまひぬ。（③胡蝶188～189）

とあるが、この場面は源氏が斎宮女御に恋情を訴えた次の薄雲巻に類似する。

(a)このついでに、（源氏ハ斎宮女御ニ）え籠めたまはで恨みきこえたまふことどもある

べし。いますこしひがこともしたまひつべけれども、いとうたてと思いたるもことわりに、ⓐわが御心も若々しうけしからずと思し返して、うち嘆きたまへるさまのもの深うなまめかしきも、心づきなうぞ思しなりぬる。やをらづつひき入りたまひぬるけしきなれば、「ⓑあさましうも疎ませたまひぬるかな。ⓒまことに心深き人はかくこそあらざなれ。よし、今よりはⓓ憎ませたまふなよ。つらからむ」とて、渡りたまひぬ。

（②薄雲463）

先に述べたように、両者においては養女に対する恋情であることとその訴えに際してそれぞれの母親を持ち出すことが共通する。のみならず、(A)と(a)においては表現の類似が著しく、そこには傍線を引いておいた。まず、玉鬘と斎宮女御に恋情をうち明けた直後の源氏からは、Ⓐとⓐに見るように、「わが御心」への反省によって「思し返し」た自制が見られる。(A)においては点線部の「出でたまひぬ」が繰り返されており、時間を巻き戻した叙述の仕方となっているものの、(a)と同じく退く前に女に対して言葉を発している。その言葉は、Ⓑとⓑに見るように、自分を疎む相手への恨みから始まっており、Ⓓとⓓのような憎まれることに関する言及がある。肝心なのはⒸとⓒの相違だが、(a)での源氏は自分が「まことに心深き人」ではないために拒まれたと、自嘲的ではあるものの、斎宮の拒絶を受け止めている。源氏の権力の根拠を、弟への後見から、養女を帝に入内させた婚姻関係に基づく後見に変えるべく[14]、物語は源氏に拒絶を受け止めさせている。それに対して、(A)での源氏は無量の底知れない恋情だから人に咎められるような仕打ちは決してしないと言ってさらに思いを押しつけている。同じ自制とは言いながらも、源氏は玉鬘に対しては一層積極的な態度を取っているのである。（Ⅰ）においてはそのような差がⓚの身分の高さとⓚの親しみやすさに由来すると記されるが、そこにこそ二人目の養女を設けた物語の意義があるのではないだろうか。すなわち、栄華成就を辿る展開においてはさらに繰り広げ得なかった養女に対する思いという問題を引き継ぐべく玉鬘が登場した、ということである。物語は斎宮女御の時よりも増して積極的に玉鬘に迫る様子を描くことで、栄華成就を辿る物語の論理から源氏を解放させたのである。

第四節　玉鬘退場の仕方

以上、養女に対して親になりきれない源氏を描く物語に関して述べた。だが、玉鬘と源氏は結ばれることなく、真木柱巻では突然玉鬘が髭黒の掌中に帰する結果となっている。このような結果から光源氏の衰えを読み取る見地もあるが、玉鬘十帖における眼目は「男

女が関係を結ぶところ」ではなく「養女の懸想に嫌悪する玉鬘の心をいかに惹きつけていくか」という過程にある。[15] そのことは玉鬘が髭黒の妻となる結末によって「ほど経るままに思ひ出でられたまふ」源氏の位相（③真木柱391）が生じることからもわかる。なおも衰えない魅力を持つ源氏が、玉鬘に心惹かれていながらも彼女を手放した、と言える。結果的に源氏は好色でありながら好色ではない人物として造型されたと言えよう。が、そのような源氏の造型においては、源氏の後継者としての夕霧が浮上するように思われ、以下に野分巻から藤袴巻までを中心にそれを確認する。

野分巻は毎日三条宮と六条院を出入りしていた「うるはしくものしたまふ君」の夕霧（③野分268）が嵐に襲われた六条院の女君たちを垣間見る内容が繰り広げられる。そのような夕霧を、三谷邦明氏は、近親相姦的な禁忌の違犯という可能性を示唆しながらも、「まめ」であるために視点人物に留まっていると論じた。[16] が、夕霧の場合は、「（源氏ハ）至り深き御心にて、もしかかること（＝夕霧ガ紫ノ上ニ心惹カレルコト）もやと思すなりけりと思ふに、（夕霧ハ）けはひ恐ろしうて、…」（③野分266）や「（玉鬘トノ関係ヲ垣間見ルコトヲ源氏ガ）見やつけたまはむと（夕霧ハ）恐ろしけれど」（③野分279）などに見る源氏に対する畏怖も考慮に入れるべきではなかろうか。すなわち、父親に対する畏怖が夕霧に自制を促して彼を視点人物に留めたという考えだが、野分巻での夕霧はそのような畏怖の中でも玉鬘に寄り添う源氏の観察を止めない。

いであなうたて、いかなることにかあらむ、（源氏ハ）思ひよらぬ隈なくおはしける御心にて、もとより見馴れ生ほしたまはぬは、かかる御思ひ添ひたまへるなめり、むべなりけりや、あな疎ましと思ふ心も恥づかし。女の御さま、げにはらからといふとも、すこし立ち退きて、異腹ぞかしなど思はむは、などか心あやまりもせざらむとおぼゆ。（③野分279～280）

まず、引用における夕霧の垣間見を導く展開を押さえておきたいが、そこからは玉鬘を軽く扱う源氏の態度が確認できる。[17] 紫の上の居所での源氏は夕霧に見られたのではないかと疑っていたが、夕霧とともに玉鬘の居所を訪れる際には「ことごとしく前駆な追ひそ」（③野分277）と接近する気配を消そうとした。右の点線部で異腹の姉だと思いながらも心惹かれる律儀者の様子は、源氏の招いたものとも考えられよう。玉鬘に寄り添う父の様子を見て決まり悪さを感じながらも夕霧は「思ひよらぬ隈なくおはしける」源氏のことだからと納得するが、ここでは源氏が好色な人として思われていることを押さえておきたい。

野分巻で六条院の女君たちを垣間見た夕霧が「かかる人々を、心にまかせて明け暮れ見

たてまつらばや」（③野分285）と思うことから、「まめ人」の視線によって六条院の理想性を保証する物語の意図が感じられる。が、その目的を達成してからの物語は玉鬘の処遇の決定を急ぎ、行幸巻に到ると玉鬘との関係によって「軽々しかるべき御名」が世間に広まる事態や、内大臣に際だって婿扱いされる「をこがまし」い事態を嫌った（③行幸289）源氏が、彼女に宮仕えを勧める内容が綴られる。のちに冷泉帝の後宮への編入が玉鬘や内大臣によって、「心よりほかに便なきことあらば」（③藤袴327）、「なまほのすいたる宮仕に出で立ちて、苦しげにやあらむ」（③真木柱350）などと懸念されることから察すると、玉鬘が、斎宮女御の軌跡を追って冷泉帝の後宮に入る可能性も皆無ではなかったように思われる。無論、その展開は出仕の前の玉鬘を髭黒が横取りすることによって退けられたが、そこからも二人の養女の軌跡を重ね合わせにする物語の意図が垣間見られよう。

ともあれ、行幸巻には源氏による出仕の勧誘と、それに備えた玉鬘の着裳が取り上げられる。着裳の腰結い役を内大臣に依頼するに際して源氏は玉鬘の素性をうち明けるが、それを契機に物語世界には玉鬘の素性が公然の秘密となり、果てには真相を知った髭黒が実父の内大臣に頼って求婚してくる次第である。無論、源氏の「すき心」を推察した内大臣は、次の二重傍線部から確認できるように、玉鬘の処遇は源氏の意に従うべきだと思っている。

（夕霧）「年ごろかくて（玉鬘ヲ）はぐくみきこえたまひける（源氏ノ）御心ざしを、ひがざまにこそ人は申すなれ。かの（内）大臣もさやうになむおもぶけて、（髭黒ノ）大将のあなたざまのたよりに気色ばみたりけるにも、答へたまひける」…（夕霧）「内々にも、やむごとなきこれかれ（ノ妻達ガ）年ごろを経てものしたまへば、えその筋の人数にはものしたまはで、（玉鬘ヲ）棄てがてらにかく譲りつけ、おほぞうの宮仕の筋に領ぜんと思しおきつる、いと賢くかどあることなりとなん（内大臣ガ）よろこび申されけると、たしかに人の語り申しはべりしなり」と、いとうるはしきさまに語り申したまへば、げに、さは思ひたまふらむかしと思すに、いとほしくて、…（源氏ノ）大臣も、然りや、かく人の推しはかる、案におつることもあらましかば、いと口惜しくねぢけたらまし、かの（内）大臣に、いかでかく心清きさまを、知らせたてまつらむ、と思すにぞ、げに宮仕の筋にて、けざやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひよりたまひけるかなとむくつけく思さる。（③藤袴336～337）

行幸巻で玉鬘の素性を知った夕霧は、野分巻の垣間見でそれに気づかなかった自分の「しれじれしき心地」（③行幸311）を悔やんだ。その悔やみの延長だろうか、右の藤袴巻での

夕霧は垣間見以来抱えていた疑惑を確認すべく、内大臣や世間に託けて玉鬘の出仕の件で父を問い詰める。傍線部の言葉は、玉鬘の素性を聞いた内大臣が「（玉鬘ヲ）尋ね得たまへらむはじめを思ふに、（源氏ハ）定めて心きよう見放ちたまはじ、やむごとなき方々を憚りて、うけばりてその際にはもてなさず、さすがにわづらはしう、ものの聞こえを思ひて、かく明かしたまふなめり」（③行幸310）と忖度した内容とほぼ重なり、三条宮と六条院を出入りしていた夕霧が単に外聞を伝えたかのようにも見える。が、右の夕霧の立場は内大臣と異なるものがある。[18] 玉鬘を妻妾にするか出仕させるかを源氏の意に従うべきだと思う内大臣にとって我が娘が太政大臣と結ばれることは「瑕とすべき」ではない、世評の劣るものではなかった（③行幸310）。しかし、源氏が玉鬘に心惹かれることを「ひがざま」だと言い、玉鬘を出仕させるに至った源氏の恋情を内大臣が皮肉ったと伝える夕霧の立場は、「心のままにもあらば、世の人の譏り言はむことの軽々しさ」（③常夏234）を心配して玉鬘への思いを自制する源氏の立場に寄り添っている。夕霧が、六条院の女性たちとは身内の間柄だと考え（③野分285）、源氏死後に六条院に移って「わが世にあらん限りだに、この（六条）院荒ら」すまいと思うこと（⑤匂兵部卿宮20）などを考えると、[19] 彼の詰問を六条院の後継者の立場から発したものだと考えられる。

夕霧から内大臣の忖度を伝えられた源氏は、玉鬘との間に情事がなかったことに安堵しながらも、「げに宮仕の筋にて、けざやかなるまじく紛れたるおぼえを、かしこくも思ひよりたまひけるかな」と自分の計略を見抜かれて苦々しく思う。内大臣に見透かされた計略を成功させると、源氏は好色な人として世間の無遠慮な世語りの的になりかねない。夕霧の詰問は源氏にそのような事態を回避させるべく設けられた「世語り」であり、[20] そのような性格は夕霧の報告を受けた源氏の反応からも考えられる。

夕霧の話を聞いた源氏は、「げに、さは思ひたまふらむかし」と、内大臣の忖度に納得するが、この様子から察すると、彼には玉鬘の素性をうち明けることによってその好色な思惑が見透かされる事態までは予想できなかったようである。玉鬘に心惹かれていった源氏の焦燥感も読み取れるが、そのような源氏にかわって、右の引用における夕霧が世間体を心配して父親に玉鬘を手放すことを慫慂するのである。引用の前に「中宮かく並びなき筋にておはしまし、また弘徽殿やむごとなくおぼえことにてものしたまへば、いみじき御思ひありとも、（玉鬘ハ）立ち並びたまふこと難くこそはべらめ。」（③藤袴334～335）と、玉鬘の出仕を状況に即して考える様子に考え合わせると、「世の重しとなるべき」人物（③少女22）にしたいという源氏のもくろみ通りに着実に成長していることになる。[21] 玉鬘が髭

黒の掌中に帰する展開が、物語としては、以上に確認した夕霧の詰問に対するもっとも穏当な解決だったと思われる。物語は玉鬘に対する源氏の好色を語りながらも、それまで築いてきた彼の栄耀に傷がつかないように後継者の夕霧を操って、その好色ぶりの露見を防いだのである。

第五節　結

以上、玉鬘が登場する背景から髭黒の掌中に帰するまでを視野に入れて、光源氏の造型がいかに変化したかを確認した。斎宮女御と同じく養女として迎えられた玉鬘は、女御の背負っていた栄華成就の世界から源氏を解放させて彼を再び恋の世界へ復帰させるべく登場した。光源氏像が物語世界に則って変化したと言えるが、恋の世界に復帰した源氏にも玉鬘と結ばれることは許されない。心のままに振る舞うことができない太政大臣の源氏は、彼の歩んできた栄華の時間から完全に自由になることが許されないのである。

玉鬘十帖は、それまで語られてきた源氏の時間を継承しながらも、時の流れに蝕まれることなく恋し続ける源氏を描く。玉鬘は、少女巻における五節の登場方法を引き継ぐものの、それとはまるで違う源氏の時間を紡ぎ出している。源氏は蓄積されてきた物語の時間に支えられて玉鬘の父親になったが、それを拒むかのように玉鬘に迫っていく。玉鬘に恋情を押しつけ続ける様子を通して、源氏は常に若くあり続けようとする精神の象徴となっている。その精神をもって、物語は栄華成就の論理によって挫折した斎宮女御との関係を代償しようとした。が、その栄華と不可分な世俗的羈絆から逸脱しようとする精神は、それまで構築してきた物語世界を完全に否定する形を取らないために、全面的代償にまでは繋がり得ない。このような精神運動によって、子どもの成長に伴う加齢を自覚しながらも親とは思われない若さで恋の世界に居続ける源氏像が作り出されるのである。

【注】

(1)山中裕「六条院と年中行事」『講座源氏物語の世界 第五集』有斐閣 一九八一年八月、山田利博「六条院における玉鬘―繁栄の象徴としての役割について―」『中古文学論攷』一九八七年一二月、など。

(2)高木和子「玉鬘十帖論」『源氏物語試論集 論集平安文学 第四号』勉誠社 一九九七年九月、のち『源氏物語の思考』風間書房 二〇〇二年三月

(3)河添房江「六条院聖性の維持をめぐって―玉鬘十帖の年中行事と「いまめかし」―」『国

語と国文学』一九八八年十〇月、のち『源氏物語表現史 喩と王権の位相』翰林書房 一九九八年三月

(4)藤原克己「幼な恋と学問―少女巻―」『光る君の物語 源氏物語講座3』勉誠社 一九九二年五月

(5)秋山虔「玉鬘をめぐって」『文学』一九五〇年十二月、のち『源氏物語の世界』東京大学出版会 一九六四年十二月

(6)三角洋一「野分以後―野分・行幸・藤袴―」『国文学』一九七七年十二月

(7)三谷邦明「玉鬘十帖の方法―玉鬘の流離あるいは叙述と人物造型の構造―」『物語文学の方法Ⅱ』有精堂出版株式会社 一九八九年六月、なお、鷲山茂雄氏の「玉鬘の登場―付・紫上には何故子供がなかったか―」(『平安朝文学研究』一九七二年八月)にも玉鬘巻の冒頭における時間の逆行がかなり意識的になされているという指摘がある。

(8)門澤功成氏は「『源氏物語』少女巻の五節舞姫―光源氏・夕霧の対照性と和歌の働き―」(『早稲田大学大学院文学研究科紀要 第三分冊』二〇〇三年二月)で五節の舞姫を献上するところから太政大臣になっている源氏の繁栄とその誇示を指摘する。

(9)少女巻における源氏と夕霧の対照性に関する論究としては、松井健児氏の「幻巻の十一月―光源氏と五節舞姫」(『国語と国文学』一九八八年一月、のち「光源氏と五節の舞姫」『人物で読む源氏物語 三』勉誠社二〇〇五年十一月)がある。

(10)森一郎「玉鬘物語の構想について―玉鬘の運命をめぐって―」『源氏物語の方法』桜楓社 一九七一年六月

(11)伊井春樹「玉鬘十帖の主題」『源氏物語の主題 上 源氏物語研究集成 第一巻』笠間書房 一九九八年六月

(12)藤井貞和氏の「玉鬘」(『源氏物語必携Ⅱ』一九八二年二月)には源氏の妻妾として玉鬘を待遇してほしい意図が右近にあったという指摘がある。

(13)『湖月抄』の師説に「此戸口はけそう人などの入りぬべきかた也との心也」と、色恋めいていることが指摘される。

(14)本論文の第二部の第一章。

(15)高木和子氏の注(2)の論文。

(16)三谷邦明「夕霧垣間見」『講座源氏物語の世界』有斐閣 一九八一年八月、のち「野分巻における〈垣間見〉の方法―〈見ること〉と物語あるいは〈見ること〉の可能と不可能―」『物語文学の方法Ⅱ』有精堂出版株式会社 一九八九年六月

(17) 斎藤暁子「玉鬘の結婚をめぐって」『源氏物語の探究 第八輯』風間書房 一九八三年六月

(18) 夕霧が内大臣と異なる立場であることは、熊谷義隆氏の「少女巻から藤裏葉巻までの光源氏と夕霧―野分巻の垣間見、そして描かれざる親の意志―」(『源氏物語の展望 第一輯』弥生書店 二〇〇七年三月)、に指摘がある。一方、夕霧が内大臣の立場に即していると捉える論としては、斎藤暁子氏の注(17)の論文がある。

(19) 源氏は「(源氏ハ) 中将の君 (=夕霧) を、こなた (=紫ノ上ノ居所) にはけ遠くもてなしきこえたまへれど、(明石ノ) 姫君の御方には、さしもさし放ちきこえたまはず馴らしたまふ。わが世のほどは、とてもかくても同じことなれど、ならむ世を思ひやるに、なほ見つき思ひしみぬることどもこそ、とりわきてはおぼゆべけれとて、南面の御簾の内はゆるしたまへり。」(③蛍216～217) と、夕霧を跡継ぎと考える。

(20) 三田村雅子「源氏物語の世語り―「他者」の言葉・「他者」の空間―」『語り・表現・ことば 源氏物語講座6』勉誠社 一九九二年八月

(21) 三角洋一氏の注(6)の論文。

第三部　若菜巻以降の光源氏像

第一章　光源氏の老い

第一節　序

若菜上巻には「さるは、今年ぞ四十になりたまひければ、…」（④若菜上54）と、源氏の年齢記述に導かれたかのような形で、玉鬘によって開かれる若菜献上の賀宴が設けられている。言うまでもなく、四十歳という源氏の年齢は、藤裏葉巻の「明けむ年四十になりたまふ、…」（③藤裏葉454）とある叙述を受けてのものである。このような源氏の年齢記述は「特定の年齢に確定することがぜひとも必要」だった[1]物語の都合によるもののように思う。物語は、もはや若いと言えない四十歳の源氏が十三四歳の内親王の降嫁を受ける事件を語ることで、第一部世界で築き上げた彼の栄華を維持させつつ、六条院を暗鬱な空間に変える準備をした。謂わば、女三の宮の降嫁は後続する紫の上の苦悩と柏木による密通事件を語るための序幕なのである。

四十歳と十三四歳という、一見不釣合いに思われる、年齢差のある男女関係に導かれる第二部の物語は、六条院の中に抱え込まれた深刻な矛盾を突き出しながら、時間の進行に受動的になるほかない源氏の様子を形作っていく[2]。と同時に、物語は第一部世界で源氏の持っていた超人的美質を保持させてもいる[3]。第二部世界には、両立不可能に見えるものを両立させる不可思議な論理があるように思われ、その論理が必ずしも解き明かしつくされたと言い難いように思う。そのような第二部世界の論理を究明する試みの一環として、本稿では源氏の「老い」の様子に注目してみたい。

この物語における、「老い」を伴う言葉に関しては、永井和子氏の綿密な検討を施した研究があるが[4]、私には精神的面の完結と肉体の衰えという「老い」の両義性が、第二部世界の源氏造型に深く関わっているように思われる。以下にそのことを、若菜上巻を中心に、若菜下巻や柏木巻・横笛巻までを視野に入れつつ、考えていく。

第二節　女三の宮を降嫁させるために

女三の宮の婿選びが一段落したのちの物語は、四十歳になった源氏の年齢を殊更に取り上げるかのように、玉鬘によって開かれる若菜献上の賀宴を繰り広げる。源氏は賀宴を終えて帰ろうとする玉鬘に、

かう世を棄つるやうにて明かし暮らすほどに、年月の行く方も知らず顔なるを、かう数へ知らせたまへるにつけては、心細くなむ。時々は、老やまさると見たまひくらべ

よかし。かく古めかしき身のところせさに、思ふに従ひて対面なきいと口惜しくなむ

（④若菜上61）

と、四十歳の賀宴を催してくれたことを感謝し、彼女との別れを惜しむ言葉を発した。その言葉は、「心細し」・「老」・「古めかしき身」などと、彼の自覚する老いに関連するものである。源氏が、四十という年齢から「時間には勝たれないいのちのわびしさ」[5]を自覚していると推測でき、このような源氏の自覚が、四十歳になった主人公の造型に関わると推察できよう。しかし、物語の造型する四十歳の源氏像を考えるに際しては、次に掲げる彼の様子も看過してはなるまい。物語は、源氏に老いを感じさせる一方、若菜献上の賀宴を催す玉鬘の目を借りるかのようにして、

（源氏ハ）いと若くきよらにて、かく御賀などいふことは、ひが数へにやとおぼゆるさまの、なまめかしく人の親げなくおはしますを、…

（④若菜上56）

と、四十歳にして、若くあり続ける主人公の様子を伝える。玉鬘の催した若菜献上の賀宴における源氏は、若さと老いという対立的性質を一身に備えている人物となっている。ただし、このような源氏造型が玉鬘による若菜献上の際に初めて表れたのではない。若さと老いという対立的性質を備える源氏像は、女三の宮の降嫁を語るところにすでに見えていたように思われる。

女三の宮の婿選びの場面では、「（女三ノ宮ヲ）見はやしたてまつり、かつはまた片生ひならんことをば見隠し教へきこえつべからむ人のうしろやすからむに、預け聞こえばや」（④若菜上27）と語られる条件にかなう人物を物色する、朱雀院の熟慮が物語られる。その熟慮は、源氏に女三の宮を預けることを迷う朱雀院が、源氏の美質を捉え直すことで、その迷いを切り捨てていく過程とも言えよう。

物語は、

まことに、かれ（＝源氏）はいとさまことなりし人ぞかし。今はまた、その世にもねびまさりて、光るとはこれを言ふべきにやと見ゆるにほひなむ、いとど加はりにたる。

（④若菜上26）

と、源氏を褒め称える朱雀院の言葉を伝えた時点、すでに、女三の宮の婿には源氏しかいないことを顕わにしたと思う。「光」に象徴される超人的美質に支えられてきた源氏を婿に内定していながら[6]も、その「光」に裏面があることを匂わせるかのように、物語は愛娘を源氏に預けることを躊躇する父親朱雀院の様子を語る。その様子は、

（朱雀院）「いで、（源氏ノ）その旧りせぬあだけこそは、いとうしろめたけれ」とは

のたまはすれど、げに、（女三ノ宮ガ）あまたの（源氏ノ妻達ノ）中にかかづらひて、めざましかるべき思ひはありとも、なほやがて親ざまにさだめたるにて、さもや（源氏ニ）譲りおききこえましなども（朱雀院ハ）思しめすべし。　（④若菜上28）

とあるところから窺えよう。朱雀院は源氏の「旧りせぬあだけ」のために愛娘を預けることに迷いを感じていたが、すぐさま考えを変えて、「（雲居雁カラ）外ざまに思ひ移ろふべくもはべらざりける」（④若菜上28）夕霧よりは、「なほいかなるにつけても、人をゆかしく思したる心は絶えずものせさせたまふ」（④若菜上28）源氏の方が良いという、女三の宮の乳母の言葉を首肯し、源氏に「女のあざむかれむはいとことわり」（④若菜上28～29）だという理解を示す。このような朱雀院の態度変化から、源氏の好色を、不安を感じさせる要素から超人的美質を感じさせる要素へと据え直そうとする物語の動きが読み取れよう。そのような物語の動きは、好色とともに朱雀院の憂慮していた源氏の多妻が、「ほどほどにつけて、人の際々思しわきまへつつ、ありがたき（源氏ノ）御心ざま」（④若菜上31）を表すものとして捉え直されることからも確認できる。

朱雀院の迷いは、のちに今上帝となる春宮から「かの六条院にこそ、親ざまに譲りきこえさせたまはめ」（④若菜上39）という支持を得て、漸く終止符が打たれる。物語の目指す方向通りに、源氏を婿にしようと内意を決めた朱雀院は、左中弁に取り次いで、それを源氏に伝える。だが、源氏は、

心苦しき御事にもあなるかな。さはありとも、院（＝朱雀院）の御代の残り少なしとて、ここ（＝源氏）にはまたいくばく立ち後れたてまつるべしとてか、その御後見のこと（＝女三ノ宮ノ降嫁）をば承けとりきこえむ。げに次第をあやまたぬにて、いましばしのほども残りとまる限りあらば、おほかたにつけては、いづれの皇女たちも、よそに聞き放ちたてまつるべきにもあらねど、またかくとりわきて聞きおきたてまつりてむをば、ことにこそは後見きこえめと思ふを、それだにいと不定なる世の定めなさなりや　（④若菜上39～40）

という言葉をもって院の内意を謝絶する。朱雀院の内意を辞する際に源氏の用いた論理は、要するに、朱雀院の余命が少ないからと言って院より三歳下の自分の余命が多く残っているとは限らず、下手をすると朱雀院より自分の方が先立って世を去るかも知れないということである。源氏は自分の余命の少なさのために女三の宮の婿を辞退し、「年若く軽々しきやうなれど、行く先遠くて、人柄も、つひに朝廷の御後見ともなりぬべき」（④若菜上40）夕霧を推薦した。だが、出家した朱雀院と対面した源氏は、その考えを変え、

中納言の朝臣（＝夕霧）、…何ごともまだ浅くて、たどり少なくこそはべらめ。かたじけなくとも、深き心にて（女三ノ宮ヲ）後見きこえさせはべらんに、おはします御蔭（＝朱雀院）にかはりては思されじを、（源氏ハ）ただ行く先短くて、仕うまつりさすことやはべらむと疑はしき方のみなむ、心苦しくはべるべき　（④若菜上49）

と述べて女三の宮の降嫁を承引する。源氏が突然態度を変えて女三の宮の降嫁を承引した理由は、降嫁三日目の夕方に、もの思いに沈んでいる紫の上の気配を察した彼が、「などて、よろづのことありとも、また人を並べて見るべきぞ、あだあだしく心弱くなりおきにけるわが怠りに、かかることも出で来るぞかし」（④若菜上63～64）と、それを後悔するところから窺えるように、源氏の心弱さにあった。彼は朱雀院への人間的な同情と女三の宮への好色とに心を動かされて、雲居雁と結ばれる前の夕霧に女三の宮を預ければ良かったと後悔する朱雀院に異議を唱え、自ら進んでその降嫁を引き受けたのである。このような展開は、女三の宮の降嫁後に繰り広げられる紫の上の内的苦悩を導き出す布石として考えられよう。

物語は、紫の上の内的苦悩を語るために、女三の宮の婿選びを通して、第一部世界で描かれた源氏の超人的美質に負の面が付随することを提示した、とまずは言えよう。そして、その負の面は女三の宮の降嫁後に繰り広げられる紫の上の内的苦悩を語るところに受け継がれているとも言えよう。が、女三の宮の降嫁に導かれる柏木の密通事件においては、それが見えなくなっているように思う。紫の上の内的苦悩と柏木の密通事件を繋ぐ物語の方法はもはや時間の経過以外にはないように見える。[7] が、女三の宮の降嫁に導かれて繰り広げられる二つの内容を語る叙述―紫の上の内的苦悩を語る内容と柏木による密通事件を語る内容―における源氏が、共通して老いを自覚することを看過してはならない。柏木による密通事件における源氏の自覚は少々後回しにし、次節では源氏による老いの自覚が紫の上の内的苦悩とどのように関わるかを考えたいが、その前に朱雀院の内意を辞する源氏の言葉にも老いの自覚があったことを確認しておく。

「心苦しき御事にもあなるかな。」で始まる源氏の言葉をすでに引用し、降嫁を謝絶する源氏の様子も見た。そこにおける源氏の老いは、繰り返し言及されていた余命の少なさと、後続して「行く先遠く」と叙述される夕霧の若さとが対峙する関係であることによって強調される。源氏による老いの自覚は、朱雀院と対面した際に、女三の宮の降嫁を承引した彼が「行く先短くて、仕うまつりさすこと」を憂慮するところにも繰り返されるが、その繰り返しからも源氏による老いの自覚が女三の宮の降嫁を謝絶するために発した、単

なる口実ではないことが確認できる。物語は、朱雀院の内意に対する謝絶を語ることを通して、源氏に老いの自覚を持たせているのではないだろうか。四十歳を目前にした源氏には、十三四歳の女三の宮の婿として相応しい超人的美質とともに年老いたという自覚が備わっており、物語はそのような源氏像を照らし出しながら女三の宮の婿選びを展開させるのではないだろうか。その婿選びが一段落したところで、物語は玉鬘の目を通した源氏を「いと若くきよら」な人物に造型しており、一見したところ、そのような造型は女三の宮の降嫁とは無関係なように見える。しかしながら、その造型は四十歳の源氏が十三四歳の女三の宮と結ばれる展開が強引ではないことを示すためにも効果的だったのではなかろうか。そして、玉鬘の目に映った源氏の若さは、老いを憂慮する源氏の言葉を一向に気にしないで彼を女三の宮の婿にする朱雀院の行動を裏付ける。と同時に、四十歳という源氏の年齢が若さと老いとの共存する境界的なものだと示してくれるのである。

第三節　源氏を孤立させる論理

出家した朱雀院との対面で女三の宮の降嫁を承諾はしたものの、源氏は心苦しい思いだった。女三の宮の降嫁を、「今の年ごろとなりては、ましてかたみに隔てきこえたまふことなく、あはれなる御仲」（④若菜上51）となっている紫の上がどう思うかと危惧したためである。源氏は、一夜を置いてその次第を最愛の妻に伝えるが、それに際して彼は、

(ア)今はさやうのこと（＝好色事）もうひうひしく、すさまじく思ひなりにたれば、（朱雀院ガ）人づてに気色ばませたまひしには、とかくのがれきこえしを、（朱雀院トノ）対面のついでに、心深きさまなることどもをのたまひつづけしには、えすくすくしくも返さひ申さでなむ。（④若菜上52）

という言葉を用いる。源氏の発した言葉の全文ではないが、源氏の伝えようとする趣旨が一目瞭然の部分である。源氏は、左中弁に伝えられた朱雀院の内意を一度謝絶したことを引き合いに出して、女三の宮の降嫁を承諾した理由がひたすら院への同情にあると紫の上に力説した。が、すでに確認したように、源氏には女三の宮に対する興味もあった。源氏は、紫の上の心を傷つけまいという思いで、年老いた「今」は「旧りせぬあだけ」を持たないと言いながら、女三の宮降嫁の次第を伝えたのである。

源氏の報告を聞いた紫の上は、「おのがどちの心より起これる懸想にもあらず、堰かるべき方なきものから、をこがましく思ひむすぼほるるさま世人に漏りきこえじ」（④若菜上53）という思いで降嫁に対処した。降嫁を、女三の宮と源氏の心の通じ合った結果では

ないと捉えるところからは、(ア)の源氏の報告を素直に受け入れている紫の上の様子が窺えよう。紫の上は、好色による源氏の心変わりを心配しないで、[8]夫を完全に信頼し切っていたのである。

源氏の愛情をすっかり信じている紫の上の様子は、源氏が朝顔の前斎院に求婚し、拒絶された一件を回想するところからも確認できる。紫の上の回想は「(源氏ガ)前斎院をもねむごろに聞こえたまふやうなりしかど、わざとしも思し遂げずなりにしを」(④若菜上50～51)と語られるが、この回想からは、夫があえて執着を捨てたために朝顔の前斎院との関係が成立しなかったと恣意的に解釈する紫の上の様子が察せられよう。紫の上の信頼は源氏に対する誤解に基づいていたとも言えようが、その信頼を根拠に、彼女は源氏が女三の宮の降嫁を承諾するはずがないと油断していた。

源氏が女三の宮の降嫁を承諾するはずがないと油断していた紫の上は、源氏にそれが決定したことを告げられたのちに、

(イ)(紫ノ上ハ)今はさりともとのみわが身を思ひあがり、うらなく過ぐしける世の、人笑へならむことを下には思ひつづけたまへど、いとおいらかにのみもてなしたまへり。(④若菜上54)

と、その生き方を反省的に捉える。紫の上には源氏が好色であっても六条院における彼女の立場は脅かされないという自信があった。その自信は、(イ)に見る「今」に対する彼女の信頼に基盤をおいており、「今の年ごろとなりては、ましてかたみに隔てきこえたまふことなく、あはれなる御仲」という叙述とも符合する。紫の上は、源氏とともに過ごしてたどり着いた「今」を過信していた生き方が笑いものにされるのではないかと反省しながらも、表面的には平静を装っていた。だが、彼女は自分の生き方を反省的に捉えるものの、(ア)において好色に興味を持たないと言った源氏を信じ続けていた。物語は、源氏を信頼する紫の上の内面を、

(ウ)年ごろ、さもやあらむと思ひしことどもも、(源氏ハ)今はとのみもて離れたまひつつ、さらばかくにこそはと、うちとけゆく末に、かく世の聞き耳もなのめならぬこと(＝女三ノ宮ノ降嫁)の出で来ぬるよ、思ひ定むべき世のありさまにもあらざりければ、今より後もうしろめたくぞ思しなりぬる。(④若菜上65～66)

と語る。(ウ)の引用には、女三の宮の降嫁三日目の夕方に源氏を見送った紫の上の心境が語られ、(イ)の引用と類似するかに見える。が、源氏との関係を「思ひ定むべき世のありさま」ではなかったと捉え、将来に対する不安を抱えている(ウ)の紫の上の様子は、(イ)に比べて、

「今」に対する信頼がさらに薄らいでいる。ともあれ、長年源氏の愛情が他の女君に移るのではないかと心配してきた紫の上が、「うちとけゆく末」の出来事として女三の宮の降嫁を捉えるところからは、すくなくとも女三の宮の降嫁がある以前の彼女は、好色による源氏の心変わりを心配しないでいたと言えよう。そのように源氏を信頼する紫の上の様子は、朝顔の前斎院に関する一件を恣意的に捉える様子や女三の宮の降嫁を「おのがどちの心より起これる懸想」によるものではないと捉える様子とも照応していよう。これらのことから、紫の上が源氏を信頼する根拠は、(ア)で源氏が、年老いた「今」は好色に興味を持たないと述べたことにあるのではないか。女三の宮の降嫁以降の物語が、(ア)において提示された、源氏の「今」を見定めていく紫の上の様子を取り上げているように思われる所以である。

女三の宮の降嫁があってから、「姫宮の御事（＝女三ノ宮ノ降嫁）の後は、何ごとも、いと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、…」（④若菜上79）とあるように、紫の上は源氏との距離を感じるようになっていた。紫の上の抱えるようになった「隔つる心」は、降嫁五日目に源氏に送られた手紙からその幼稚さを見抜いた、女三の宮のために生じたものではないだろう。幼稚な女三の宮に源氏が心移ることを紫の上が心配したとは考え難い。紫の上が抱えるようになった「隔つる心」の問題を考えるためには、後続して語られる源氏と朧月夜との逢瀬も視野に入れておく必要があろう。

(エ)（源氏ガ）いみじく忍び入りたまへる御寝くたれのさまを待ちうけて、女君（＝紫ノ上）、さばかりならむと心得たまへれど、おぼめかしくもてなしておはす。…、（源氏ハ）ありしよりけに深き契りをのみ、（紫ノ上ニ）長き世をかけて聞こえたまふ。尚侍の君（＝朧月夜）の御事も、また漏らすべきならねど、いにしへのことも知りたまへれば、まほにはあらねど、「物越しに、はつかなりつる対面なん、残りある心地する。いかで人目咎めあるまじくもて隠して、いま一たびも」と語らひきこえたまふ。（紫ノ上ハ）うち笑ひて、「いまめかしくもなり返る御ありさまかな。昔を今に改め加へたまふほど、中空なる身のため苦しく」とて、さすがに涙ぐみたまへるまみのいとらうたげに見ゆるに、…

（④若菜上85）

四十歳にして青年の日のような忍び歩きをする源氏の様子が際立つ[9]朧月夜との逢瀬を語ったのちに、物語は(エ)の場面を設ける。(エ)における紫の上の言葉は、『伊勢物語』三十二段の「いにしへのしづのをだまきくりかへし昔を今になすよしもがな」や二十一段の末尾の「中空にたちゐる雲のあともなく身のはかなくもなりにけるかな」の歌を引歌にしたも

ので、そこからは自分の苦悩を知っていながらも朧月夜との情事に走る源氏への非難と心細い境遇を嘆く紫の上の心境とが読み取れよう。それに関しては、まず、(ウ)で「さもやあらむと思ひしことどもも、今はとのみもて離れたまひつつ」あると、源氏に対する信頼を見せていた紫の上が、「いまめかしくなり返る御ありさま」だという皮肉[10]をもって夫の好色を非難していることを押さえておきたい。引用(エ)における紫の上は、女三の宮の降嫁による苦悩を知っていながらも好色に振る舞う源氏が所詮は他人に過ぎないという距離感を明確に感じとったために、自分の境遇を嘆いた。その際に彼女は、距離感を感じさせる源氏の様子を、『細流抄』の指摘する通り「わかわかし」の意で用いられた、「いまめかし」という言葉で形容した。紫の上は年老いた源氏には若い頃に変わらない好色ぶりが釣合わないと皮肉ったのである。この皮肉を、紫の上が、(ア)において源氏の発した、年老いたために好色なことに興味を持たないという言葉を信頼していたことや、自らを「(源氏ノ)御心にかなひていまめかしくすぐれたる際」ではない妻たち(④若菜上66)の一人に位置させていたことに照らし合わせると、引用(エ)において紫の上の感じる距離感の正体が顕れて来る。紫の上は、好色なことには興味を持たないとばかり信じていた夫が、依然として若い頃に変わらない好色人であると見定めたために距離感を覚えたのである。

ここで、女三の宮の降嫁五日目の源氏が、「ゆめにもかかる人の親にて重き位と(源氏ハ)見えたまはず、若うなまめかしき御さま」(④若菜上71)と描かれていたところに関しても触れておきたいが、私には、若い頃に変わらない好色人という源氏の様子がそこですでに顔を出していたのではないかと思われる。そして、六条院の東の対で女三の宮の手紙を待っている「若うなまめかし」い源氏と共にいた紫の上が、老いの背後に隠された夫の好色を、薄々でありながら、感知したと思う。紫の上の抱いた「隔つる心」は、その感知に起因するということである。

私には、以上に見てきた紫の上の意識によって、源氏独自の「青春期が描かれる古代文学の伝統から離れ」た「中年期の人生の問題」[11]が描かれているように思われる。物語は源氏の老いというものを登場人物たちの主観的な視点に即して描くことで、時間の流れに蝕まれない超人的美質と老いとを両立させることができたのではないだろうか。

ところで、四十歳の源氏を若い頃に変わらない好色人として認識していたのは、紫の上だけでない。六条院に住む花散里や明石の君の目にも源氏は若い頃に変わらない好色人として映っていた。花散里が源氏の好色を捉える様子は、「ものの例(＝嫉妬シナイ女性ノ例)に引き出でたまふほどに、身の人わろきおぼえ(＝源氏ニ愛サレナイトイウ評判)こ

そあらはれぬべう。さてをかしきことは、院（＝源氏）の、みづからの御癖をば人知らぬやうに、…さかしだつ人の己が上知らぬやうにおぼえはべれ」（④夕霧471）と、花散里の穏やかな性格を称賛する夕霧に対して彼女が、己の身の上を省みずに夕霧の好色を戒めた、源氏への非難を漏らすところから確認できる。そのような花散里の目にも、六条院の東北の町に設けられた四十賀の際に源氏は、「なほいと若き源氏の君」（④若菜上100）と映っていた。なお、明石の君の源氏を捉える様子は、

(オ)あなうたてや。いまめかしくなり返らせたまふめる御心ならひに、聞き知らぬやうなる御すさび言どもこそ時々出で来れ　（④若菜上125）

とあるところに窺える。明石の女御の出産があってから、六条院の北の町にいる明石の尼君には、別れを告げる言葉と明石一族の奇異な運命をかたどった夢に関する話が記された、明石の入道からの消息が文箱とともに届く。それは明石の君の手によって、南町の寝殿にいる明石の女御の許にもたらされる。生みの母明石の君の出家の意志とともにそれを伝えられた女御は涙ぐみ、「いとあはれ」（④若菜上124）だと思ってますます袖を濡らす。ちょうどその時、女三の宮のいる寝殿の西側から源氏が渡って来、「なぞの箱ぞ。深き心あらむ。懸想人の長歌詠みて封じこめたる心地こそすれ」（④若菜上125）と、冗談を言いかける。引用(オ)は、源氏の冗談に対する明石の君の皮肉で、(ェ)における紫の上の皮肉と類似する。明石一族の悲壮な運命をもって築き上げた物語の雰囲気を一気に打ち壊すような源氏の冗談は、年老いてなおも若い頃に変わらない好色人の源氏が、明石一族の悲しみに融和できないことを示している。物語は、年老いた源氏をなおも若い頃に変わらない好色人に仕立てることで、彼を孤立させている。このような物語の傾向は、先に見た、花散里や紫の上との関係からも見られよう。物語は、歳月の流れに蝕まれない源氏を、六条院の女君たちに確かめさせることで、主人公を孤立させているのである。

第四節　源氏の自覚する老い

前節では周りの視線によって浮上する、源氏の超人的美質に関して述べ、その末尾に源氏を孤立させる物語の論理を確認した。本節では、少々視角を変えて、源氏自信による老いの自覚に関して考えたい。

すでに確認したように、周りの登場人物たちに若い頃に変わらない好色人として認識される源氏は、それに反撥でもするかのように、年老いたという自覚を抱きつつあった。[12] 老いを自覚する源氏の様子は、朱雀院との対面で女三の宮の降嫁を承引する際や玉鬘による

若菜献上の際にも見られるものであった。そして源氏による老いの自覚は、「若々しくいにしへに返りて」（④若菜上78）和泉前司に指示した朧月夜との対面を「心ながらもゆるさぬこと」に思うところ（④若菜上84）からも確認できる。源氏は好色な行為が不釣合いな老人だと自らを自覚していた。このように、老いの自覚を持つ源氏の様子は、すでに述べたように、若菜上・下巻を貫くものである。若菜下巻で老いを自覚する源氏の様子は、

(A)過ぐる齢にそへては、酔泣きこそとどめがたきわざなりけれ。衛門督（＝柏木）心とどめてほほ笑まるる、いと心恥づかしや。さりとも、いましばしならむ。さかさまに行かぬ年月よ。老は、えのがれぬわざなり。（④若菜下280）

とある、女三の宮と密通を犯した柏木に対して発した言葉に著しく表れる。朱雀院五十賀の試楽を語る場面で「御孫の君たち」（④若菜下279）の舞に導かれたかのように語られている(A)からは、源氏の自嘲と柏木への痛烈な皮肉が読み取られ、年老いたという劣等感を覚えている彼の様子が窺える。が、密通の事実を知った直後の源氏は「わが身ながらも、（女三ノ宮ガ）さばかりの人（＝柏木）に心分けたまふべくはおぼえぬ」（④若菜下255）と、柏木に比肩できないほど優れていると己を位置づけていた。これらを、女三の宮が自分より劣る柏木に心惹かれたと思う源氏が、宮の前で、「人の上にてももどかしく聞き思ひし古人のさかしらよ、身にかはることにこそ。いかに、うたての翁やと、（女三ノ宮ハ）むつかしくうるさき御心添ふらむ」（④若菜下271）と老いを自嘲することに照らし合わせると、彼は女三の宮が柏木の若さに心惹かれたと誤解していたと考えられる。旧世代を脅かす新世代として柏木を位置づける所以だと思うが、ここでは第二部世界で源氏が老いを自覚する方法を確認したい。(13)

(B)過ぐる齢も、みづから（＝源氏）の心にはことに思ひとがめられず、ただ昔ながらの若々しきありさまにて、改むることもなきを、かかる末々のもよほし（＝玉鬘ノ子）になむ、なまはしたなきまで思ひ知らるるをりもはべりける。中納言（＝夕霧）のいつしかと（子供ヲ）儲けたなるを、ことごとしく思ひ隔てて、まだ見せずかし。人よりことに数へとりたまひける今日の子の日こそ、なほうれたけれ。しばしは老いを忘れてもはべるべきを（④若菜上57）

(B)は、若菜献上の賀宴のために、髭黒との間に産まれた子供たちを連れて六条院を訪れた玉鬘に、源氏の発した冗談である。そこにおける源氏には、老いを厭うかのような姿勢があり、その姿勢は(A)の老いに対する姿勢とも通じるかに見える。が、(B)は、四十歳を祝うために子供たちまで連れてきた玉鬘に対する、謝意の込められた冗談である。その冗談

における老いの質を、激しい喪失感を伴う(A)におけるそれと同一視することは難しいであろう。ともあれ、(B)における源氏は、以前に変わりなく若いとばかり思っていると言い、玉鬘の産んだ子供たちを見てきまりわるいくらい老いを実感すると言いながら、子供を見せない夕霧の話を持ち出して冗談を言い続ける。しばらくは老いを忘れていたいと言う後続の言葉に照らして考えると、源氏が子供を見せてくれた玉鬘よりも「末々のもよほし」を見せない夕霧を良しとしているかに見える。だが、その真意は、

(C)大殿の君（＝源氏）も、このほどのことども（＝産養）は、例のやうにもことそがせたまはで、世になく響きこちたきほどに、内々のなまめかしくこまかなるみやびの、まねび伝ふべきふしは目もとまらずなりにけり。大殿の君（＝源氏）も、若宮（＝今上帝ノ春宮）をほどなく抱きたてまつりたまひて、「大将（＝夕霧）のあまた儲けたなるを、今まで見せぬがうらめしきに、かくらうたき人をぞ得たてまつりたる」と、うつくしみきこえたまふはことわりなりや。（④若菜上110）

とある場面で、源氏が子供を見せない夕霧に言及するところから確認できる。(C)には、いつもとは違って盛大な産養いを設けて可愛い孫の誕生を喜ぶ源氏の様子が垣間見られる。孫を可愛がる源氏は子供を見せない夕霧の行為に関しては「うらめし」いと言うが、この言葉から(B)の冗談の裏面に潜む源氏の真意が推察できる。(B)における源氏は、玉鬘の子供たちに老いを知らされたものの、やはり玉鬘が子供たちを連れてきたことが嬉しかったようである。にもかかわらず、(B)での源氏は玉鬘や夕霧の子供たちを「末々のもよほし」だと言い、それによって知らされる老いが厭わしいと言っていた。だが、(B)と同様に「末々のもよほし」によって老いを知らされているはずの、(C)における源氏は若宮の誕生によって一層堅固になり行く将来の栄光に期待をかけているように見える。源氏の期待は普段に異なって盛大な産養いを設けるところから察せられようが、その際に源氏の自覚する老いは、(B)において厭わしいものとして彼の自覚していた老いとは異質なものになっている。老いに対する源氏の自覚に変化が生じたと言えよう。

ここで、右のように源氏の自覚する老いが、前節に確認したような、物語によってかたどられる孤立した老いと合致しないことに関しても少し触れておきたい。(C)における源氏の将来の栄耀は、物語が明石の入道の夢に始まる明石一族の運命をたどることで、明石一族に帰属される。[14] 前節に確認した源氏の孤立を考え合わせると、物語が他の人物と共感し得ない源氏像を積み重ねていくことで孤立した源氏の老いを形作っていると言えよう。物語は六条院の女君たちに認識される源氏の老いや、源氏の自覚してきた老いとは異なる質

の老いを形作っているのである。無論、源氏は(B)においてすでに、命の衰えという老いの性格を知っており、その自覚は物語の醸し出そうとする老いと合致するかに見える。だが、源氏は衰えという老いの性質を知っていながらも、事件の作り出す状況に応じて老いに対する自覚を変えつつあるように見える。その変化の様相はさらに次の(D)で確認できる。

(D)（源氏）「あはれ、残り少なき世に生ひ出づべき人（＝薫）にこそ」とて、（薫ヲ）抱きとりたまへば、（薫ハ）いと心やすくうち笑みて、つぶつぶと肥て白ううつくし。…（源氏）「静かに思ひて嗟くに堪えたり」とうち誦じたまふ。（源氏ハ）五十八を十とり棄てたる御齢なれど、末になりたる心地したまひて、いとものあはれに思さる。

（源氏）「汝が爺に」とも、（薫ニ）諫めまほしう思しけむかし。　（④柏木322～324）

引用(D)には柏木と女三の宮の密通によって生まれた「末々のもよほし」の薫を抱いた源氏の内面が語られる。薫の五十日の祝の際に不義の子をわが子として抱いた源氏は己の余命の少なさを痛感する。そのような老いの自覚は、一見したところには女三の宮の降嫁を承諾する際のそれと似ているかに見える。だが、「末々のもよほし」の薫によって知らされる老いは、女三の宮の降嫁の際に源氏の自覚していたそれに比べられないほど深刻なものとなっていて、薫の誕生に纏わる秘密を知っている彼の「孤独な心」[15]を浮き彫りにする。私は、(C)に至って漸く物語のかたどる源氏の老いと源氏の自覚するそれとの間にある歪みが消え去り、両者が歩幅を合わせるようになったと思う。老いを痛感する孤独な源氏の内面は、「思しけむかし」とあるように、その人生を語ってきた語り手さえ推測でしか捉えることができないものになっている。それは源氏の自覚するようになった老いの暗鬱さが、物語の形作ってきた老いの暗鬱さを遙かに越えていることを意味しよう。源氏の自覚する老いは物語の牽引してきた老いと同質なものになったのである。

第五節　結びにかえて

以上に若菜上巻を中心に、柏木巻までを視野に入れつつ、三つの層から取り上げられる源氏の老いに関して考察してきた。三十九歳から四十八歳に至るまでの源氏は、老いの自覚と超人的美質とを兼備していて、孤立する人物であった。物語は孤立する源氏の様子を語ることで、衰えていく命のわびしさを感じさせる源氏の老いを形作った。と同時に、登場人物たちの主観的視線を通すことで、歳月の流れに蝕まれない若々しさを備えたまま年老いた源氏を造型できた。物語は源氏の老いを多層化することによって、中年期の源氏の人生を豊富にできたのである。そのような中年期を源氏は年老いたという自覚を持って過

ごしたが、その老いの質は状況に応じて変化しつつあった。

源氏の晩年は、彼の自覚する老いが初めて深刻な暗鬱さを帯びるようになって始まったのではないだろうか。「末々のもよほし」の薫と対面した源氏が、その成長を見届けられないと、衰え行く命のわびしさを初めて痛感した時、彼の晩年の物語が始まっているのである。だが、源氏の晩年における老いは衰え行く命のわびしさだけを物語っているわけではない。薫との対面が設けられて以降の源氏の老いは、なおも多義的なものである。そのような源氏の老いは、「宮の若君（＝薫）は、宮たち（＝明石中宮ノ皇子達）の御列にはあるまじきぞかしと（源氏ハ）御心の中に思せど、…（薫ヲ）いとらうたきものに（源氏ハ）思ひかしづききこえたまふ。」（④横笛364）とあるところに象徴的に表れている。年老いた源氏には、命の衰えを感じさせたわが子ではない薫を見る暖かい視線もあったのである。

【注】

(1)高田祐彦「光源氏の賀宴―儀礼と心の関係―」『叢書　想像する平安文学　第2巻〈平安文化〉のエクリチュール』勉誠出版 二〇〇一年十月

(2)秋山虔「源氏物語の方法に関する断章―「若菜」巻における明石物語・続―」『源氏物語とその周辺―古代文学論叢第二輯―』武蔵野書院 一九七一年六月、同「外的時間と内的時間―「若菜上」巻における明石物語、その一―」『国文学』一九七〇年五月

(3)室田知香氏は「柏木物語の引用的表現とその歪み―「帝の御妻をも過つたぐひ」の像と柏木―」（『日本文学』二〇〇七年十二月）で、第一部の偉大な過去の源氏像と柏木に畏怖されつづける六条院の像とが二重映されつつあることを論じた。

(4)永井和子「老いということば―源氏物語の場合」『源氏物語と老い』風間書院 一九九五年五月

(5)秋山虔「源氏物語の方法に関する断章―光源氏四十賀の記事をめぐって―」『日本文学古典新論』河出書房新社　一九六二年十二月

(6)秋山虔氏は「「若菜」巻の始発をめぐって」（『源氏物語の世界―その方法と達成―　東大人文科学研究叢書』東京大学出版会 一九六四年十二月）で、作者が「光の理想像」を繰り返し語ることと「光源氏と女三宮との結合」をもくろむことを指摘する。

(7)吉岡曠「若菜・柏木物語論序説」『学習院大学文学部研究年報 9号』一九六三年二月

(8)吉田幹生「若菜巻の紫の上―「世」への傾斜と「憂し」の不在―」『成蹊国文 第三十九

号』二〇〇六年三月、のち『日本古代恋愛文学史』笠間書院二〇一五年二月

(9) 清水好子「朧月夜再会」『講座 源氏物語の世界〈第六集〉』有斐閣 一九八一年十二月

(10) 池田節子「「いまめかし」考―玉鬘十帖の光源氏―」『物語〈女と男〉 新 物語研究３』有精堂 一九九五年十一月

(11) 益田勝実「源氏物語の転換点」『日本文学』一九六一年十月

(12) 永井和子氏の注(4)の論考に、「光源氏の場合は自覚的な老齢意識はありえても、客観的な「老い」の問題の対象とはなしがたい。物語の主要人物に「老い」は存在しないのである。」とある。

(13) 今井源衛「柏木と女三の宮」『国文学』 一九五九年八月

(14) 阿部秋生「第五章 明石の君の物語の構造」『源氏物語研究序説』東京大学出版会 一九五九年四月

(15) 高橋亨「柏木はなぜ自ら死を求めねばならなかったのか」『国文学』一九八〇年五月

第二章　幻巻の一年

―光源氏の最晩年の時間―

第一節　幻巻の時間

源氏にとって紫の上の死は、無類の悲しみを味わった経験であった。と同時に、それは念願の出家を妨げる一切の足枷からの解放でもあった。愛妻を葬ったのち、悲しみに暮れる日々の中で彼は「今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひたみちに行ひにおもむきなんに障りどころ」がない（④御法513）と思ったのである。にもかかわらず、彼は翌一年を世俗に過ごし、幻巻にはその春から大晦日までの時間が刻まれている。

幻巻の一年間、源氏はひたすら悲しみに沈んで日々を過ごしている。そのような内容から、紫の上の死の余韻として捉えられてきた幻巻は、阿部秋生氏の「六条院の述懐（一）～（三）」[1]以来、理解が大きく変わった。阿部氏は、紫の上の死後に繰り広げられる源氏の述懐に注目して、源氏に生涯を貫通する深い憂愁があると指摘し、紫の上の死によってそれが深化したと論じた。この研究を受けついだ鈴木日出男氏は、若菜巻以降の物語的な状況がしだいに解体の方向に進んでいるという藤井貞和氏の指摘[2]をも受け入れて、幻巻においては「生涯の長きにわたり現世離脱を志向しながらも現世執着に低迷せざるをえなかった人間の、救済のない絶望」が際立つと論じ、それに源氏の出家が語られない所以を求める[3]。一方、益田勝実氏は「聖の遁世生活に対する深い神聖視」のためにこの物語が源氏の出家を語らないと説き、幻巻が紫の上の喪の期間と源氏の最後の準備期間だと論じた[4]。喪の期間という時間の意味から幻巻を捉えることは示唆に富むが、神野藤昭夫氏が「惑える源氏の発見も、愛の物語の完結としての幻の把握もともに一面的たらざるをえない」と述べた指摘[5]も看過してはなるまい。本章においては以上の先行研究を踏まえつつ、幻巻の一年が光源氏にとってはどのような時間だったかを考察する。

幻巻の時間に関しては、鈴木宏子氏が、源氏による過去との決別を読み取っている[6]。源氏の救済問題に立ち入らない穏当な結論だと思われ、考察を進めるにあたってはそのような氏の捉え方を重視したい。本章では、幻巻を光源氏が自己観照を行う時間として捉える見通しを立てているが、このような捉え方は後藤祥子氏がすでに指摘したことでもある[7]。後藤氏は幻巻の四季を「過去との乖離」を認識させる「直線的時間」だと捉えて、源氏がその時間を過ごすことで惑い続ける自分を見据えるようになったと論じた。大いに肯かれるものの、氏の述べる「過去との乖離」が源氏に「直線的時間」として認識される経緯は

もう少し検討の余地があるように思われる。それを確かめつつ以下に、源氏が最晩年の時間をどのように認識しているかを考察する。

第二節　最晩年の変化

（源氏ハ）その日ぞ出でたまへる。御容貌、昔の御光にもまた多く添ひて、ありがたくめでたく見えたまふを、この古りぬる齢の僧は、あいなう涙もとどめざりけり。（④幻550）

幻巻の終わり近くにある御仏名の日、源氏は人々の前に姿を現した。右はその時の源氏の様子を語ったものである。紫の上を失った悲しみのあまりに春から人との対面を避けて御簾の内に閉じこもっていた彼は、昔よりも「光」を増す存在になりかわって人々の前に姿を現した。その「光」に関しては玉上琢彌氏が「みがかれた道心の内面的な光であり、俗世離脱を目前にした仏身的な光」[8]だと論じたが、近年はその捉え方が必ずしも支持されない。右の「光」に関しては、「宮たち上達部など、あまた」（④幻549）を代表する導師の目に映った源氏の「光」から、「春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたる」状態（④幻511）とは異なる変化があったと指摘した陣野英則氏の論[9]が示唆的である。源氏の「光」に王権・菩薩を象徴する正の面や闇・罪を象徴する負の面があるという河添房江氏の論[10]を受けた陣野氏は、右の「光」が幻巻において客体化されることのない源氏の擬似的な呼称だと指摘し、それに正篇の物語の全体に及ぶ源氏の人生が響いていると論じた。幻巻の冒頭においては、紫の上を喪った悲しみのあまりに途方に暮れていた源氏が、栄耀と憂愁に満ちた人生を生きてきた人物になりかわった、という捉え方だと思われるが、まずは幻巻の一年を経た源氏が変化していることに注目したい。

幻巻の春、紫の上を失った源氏は「月ごろにほけにたらむ身のありさま」や「かたくなしきひが事」がちになった様子を人に見せまいと、「上達部なども睦ましき、また御はらからの宮たち」との対面まで避けて御簾の内に閉じこもる（④幻527）。御仏名の日、人々の前に姿を現すまでに源氏が接触する人物は、蛍兵部卿宮・中納言の君や中将の君といった女房たち・匂宮・女三の宮・明石の君・花散里・夕霧・夕霧と雲居雁の間に生まれた子供たちがすべてで、新たな人間関係や事件らしい事件もなく、紫の上を失った悲しみの中で月日のみが過ぎてゆく。

(A)春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつは悲しさの改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人々参りたまひなどすれど、御心地

なやましきさまにもてなしたまひて、御簾の内にのみおはします。（④幻521）

(B)二月になれば、花の木どもの盛りになるも、まだしきも、梢をかしう霞みわたれるに、…（④幻528）

(C)春深くなりゆくままに、御前のありさまいにしへに変らぬを、めでたまふ方にはあらねど、静心なく、何ごとにつけても胸いたう思さるれば、おほかたこの世の外のやうに鳥の音の聞こえざらむ山の末ゆかしうのみいとどなりまさりたまふ。山吹などの心地よげに咲き乱れたるも、うちつけに露けくのみ見なされたまふ。（④幻529）

(D)夏の御方（＝花散里）より、御更衣の御装束奉りたまふとて、…（④幻537）

(E)祭の日、いとつれづれにて、「今日は物見るとて、人々心地よげならむかし」とて、御社のありさまなど思しやる。（④幻537）

(F)五月雨はいとどながめ暮らしたまふより外のことなくさうざうしきに、十余日の月はなやかにさし出でたる雲間のめづらしきに、大将の君（＝夕霧）御前にさぶらひたまふ。（④幻539）

(G)いと暑きころ、涼しき型にてながめたまふに、池の蓮の盛りなるを見たまふに、「いかに多かる」などまづ思し出でらるるに、つくづくとおはするほどに、日も暮れにけり。（④幻542）

(H)七月七日も、例に変わりたること多く、御遊びなどもしたまはで、つれづれにながめくらしたまひて、星逢ひ見る人もなし。（④幻543）

(I)風の音さへただならずなりゆくことしも、御法事の営みにて、朔日ごろは紛らはしげなり。（④幻543）

(J)九月になりて、九日、綿おほひたる菊を御覧じて、…（④幻544）

(K)神無月は、おほかたも時雨がちなるころ、いとどながめたまひて、夕暮の空のけしきにも、えも言わぬ心細さに、「降りしかど」と独りごちおはす。（④幻545）

(L)五節などいひて、世の中そこはかとなくいまめかしげなるころ、大将殿の君たち、童殿上したまひて参りたまへり。（④幻545）

(M)今年をばかくて忍び過ぐしつれば、今はと世を去りたまふべきほど近く思しまうくるに、…さぶらふ人々にも、…年の暮れゆくも心細く悲しきこと限りなし。（④幻546）

(N)御仏名も今年ばかりにこそはと思せばにや、常よりもことに錫杖の声々などあはれに思さる。（④幻548）

(O)年暮れぬと思すも心細きに、若宮（＝匂宮）の、「難やらはんに、音高かるべきこと、何わざをせさせん」と、走り歩きたまふも、をかしき御ありさまを見ざらんこととよろづ忍びがたし。（④幻550）

(A)から(O)までは幻巻の時期が確認できる箇所で、源氏は(B)から(M)までの時間を人との対面を避けて御簾の内に閉じこもっていた。(C)の「春深くなりゆくままに」、(G)の「いと暑きころ」、(M)の「年の暮れゆく」は前後する時間の表現から月が推察できるもの、他は月まで正確に確かめられるものである。このような時間に関して『花鳥余情』は、紫の上を喪った源氏の悲嘆を表すためにかつてない筆法を用いたと説く。[11] 確かに、幻巻には紫の上を失って悲しみに浸る源氏の様子が著しく、右に掲げた引用からもそれが窺える。まず、(A)では年が改まっても一向に和らげられない源氏の悲しみが新年の挨拶に来た人々で賑わう御簾の外の様子と対照されている。(C)は生前の紫の上が手入れした庭を見て出家を考え、涙ぐむ源氏の様子が描かれる。(G)の点線部については『河海抄』は「悲しさぞまさりにまさる人の身にいかに多かる涙なるらむ」という歌を引いていると指摘したが、『古今六帖』や『伊勢集』には「涙なりけり」の形で伝わる。『弄花抄』の説くように、涙は蓮の上の露を見ての連想だろうが、ここからも紫の上を失った源氏の悲しみが読みとれる。(K)の点線部に関しては『源氏釈』が「神無月いつも時雨は降りしかどかく袖くたすをりはなかりき」の歌を指摘し、これによると(K)からは例年にない源氏の悲しみが読み取れる。幻巻での源氏は一年を通して紫の上を喪ったことを悲しんでいたと言えようが、ここではその悲しみの中で源氏が時の流れを知覚していることに目を留めておく。

(a)わが宿は花もてはやす人もなしなににか春のたづね来つらん（④幻521）
(d)羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいとど悲しき（④幻537）
(g)つれづれとわが泣きくらす夏の日をかごとがましき虫の声かな（④幻542）
(h)七夕の逢ふ瀬は雲のよそに見てわかれの庭に露ぞおきそふ（④幻543）
(j)もろともにおきゐし菊の朝露もひとり袂にかかる秋かな（④幻544）
(l)宮人は豊の明にいそぐ今日ひかげも知らで暮らしつるかな（④幻546）

(a)は(A)ののちにある和歌で、源氏が来訪した蛍兵部卿宮との対面を願って贈ったものである。「花もてはやす人」が紫の上、「春」は蛍兵部卿宮を暗示する表現である。宮との対面を考えながら、紫の上もいない我が家に何をしに来たのかと愚痴めいたことを発してしまうところからは、「かたくなしきひが事」を抑えきれなくなった源氏の様子が窺える。ともあれ、「なににか春のたづね来つらん」と詠んだ彼は春が来たことを認識している。

(D)に続く花散里の「夏衣たちかへてける今日ばかり古き思ひもすすみやはせぬ」（④幻537）に返した源氏の歌(d)でも、衣更えの時節が詠み込まれている。紫の上を思い出させる春が終わった今日からは無常な世がいっそう悲しく思われていると詠んだ源氏にとって時の流れは、紫の上を亡くした悲しみの治癒にはならない。悲しみに沈んでいる源氏が流れゆく時間をただ凝視していると言えようが、その様子は賀茂際を「今日は物見るとて、人々心地よげならむかし」と思っている(E)の波線部、(G)ののちに「夏の日」を詠み込む(g)の和歌、(H)の七夕に詠んだ(h)、(J)の重陽節会に詠んだ(j)、(L)の豊明節会に詠んだ(l)などの波線部からも窺える。他にも源氏が時節を感知していることは、彼の和歌に「鶯」（④幻528）、「山ほととぎす」（④幻541）、「蛍」（④幻543）などと季節の景物が用いられていることからも言える。このような幻巻の時間に関して稲賀敬二氏は、それまで源氏によって能動的に作り出されてきたものとは質を異にすると説き、その流れに源氏の身をゆだねる「延長も短縮もない均一な質で流れる静かな自然の「時間」」だと論じた。[12] このような時間の捉え方に関しては節を変えて考えたいが、ひとまずは源氏が時間の流れに身を委ねていると言えよう。が、右に確認した、彼が悲しみに沈んで時の流れを凝視している様子をも看過してはならない。この凝視の意味は、前節の後藤氏の論の言葉を借りて述べれば、「際限ない喪失の痛みにさいなまれ続け、絶え間ない悔恨にかきむしられ続けてきて、結局惑い続けてある他ない自分を見据えることが、まさに幻巻の、ひいては源氏一代記の到達点」なのである。(M)ののちに繰り広げられる紫の上の文反故の場面において、「死出の山越えにし人をしたふとて跡を見つつもなほまどふかな」（④幻547）の和歌が詠まれていることを考えると、幻巻の一年間悲しみの時間を凝視してきた末に源氏の得た結論が推察できる。彼は悲しみから遁れられないことを諦観的に受け止めているのである。そのような態度は(O)ののちに詠まれる源氏最後の歌、

(o)もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世も今日や尽きぬる　（④幻550）

からも窺える。周知のように、藤原敦忠の「もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に今年は今日に果てぬとか聞く」（『後撰集』冬・506）の上の句をそのまま用いた歌で、わが人生と幻巻の一年を振り返る源氏の感慨が詠まれている。ここでは「過ぐる月日も知らぬ間に」のところに注目したいが、それはもの思いに過ごしたその生と幻巻の一年を短く感じる心境の表現である。単なる修辞的な表現のようにも見えるが、源氏が幻巻の時間を凝視してきたことを考えると「過ぐる月日も知らぬ間に」という表現は格別な意味を作り出す。(o)の歌において源氏が、凝視してきた時の流れを「もの思ひ」の時間として捉え返し、幻巻の

一年と自分の人生を「もの思ひ」の離れないものだと捉えたことになる。紫の上の死後に「いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身」（④御法513）だと思った思惟を受けついでいることが窺えよう。

以上のような源氏を念頭において、御仏名の日に「光」を発する彼を考えると、その「光」には「もの思ひ」から遁れられないという諦観の思いが溶け込んでいると言える。が、その「光」が象徴するものは諦観の思いばかりではない。(N)の御仏名の日に詠まれた、

(n)春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてん　（④幻549）

という和歌には、未来に期待をつなぐかわりに、目の前の美しさを賞している源氏の姿勢が見られる。[13] 御仏名の日、人々の前に姿を現した源氏は、悲しみから遁れられないことを受け止めつつもそれに生の時間を押しつぶされない姿勢を持つ人物に変わっていたのである。

第三節　春の悲哀

前節では、幻巻の一年が源氏にとってどのような意味をもつかを考えたが、ここでは紫の上の死後初めて迎えた春における源氏がいかに時間を捉えているかを確認する。まず、前節であげた論で稲賀氏が幻巻から読み取った時間に関してもう少し詳しく触れておく。

稲賀氏は「延長も短縮もない均一な質で流れる静かな自然の「時間」」を、桐壺巻に繰り広げられる桐壺更衣邸への靫負命婦の来訪や藤壺入内といった、叙述の長短によって操作される時間に対峙するものとして捉えている。氏によると幻巻の時間には物語の操作が介入していないことになろう。ところで、「春の光を見たまふにつけても、いとどくれまどひたるやうにのみ、御心ひとつは悲しさ改まるべくもあらぬに、外には例のやうに人々参りたまひなどすれど、御簾の内にのみおはします。」（④幻521）で始まる幻巻の春に関する叙述は、他の季節に比べて長い。幻巻においても物語による時間の操作が行われていると考えられる。物語は、紫の上にあてられ、彼女を思い出させる春に対する源氏の感慨を他の季節より詳細に語っているのである。

幻巻の春に対する源氏の感慨は、前節の引用(a)「わが宿は花もてはやす人もなしなににか春のたづね来つらむ」の歌と、蛍兵部卿宮による、

香をとめて来つるかひなくおほかたの花のたよりと言ひやなすべき　（④幻521）

の贈答歌から窺える。源氏は年賀に参上した人々に対しては病気を装って対面を避けたが、「昔よりとりわきたる御仲」（③梅枝405）の弟の蛍兵部卿宮にだけは「ただうちとけたる

方にて対面したまはん」（④幻521）と思い、歌を贈る。対面を願いながらも「なににか春のたづね来つらむ」と、紫の上を喪って抑えきれなくなった悲しみを訴える源氏の歌に涙ぐんだ宮は、香りを求めてあなたを訪ねてきたのに、ただ通り一遍の花に引かれた者扱いなのか、と返した。悲しみに沈む源氏に春の情趣を知らせる風流人らしい歌だが、この歌に見られるのは蛍兵部卿宮の風流人ぶりだけではない。宮の歌は梅枝巻の薫物合せの場面を想起させる。(14)

月さし出でぬれば、大御酒などまゐりて、昔の御物語などしたまふ。霞める月の影心にくきを、雨のなごりの風すこし吹きて、花の香なつかしきに、殿のあたりいひ知らず匂ひみちて、人の御心地いと艶なり。・・・宰相中将（＝夕霧）横笛吹きたまふ。をりにあひたる調子、雲居とほるばかり吹きたてたり。弁少将拍子とりて、梅が枝出だしたるほど、・・・をかしき夜の御遊びなり。御土器まゐるに、（蛍兵部卿）宮

「鶯の声にやいとどあくがれん心しめつる花のあたりに

千代も経ぬべし」と聞こえたまへば、

（源氏）色も香もうつるばかりにこの春は花さく宿をかれずもあらなん

（③梅枝410～411）

梅枝巻での蛍兵部卿宮は「二月の十日、雨すこし降りて、御前近き紅梅盛りに、色も香も似るものなきほど」（③梅枝405）に薫物合せが行われる六条院を訪れる。薫物合せは明石の姫君の入内を控えての催しで、その判者を宮が務めることになる。右はそののちに開かれた宴の一部分で、月影のさす六条院には満開の紅梅の香りが漂い、人々は盃とともに懐旧の話を交わす。この宴の趣は、『新編全集』の頭注の指摘するように、桐壺院の思い出が語られる絵合せののちの遊宴（②絵合388～390）に似る。蛍兵部卿宮には懐旧の思いを引き起こす役割が担わされているのだろうか、幻巻での彼も右の場面に見える六条院の栄華という記憶を呼び覚ます。

歌に続く蛍兵部卿宮の言葉の「千代も経ぬべし」は、良く知られているように、素性の「いつまでか野辺に心のあくがれむ花し散らずは千代も経ぬべし」（『古今集』春下・素性96）を引いたものである。宮は、惜春の思いを詠んだ素性の歌を引いて、「花のあたり」のような六条院に心奪われて千年も居続けられそうだと源氏の栄華を讃える。明石の姫君の入内を目前にしている物語が、源氏の栄華が長らく続くことを宮に寿がせたとも考えられ、そのような物語の姿勢は続く源氏の歌からも察せられる。源氏は、宮の歌で栄華の象徴となっている「花」を「色」と「香」に細分化し、それに心奪われている宮の来訪が絶

えないように花の季節の「春」が続いて欲しいと詠んでいる。これに次いでは夕霧の笛声を讃える柏木の歌や六条院の繁栄を賛美する夕霧の歌があり、このことからも源氏一門の栄華や繁栄を寿ぐ場面であることが窺える。そのような場面における源氏の歌に「香」「春」「花」「宿」といった言葉が用いられることには留意したいが、それらは幻巻における源氏と蛍兵部卿宮の贈答歌にも見られる。のみならず、右の場面と幻巻における贈答歌とではともに宮の来訪に関する内容が取り上げられている。無論、幻巻での源氏が右の場面を想起して「わが宿は花もてはやす人もなしなにか春のたづね来つらむ」の歌を贈ったとは言えない。が、源氏と蛍兵部卿宮の贈答歌は、来訪が絶えないように春が続くことを願っていた梅枝巻の源氏を思い出させるのではなかろうか。宮は、源氏に右の場面を想起させるかのように、「香」と「花」を取り入れて、なおも源氏の「宿」に心惹かれていると詠んだのではないだろうか。すなわち、幻巻における蛍兵部卿宮が往時に変わらない源氏の栄華を歌った、ということである。源氏は往時の栄華を思い出したかどうか、梅花の下を歩く宮を見て「これより外に見はやすべき人なくや」（④幻522）と思うが、この思惟は源氏の栄華が宮の視線によってのみ保証されることを示す。源氏にとっては栄華を謳歌していた春が、紫の上の死とともに終わったのである。このような源氏の感慨を照らし出す宮の歌は、終わりかけた栄華の季節への哀惜を引き立てる。幻巻の春、物語が紫の上の死によって生じた変化を惜しんでいたとも言えようが、そのような哀惜は源氏も感じている。

引用(C)での源氏は紫の上が丹精を込めて造った庭を眺めるが、幻巻にはその庭を含めて源氏のいる空間が二条院か六条院か定かではない。これに関して前節の陣野氏は、空間を明示しないことが、源氏の心中に密着した幻巻の叙述と同様に、彼を明確に客体化しない方法だと論じた。大いに肯かれるが、これは紫の上を偲ぶ源氏の想念とも関連づける必要があるように思われる。なぜなら、先に触れた蛍兵部卿宮との贈答でもそうだったが、その居場所が紫の上の不在を感じさせる空間となっているためである。結論から述べておくと、二条院か六条院かを特定しないことによって、物語が源氏の想起する記憶を、二条院時代や六条院時代に限定することなく、紫の上と過ごしてきた時間全般に広げ得た、ということである。源氏は、須磨・明石の不遇時代を除いて、二十余年を紫の上とともに過ごしてきた。その思いは、幻巻の春に六条院で行われる明石の君との対面で、「年経ぬる人に後れて、心をさめむ方なく忘れがたきも、ただかかる（夫婦）仲の悲しさのみにはあらず。幼きほどより生ほしたてしありさま、もろともに老いぬる末の世にうち棄てられて、わが身も人の身も思ひつづけらるる悲しさのたへがたきになん」（④幻535）と発せられた

彼の言葉からも確認できる。物語は、繰り返されてきた春を想起させるべく、空間を特定しなかったのである。引用(C)にはそのような空間で春の庭を眺めて紫の上を喪った悲しみに沈む源氏の様子が描かれている。傍点を付した「御前のありさまいにしへに変らぬ」のところに留意したいが、そこでは春が循環する季節として捉えられている。紫の上の生前と変わらない庭の様子を通して源氏が季節の循環を感じ取ったとも言えよう。が、彼には循環する季節とは裏腹な時間の流れも察せられている。源氏は紫の上の不在を通じて、季節のような循環が許されない、有限で直線的な命の時間を感知したのである。この時間認識を語るために紫の上の生前と変わらない庭の様子が取り上げられた、と言っても良い。無限に広がる季節の時間に照らされた有限な命の時間が無常感を覚えさせたのだろうか、源氏は人里離れた奥山へ遁れることを考える。

源氏の感知する時間が、循環するものから直線的なものになりかわったことは、

外の花は、一重散りて、八重咲く花桜盛り過ぎて、樺桜は開け、藤はおくれて色づきなどこそはすめるを、（紫ノ上ガ）そのおそくとき花の心をよく分きて、いろいろ尽くし植ゑおきたまひしかば、時を忘れずにほひ満ちたるに、若宮（＝匂宮）、「まろが桜は咲きにけり。いかで久しく散らさじ。木のめぐりに帳を立てて、帷子を上げずは、風もえ吹き寄らじ」と、かしこう思ひてのたまふ顔のいとうつくしきにも、（源氏ハ）うち笑まれたまひぬ。（源氏）「おほふばかりの袖求めけん人よりは、いとかしこう思し寄りたまへりかし」など、この宮ばかりをぞもて遊びに見たてまつりたまふ。（源氏）「君に馴れきこえんことも残りすくなしや。命といふもの、いましばしかかづらふべくとも、対面はえあらじかし」とて、例の、涙ぐみたまへれば、いとものしと思して、（匂宮）「母（＝紫ノ上）ののたまひしことを、まがまがしうのたまふ」とて、伏目になりて、御衣の袖を引きまさぐりなどしつつ、紛らはしおはす。

（④幻529～530）

と、彼が幼い匂宮とともに紫の上の植えた桜に関して話し合う場面からも確認できる。六条院の外では一重の桜が散り、八重桜の盛りも過ぎて樺桜へと変わりゆく。それに比べて六条院は常に花で満ちた空間で、そこで源氏は幼い匂宮とともに桜花を見ている。匂宮の、風があたらないように桜の周りに帳を立てていつまでも花を散らさないでおきたい、という発想はいかにも子どもらしい。が、そこには幼いながらも祖母の形見の桜が散りゆくことを哀惜する思いがある。これを聞いた源氏は、『後撰集』の「大空に覆ふばかりの袖もがな春咲く花を風にまかせじ」（春中・よみ人知らず64）を想起して、その歌を凌いだ発

想だと匂宮を褒める。かわいい孫に対する冗談のようにも見えるが、その果てに涙ぐむ様子から考えると、それは単なる冗談話ではなさそうである。

引用に続いて「隅の間の高欄におしかかりて、御前の庭をも、御簾の内をも見わたしてながめたまふ」源氏の様子（④幻530）が取り上げられる場面があり、その場面の次には源氏が匂宮を連れて女三の宮を訪れる内容がある。薫とともに走り回って遊ぶ匂宮が「花惜しみたまふ心ばへ深からず」（④幻531）と思われることから、連続する時間であることが窺える。それを押さえた上で右の引用に戻るが、右の傍線部には出家の時期が迫ってきたことに言及し、出家したのちは匂宮との対面もあり得ないと語る源氏の言葉があり、続いてはそれを聞いた匂宮が御法巻の夏にあった紫の上の「まろがはべらざらむに思し出でなんや」（④御法502）の言葉を想起する内容がある。紫の上がそうだったように、源氏も匂宮との別れに思い至っているのである。それを導いたのが、散る桜を留めたいという惜春の思いであることを念頭に置くと、匂宮との別れの瞬間に向かって流れる時間に対する源氏の哀惜が読みとれる。流れゆく時間に対する源氏の感慨は「今はとてあらしやはてん亡き人の心とどめし春の垣根を」（④幻530）と詠んだ歌にも表れている。高欄に押しかかって御簾の内を見ていた源氏には、紫の上の死後に「墨染の色こまやかに着つつ」いた（④幻522）女房たちが、一部ではあるものの、「例の色あひ」（④幻530）に衣色を変えていることが目にとまった。「今はとてあらしやはてん・・・」の歌は、そのような時間の経過による変化を感じて詠まれたもので、それを詠む源氏は「人やりならず悲し」い（④幻530）。ここに至っては、春の循環を刻んでいた庭さえもが、源氏には、いつかは荒れ果ててしまうものとなりかわっているのである。循環する季節の時間さえもが有限な命の時間になりかわり、源氏がその消失を悲しんだと言えよう。

紫の上が手入れした庭を見ながら詠んだ「今はとてあらしやはてん亡き人の心とどめし春の垣根を」の歌に消えゆくものに対する哀感が漂うことはすでに触れた通りだが、それは「一たび家を出でたまひなば、仮にもこの世をかへりみんとは思しおきてず、・・・」（④幻494）と叙された、出家に対する源氏の高い理想をも想起させる。源氏は出家したのちは俗世を顧みないという高い理想を持っていたにもかかわらず、というより、その厳しい理想があるからこそ、死に等しい出家の時期が迫ってくることに悲しみを感じる。現世への執着とも言える哀感だが、幻巻の春、源氏は現世からの離脱を遂げられなかった憂愁をも抱えていた。そのような憂愁を抱きながら俗世で過ごす月日に対する源氏の心境はどのようなものだったのだろうか。

第四節　幻巻の「今日」

御法巻には紫の上に死なれたのちの源氏がわが生涯を振り返る内容が、

いにしへより御身のありさま思しつづくるに、鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに来し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな、今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ、ひたみちに行ひにおもむきなんに障りどころあるまじきを、いとかくをさめん方なき心まどひにては、願はん道にも入りがたくや、とややましきを、「この思ひすこしなのめに、忘れさせたまへ」と、阿弥陀仏を念じたてまつりたまふ。（④御法513）

と繰り広げられる。源氏は自分の生涯を人より優れたものだと思うものの、他方では憂愁に満ちていたと反芻する。若い頃から覚えていた無常感が彼を出家に導く仏の教えだったという回想からは、出家を運命として受け止める思惟が垣間見られる。源氏は、出家すべく運命付けられた身を、憂愁に堪えながら俗世に置いて来て、その果てに紫の上の死という無類の悲しみを経験するようになったと嘆いている。ここで第一節に先行研究としてあげた阿部氏の論を想起したいが、氏は、紫の上の死による悲しみと源氏の生涯にわたって抱えてきた憂愁とが質的に異ならないことを指摘した。言い換えれば、幻巻の一年が、悲しく無常な世からの離脱を願いながらもそれが叶えられなかった憂愁を感じる時間でもあった、とも言える。そのような憂愁に注目すると、源氏の出家するか否かの問題を看過してはなるまい。だが、物語は源氏がいかなる形で出家を遂げ、どのような出家生活を送ったかを語らない。源氏が出家を遂げたことは「二三年ばかりの末に、世を背きたまひし嵯峨院」（⑤宿木395）とあるところから確認できるものの、物語が出家そのものに対してどれほどの関心を持っていたか、なお疑問が残る。

ともあれ、幻巻には出家を遂げられなかったことによる源氏の悲嘆は繰り返し取り上げられている。若い頃から出家願望を抱いてきた源氏は、紫の上の死後出家を止める「ほだし」がなくなったにもかかわらず、それに踏み切ることができない。その理由は「かかる悲しさの紛れに、（源氏ハ）昔よりの御本意も遂げてまほしく思ほせど、心弱き後の譏りを思せば、このほどを過ぐさんとしたまふに、胸のせきあぐるぞたへがたかりける。」と語られるところ（④御法511）や、右の引用に「いとかくをさめん方なき心まどひにては、願はん道にも入りがたくや」とあるところから窺える。一見すると、源氏が世間体を意識

しながら紫の上の死による悲しみが和らぐことを待って幻巻の時間を過ごしたかに見える。が、紫の上の文反故の場面でなおも悲しみを訴える源氏の歌や、幻巻の春に「人の言ひ伝ふべきころほひをだに思ひのどめてこそは（出家ヲ遂ゲヨウ）」（④幻527）と思うところに留意すると、幻巻の一年は源氏が紫の上を喪った悲しみから抜け出るための時間ではなかったと言える。むしろ、先行研究としてあげた益田勝実氏の指摘の通り、源氏が紫の上の死を悲しむこと自体に意義を求めるのが妥当のように思われる。ところで、先に触れたように、紫の上の死による悲しみは、深い道心をもったまま出家を遂げられなかった源氏の憂愁と無関係ではない。

（ア）うき世にはゆき消えなんと思ひつつ思ひの外になほぞほどふる　（④幻523～524）

（イ）（女三ノ）宮は、仏の御前にて経をぞ読みたまひける。何ばかり深う思しとれる御道心にもあらざりしかど、この世に恨めしく御心乱るることもおはせず、のどやかなるままに紛れなく行ひたまひて、一つ方に思ひ離れたまへるもいとうらやましく、かくあさへたまへる女の御心ざしにだにおくれぬることと口惜しう思さる。（④幻531）

（ウ）人をあはれと心とどめむは、いとわろかべきことと、いにしへより思ひえて、すべていかなる方にも、この世に執とまるべきことなくと心づかひをせしに、・・・末の世に、今は限りのほど近き身にてしも、あるまじき絆多うかかづらひて今まで過ぐしてけるが、心弱う、もどかしきこと　（④幻533）

引用（アからウまでは出家を遂げなかったことに対する源氏の思いが読みとれる箇所である。（アは、女三の宮が降嫁して三日目を過ごした暁の記憶に導かれる源氏の歌である。宮の降嫁に苦しみながらも自分を優しく迎えてくれた紫の上を思い出していた源氏は、降雪を知らせる女房の声を聞く。彼はその往時と同じ気持ちになったものの、紫の上がそばにはいない。「うき世」からの離脱を願いつつも思いの外に月日を過ごしているという歌は、紫の上の不在を大きく感じる源氏の悲しみから詠まれたのである。そのような展開を視野に入れると、「うき世」という表現は紫の上の不在によって導かれたかに思われる。が、彼が「なほ常なきものに世を思して、（冷泉帝ガ）いますこしおとなびおはしますと見たてまつりて、なほ世を背きなん」（②絵合392）や「故（桐壺）院に後れたてまつりしころほひより、世の常なく思うたまへられしかば、この本意深くすすみはべりにしを、・・・」（④若菜上46）などと、無常な世から遁れることを願ってきたことを念頭に置くと、（アの歌における「うき世」には、紫の上の不在による悲しみと無常を感じながらも出家できない悲しみが重ね合わせられていると言えよう。源氏はそのような悲しみの中で月日を過ごして

いたのである。

（イ）は六条院における女三の宮との対面場面で、そこでの源氏は出家した女三の宮を羨み、道心の浅かった彼女にさえ出家が遅れたことを口惜しく思う。類似する心境は若菜下巻で朧月夜の出家を聞いた源氏が「いとあはれに口惜し」い思いで消息を贈るところ（④若菜下261～262）や、鈴虫巻での彼が斎宮女御に対して「我より後の人々に、かたがたにつけて後れゆく心地」がすると語った（④鈴虫387）ところからも窺える。源氏は紫の上の死ぬ前からも、出家を遂げないで過ごす時間に対して悔恨の思いを抱えていたのである。そのような思いを、「人の言ひ伝ふべきころほひをだに思ひのどめてこそは（出家ヲ遂ゲヨウ）」とあった幻巻の春における思惟に考え合わせると、無常感による悲しみから遁れるべく、出家の時を待ち望んで日々を過ごす源氏の心境が顕れてくる。が、このような心境は前節で確認した時間認識とは矛盾する。幻巻における源氏は無常な世からの離脱を願いながらも、現世で過ごす時間に執着していたのである。幻巻には流れる時間に対して喜ぶことも悲しむこともできない源氏の悲哀が描かれている、とまずは言えよう。

ところで、女三の宮との対面ののち、同じ六条院で行われる明石の君との対面において発せられたウの言葉から察すると、源氏は執着を断ち切るべきと知っている。それを知りつつも執着から遁れられない源氏の様子が窺え、その矛盾による悲哀を描くために物語が彼に出家を許さなかったと言える。が、御仏名の日に詠まれた引用(n)「春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてん」の歌に漂う情趣は悲しみだけに留まらない。それは、同じく「今日」という歌ことばが用いられた、引用(d)「羽衣のうすきにかはる今日よりはうつせみの世ぞいとど悲しき」や、引用(l)「宮人は豊の明にいそぐ今日ひかげも知らで暮らしつるかな」の源氏の歌に比べれば明らかである。幻巻の夏から物語が「今日」という歌ことばを畳み重ねるようにして源氏の日々を刻んでいることは鈴木宏子氏の指摘(15)にあるが、御仏名の日以前の源氏の「今日」は「ひかげも知ら」ない「悲し」みに暮れる時間だった。ところが、引用(n)の歌における源氏の「今日」は死に向かう命の哀感とともに、「わづかに気色ばみはじめ」た（④幻549）梅花の美しさをも感じる時間となっている。時の流れに悲哀を感じつつも、それに順応して「色づく梅」を楽しんで生きるしかないと訴えかけるような歌である。この歌に見る「今日」に対する認識こそが、悲しみに沈んで流れる時間を凝視してきた末に得た悟りではなかろうか。

以上に幻巻での源氏が時間に対して相反する認識を持つことを確認した。源氏は憂愁を感じる時間から遁れることを願いつつも、残り少ない生の時間に哀感を持っている。この矛盾した時間認識を描くべく、物語は源氏に出家を許さないでさらなる時間を紡ぎ出す。その時間は、相反する時間認識にさいなまれる源氏に構うことなく、無心に流れゆく。その残酷な時間の前で源氏はただ悲しみながらその流れを眺め、果てには悲哀から遁れられないことを受け止める。その悲哀からの離脱を懇願していた彼が生の時間に対する認識を変えたとも言えよう。変化した源氏の認識は「春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてん」の歌から窺える。時の流れに悲哀を感じつつも目の前の梅の美しさを楽しもうと決心した源氏は、時間の作り出した変化に従順な姿勢をとるようになったのである。

時間に従順な源氏の様子を最後に語って筆を止める物語の姿勢から、それまで紡ぎ出してきた内容が時間に対する源氏の対抗だったと考えられる。源氏は生きながらえることを悲しみ、流れる時間を哀惜することで時間に抗ってきた。源氏によって主観的に捉えられる時間が悲しみに満ちた生を照らし出しているとも言えよう。が、その対抗の時でさえ時間は流れゆき、命を滅ぼしてはまた新たな生命を作り出す。そのような変化に従順な姿勢をとるようになった源氏の様子を最後に描いて終わることから考えると、物語の興味は不生不滅の生ではなく有生有滅の時間にあったようである。

【注】

(1)阿部秋生「六条院の述懐」『東京大学教養学部人文科学科紀要』一九六六年十二月、同一九六九年十二月、同一九七二年五月、のち『光源氏論―発心と出家』東京大学出版会一九八九年八月

(2)藤井貞和「源氏物語主題論」『源氏物語の始原と現在 文庫本』二〇一〇年二月

(3)鈴木日出男「光源氏の最晩年―源氏物語の方法についての断章―」『学芸国語国文学』一九七三六月

(4)益田勝実「光源氏の退場―「幻」前後―」『文学』一九八二年十一月

(5)神野藤昭夫「晩年の光源氏像をめぐって―幻巻をどう読むか―」『今井卓爾博士古稀記念 物語・日記文学とその周辺』桜楓社 一九八〇年九月、のち『テーマで読む源氏物語論 第1巻 「主題」論の過去と現在』勉誠出版 二〇〇八年十月

(6)鈴木宏子「「幻」巻の時間と和歌―想起される過去／日々を刻む歌―」『源氏物語の展望

第三輯』三弥井書店 二〇〇八年三月

(7) 後藤祥子「哀傷の四季」『講座源氏物語の世界 第七集』有斐閣 一九八二年五月

(8) 玉上琢彌『源氏物語評釈 第九巻』角川書店 一九六七年七月 181頁

(9) 陣野英則「光源氏の最後の「光」―「幻」巻論―」『源氏物語の話声と表現世界』勉誠出版 二〇〇四年十月

(10) 河添房江「『源氏物語』の比喩と象徴―「光」「光る君」「光る源氏」再考―」『源氏物語時空論』東京大学出版会 二〇〇五年十二月

(11) 「…此巻には正月より十二月まで月をかゝせす次第にのせたり余巻にはいまたあらさる筆法也六条院の悲嘆の事日々月々にわすれもやらす紫のうへをしたひ給心をあらはせるなり…」(『花鳥余情 源氏物語古注集成 第1巻』桜楓社 一九七八年四月)

(12) 稲賀敬二「幻〔雲隠六帖〕」『源氏物語講座 第四巻 各巻と人物 Ⅱ』有精堂出版 一九七一年八月

(13) 小町谷照彦「「幻」の方法についての試論―和歌による作品論へのアプローチ―」『日本文学』一九六五年六月、のち『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会 一九八四年八月

(14) 三田村雅子「梅花の美」『講座源氏物語の世界 第六集』有斐閣 一九八一年十二月

(15) 鈴木宏子氏の注(6)の論文。

第三章　夕霧巻再考

第一節　問題の所在

藤裏葉巻において源氏を太上天皇に準えさせることで、臣下でも帝でもないという謎めいた予言の実態を明らかにした物語は、それを継ぐ若菜上巻で語りの調子を一変させる。予言に沿った展開から解放された物語は、源氏の栄花成就の影に埋れていた女の生き方という問題を深化発展させ始めた。女三の宮の降嫁を始発にして、紫の上の苦悩と柏木の犯した密通事件を語り、これらの事件を通して物語は、女の生き難さや断絶した人間関係を語ったのである。ところで、これらを語ったのちに物語は突然、源氏や紫の上を端役に位置させた、夕霧巻を語り出す。夕霧巻における源氏は、わが子と落葉の宮の関係を観察する端役にしかなり得ないが、このことから夕霧巻は「末端肥大症を呈する」[1]ものだと考えられたわけで、物語が晩年に至った源氏に代わる夕霧を立てて新たな展開を試みたとも考えられる。たしかに、夕霧巻で第二部世界を底流する女の生き難さという主題が、落葉の宮の境遇をもって顕わになることからすると、夕霧巻は中心人物をかえて第二部の問題意識を継承させているとも考えられよう。[2] 女三の宮と落葉の宮とに纏わる話は皇女を巡るものである点で共通しており、さらに中年以後における女君たちの自己の社会的地位という第二部世界の問題設定[3]も落葉の宮の身の上に受け継がれているので、若菜上巻以来に顕わになった問題意識が夕霧巻で繰り返されたと考えることもできよう。しかしながら、このような観方では夕霧巻で強調される夕霧の「まめ人」という特性が看過されているように思われ、物語が「まめ人」の恋を取り上げた意義を見出し難い。

女の苦悩をもたらすものとして夕霧の「まめ」が設けられる必然性への疑問によって本稿を書き起こすわけだが、その必然性を突き詰めることで光源氏の人生を語る末尾に夕霧が主役を担う意味が明らかになって来よう。すなわち、夕霧と落葉の宮の関係を語る物語をそれだけで独立した短編的なものとしてみるだけでなく、年老いた源氏の相対化という、長編的視野から捉える試みである。結論を先に述べておくと、夕霧巻では、第二部の世界において不断に問われ続けてきた紫の上の存在意義[4]に対する答えを、物語がそれなりに提示しているということで、その提示過程に続編への橋渡しとしての位相[5]が存するということである。

以上のようなことを検討するに際してはまず、夕霧という人物を中心人物になす物語の方法を考え、そのような夕霧の造型が落葉の宮の苦境といかに関わり、いかなる人間関係

を築いているかを確認する。最後には、夕霧巻に語られる紫の上の述懐が物語の展開においていかような意味を持つかを考察する。

第二節　夕霧という人物

夕霧巻における夕霧の問題として、「まめ人」が突然に好色めいた態度を表すことがあげられる。落葉の宮を悩ませる夕霧の好色をいかに考えるかという問題である。落葉の宮に対する好色心を表すことで「まめ人」夕霧が変質したかのようにも思われるが、その変質は実のところ夕霧の「まめ」に潜むものの表出に過ぎない。[6] [7] 変化という問題から考えると、夕霧巻におけるもっとも著しい変化は、雲居雁と夕霧の関係に見出される。夕霧が落葉の宮と結ばれた後に、雲居雁は「まめ人の心変るはなごりなくなむ…」（④夕霧482）と思い、実家に帰ってしまう。夕霧が落葉の宮と結ばれることで雲居雁の身の上に生じた変化の様子は、その後日談として夕霧が雲居雁と落葉の宮の居所を十五日ずつ通うという記述（⑤匂宮20）からも窺われる。夕霧が落葉の宮を手に入れて行く話を取り上げる夕霧巻はその変化の過程として考えることができ、さらにそれを夕霧の「まめ」と好色の問題から考えることができる。

少女巻に始まる夕霧と雲居雁の物語は、藤裏葉巻で二人が結ばれるに至るまで、約七年間、停滞したままであった。源氏と政治的に対立していた雲居雁の父、内大臣（以降ハ致仕の大臣ニ統一）が二人の関係に反対していたために夕霧と雲居雁の幼い恋は藤裏葉巻に至るまで実ることが許されなかった。その七年の間、雲居雁への思いを保ち得た夕霧は紛れもなく「まめ人」であり、そのような捉え方は若菜上巻で女三の宮の乳母に「もとよりまめ人にて、年ごろもかのわたりに心をかけて、外ざまに思ひ移ろふべくもはべらざりけるに、…」（④若菜上27～28）と評されるところにもなされている。女三の宮の婿選びの際に発せられた乳母の言葉は、夕霧が雲居雁一筋なので女三の宮の婿としては適しないという判断の上に発せられたものだが、この評に夕霧巻で落葉の宮を手に入れようとする夕霧の様子を照らして考えると、夕霧の「まめ」は矛盾[8]を孕むかに思われる。

ところが、その矛盾は夕霧巻以前からも窺われ、野分巻で偶然の機会に継母紫の上を垣間見した夕霧の様子は、「まめ心もあくがるる心地す」（③野分285）と語られた。紫の上を垣間見してから、夕霧は継母に対して雲居雁への恋情に勝る感情を抱いて来たわけだが、そのような夕霧を、雲居雁に対するひたむきな純情を抱いてきた男だとは言い難いだろう。さらに夕霧は、源氏に降嫁してきた女三の宮が紫の上には及ばないだろうと考えながらも、

彼女を「見たてまつるをりありなむやとゆかしく」（④若菜上135）思う人物である。六条院における蹴鞠の際に突然に起こった柏木による女三の宮の垣間見は、その場に居合わせていた夕霧の願いによって実現されたかにも見える。にもかかわらず、夕霧は女三の宮の乳母の言葉に見るような評を被る人物だった。夕霧はこの物語に登場する他の男たちと同様に美しい女君に心惹かれずにはいられない男の一人でありながら、世間には「まめ人」として通っているのである。夕霧と落葉の宮の物語は、好色心を宿しながら世間には「まめ人」として知られているという夕霧の人物特性があって初めて語られるものである。

そのような夕霧の人物特性は夕霧巻の冒頭で、

まめ人の名をとりてさかしがりたまふ大将（＝夕霧）、この一条宮の御ありさまをなほあらまほしと心にとどめて、おほかたの人目には昔を忘れぬ用意に見せつつ、いとねむごろにとぶらひきこえたまふ。下の心には、かくてはやむまじくなむ月日にそへて思ひまさりたまひける。（④夕霧395）

と語られるところからも確認できる。この冒頭は吉岡曠氏が指摘したように、横笛巻の末尾で落葉の宮への好色心を気づかれた夕霧が源氏の訓戒を受けて、「何の乱れかはべらむ。なほ常ならぬ世のあはれをかけそめはべりにしあたりに、心短くはべらんこそ、なかなか世の常の嫌疑あり顔にはべらめとてこそ。」（④横笛367）と強弁するところを受けてのものである。[9]表向きは「まめ」に振る舞うものの、その内側に好色心を孕ませた夕霧の様子は、すでに確認したように、落葉の宮との関係以前にも見られるものであった。そのような人物の好色心が落葉の宮との関係において初めて表出されたわけだが、それについては夕霧が「さるまじきことに心を乱りて、かくしも身にかふべきことにやはありける」（④柏木326）と柏木の死を捉えていたことが注目されよう。柏木と女三の宮との密通までは知らないものの、柏木が女三の宮ゆえに身を滅ぼしたと思う夕霧は、柏木の辿った道筋をあるまじきことだと思った。そのことから考えると、夕霧は落葉の宮との関係で身を滅ぼすことはないだろうと判断したことになるが、物語は、一身上の安危とは無関係な状況下で、世間に「まめ人」として高評を博してきた夕霧が内側に潜む好色心をいかに働かせるかを語る。

夕霧巻の冒頭に明かされるように夕霧の「まめ」は好色心を隠すためのものとして、そして一条御息所の死後には好色心を成就する手段としての働きを持つ。夕霧は強引に落葉の宮を一条宮邸に帰宅させたことを「一条御息所の心知りなりけりと人には知らせん」（④夕霧461）と、一条御息所の遺志によるかのように振る舞った。世間的に「まめ」を装って

落葉の宮を引き取ったわけだが、そのような「まめ」は、好色心を満たすための手段に過ぎない。己の好色心を満たそうと努める夕霧は、落葉の宮に心を移してもう自分を顧みることはないだろうと雲居雁に思われ、なおも「まめ人」とされる。雲居雁の思惟に見る「まめ人」の性質は、源氏が「人の譏りどころなく、めやすくて過ぐしたまふを、面だたしう、わがいにしへ、すこしあざればみ、あだなる名をとりたまうし面起こしに、うれしう思しわたる」（④夕霧456）と夕霧を評価したものを裏返しに捉えたものである。とどのつまり、物語は「まめ」を多義的に用いることで、夕霧が落葉の宮を手に入れる過程を描き得たのであり、またそれによって、「なさけ」において源氏にこよなく劣った人物[10]の造型が可能だったのである。

第三節　落葉の宮の苦境

夕霧巻には多義的な「まめ」を用いることで、「なさけ」において源氏にこよなく劣った人物が造型されたが、そのような人物を造り出すところに物語の狙いがあったとは考えられない。好色心を成就させようと世間体を装う、夕霧の策略的な恋をもって物語が語ろうとしたもの、すなわち自分の意思とは無関係な運命を辿るしかなかった落葉の宮の生き様により重きを置きたいが、このような落葉の宮の様子を通して物語は、思い通りに生きられない女の苦悩という問題を顕わにする。だが、物語が、母の喪中に塗籠の中で夕霧と結ばれた落葉の宮のありさまを、

男（＝夕霧）の御さまは、うるはしだちたまへる時よりも、うちとけてものしたまふは、限りもなう清げなり。故君（＝柏木）のことなることなかりしだに、心の限り思ひ上がり、（落葉ノ宮ノ）御容貌まほにおはせずと、事のをりに思へりし気色を思し出づれば、まして、かういみじう衰へにたるありさまを、しばしにても見忍びなんやと思ふもいみじう恥づかし。（④夕霧480～481）

と伝えるところからすると、物語が取り上げようとした問題は、思い通りに生きられない女の苦悩だけに止まらないように思われて来る。落葉の宮の「心ばせ」（④柏木339）に惹かれていた夕霧の恋の真相を知らないで、己の衰えた容貌ゆえに愛されるはずがないと苦悩する宮の内面は、相手の内面を理解し合えない世界に住む住民のそれである。このような落葉の宮の内面は、引用にもあるように、彼女を内親王としてもてなしたものの、愛してはくれなかった柏木によって築かれたものである。このことからも夕霧と落葉の宮の関係を柏木物語の後日談として位置づけられようが、ここでは、夕霧の愛情に対する落葉の宮

の不信感が、彼女を周りの人たちに誤解させた夕霧によってではなく、落葉の宮に「めざましき心のなりにしさま」（④夕霧410）と回顧される、柏木との夫婦仲の苦い経験によって生じていることに注目したい。柏木に愛されなかった経験が男の愛情に対する落葉の宮の不信を招いて、夕霧との心情の交流を遮るかのような働きをしている。実のところ、夕霧巻には男の恋がさまざまな誤解や不信を孕みながら、登場人物たちの人間関係に波紋を及ぼしてゆく構図が繰り返され、これが夕霧巻を紡ぎ出す重要な方法となっている。

すでに述べたように、夕霧巻には夕霧が落葉の宮を掌中に収めてゆく話が物語られるが、物語は落葉の宮を手に入れようと努める夕霧を描きながら、彼を拒む落葉の宮を造型する。落葉の宮が夕霧を拒む理由としては、右の引用にも窺われるように、柏木に愛されなかった経験が取り上げられる。男の愛情に対する不信が落葉の宮の拒絶の根底にあると考えられるが、落葉の宮が夕霧を拒んだ理由は男の愛情に対する不信だけではない。母や致仕の大臣家との関係を憂慮したことも、その理由となっている。以降に繰り広げられる物語の内容を考えると、夕霧巻に中心的に取り上げられる問題は、男の愛情に対する落葉の宮の不信感よりも、夕霧の恋によってもたらされた問題であり、その問題への憂慮が宮の夕霧を拒む重要な理由となっている。

夕霧が小野の山荘に滞在したことは、律師の口を通して一条御息所の耳にまで伝わり、それを伝えられた一条御息所は落葉の宮と夕霧の関係を誤解してゆく。それに際して、落葉の宮を悩ませたことは、くつろぐ姿を夕霧に不意に見られたことよりも、それを母一条御息所がいかに思うかだった。落葉の宮は「つゆ隔てずぞ思ひかは」している（④夕霧415）母に、「隔てける」（④夕霧414）、「つれなくてありしよ」（④夕霧421）などと思われるのが苦しかったのである。物語はそのような落葉の宮の心内を、「ただおぼえぬ人にうちとけたりしありさまを見えしことばかりこそ口惜しけれ、いとしも思ししまぬを、かくいみじう思いたるを、あさましく恥づかし」（④夕霧434）と伝える。夕霧との間に実事がなかったために彼の来訪のないことを何とも思わない落葉の宮は、母の「いみじう思いたる」様子を見て「あさましく恥づかし」く思ったのである。夕霧に捨てられたと思う母の誤解を知らない落葉の宮は、「軽らかに人に見えたまひけむこそいといみじけれ」（④夕霧420）と思った母一条御息所に見る、皇女としての矜持[11]を意識するのみである。物語は、事件の真相が分からない一条御息所と、そのような母の誤解にまったく気づかない落葉の宮という構図をもって、「つゆ隔てずぞ思ひかは」している母娘の仲を乖離させたのである。この母娘の誤解が、内親王である落葉の宮への敬意を欠いた夕霧の厚顔な求愛に始まることか

ら、たしかに夕霧と一条宮家の母娘との間には皇女の格式に対する認識の差があると言い得る。だが、夕霧と落葉の宮の関係における主眼はやはり、一条御息所の死後に繰り広げられる、我田引水に振る舞う男によって紡ぎ出される女の苦境である。[12]

夕霧と娘の関係を誤解していた一条御息所は、事の真相を探るべく「女郎花しをるる野辺をいづことてひと夜ばかりの宿をかりけむ」（④夕霧426）という和歌を夕霧に送った。だが、嫉妬する雲居雁の妨害によって夕霧の返事が遅れたために、一条御息所は誤解を晴らすことができず、結果的に一条御息所の和歌は落葉の宮を一条宮邸に帰宅させる名分を夕霧に与えるのみであった。夕霧に落葉の宮を許すようにも、また夕霧を詰るようにも読み取れる一条御息所の和歌を、夕霧は、己の世間的な評判に結び付けて、世間体を保ったまま落葉の宮を掌中に収める根拠に用いた。このような夕霧の振る舞いによって落葉の宮は「かく女の御心ゆるいたまはぬと思ひよるひともなし」（④夕霧466）という境遇に置かれる。落葉の宮が夕霧の策略的な恋に抵抗したにもかかわらず、世間にはその抵抗が知られなかったのである。このような世間の反応は夕霧と結ばれた後に致仕の大臣が「契りあれや君を心にとどめおきてあはれと思ふらめしと聞く」（④夕霧486）と落葉の宮を恨む和歌を送ったことと響き合うが、致仕の大臣も落葉の宮の拒絶を知らない世間の一人に過ぎず、この致仕の大臣の和歌によって落葉の宮は「故上おはせましかば、いかに心づきなしと思しながらも罪を隠いたまはまし」（④夕霧487）と亡き母を思いながら落涙する。落葉の宮が致仕の大臣に恨まれる事態は、「大殿などの聞き思ひたまはむこと」（④夕霧410）や「大殿のわたりに思ひのたまはむこと」（④夕霧425）と一条宮家の母娘に繰り返して意識されていたこととも照応する。物語は、外聞を意識したために夕霧を拒んだにもかかわらず、策略的な男の恋によって致仕の大臣に恨まれ、大臣の手紙を届けに来た蔵人少将に好色的な女に誤解された（④夕霧488）落葉の宮の苦境を描く。

夕霧巻で物語は、人物たちが事の真相に触れられない状況を繰り返し提示することで、落葉の宮が周りから孤立して行く苦境を築き上げるが、その苦境を築くところに男の恋が関与する。落葉の宮に対する夕霧の恋も、母一条御息所や致仕の大臣家と落葉の宮との関係を隔絶させる働きをするが、それをもって物語は、皇女としてそして柏木の未亡人として苦しむ落葉の宮の立場を顕わにした。

第四節　紫の上の内面叙述

夕霧と落葉の宮の関係に関する噂は源氏の耳にも伝わり、源氏はそれを聞いて「女のた

めのみにこそいづ方にもいとほしけれ」（④夕霧456）と落葉の宮や雲居雁に同情する。その同情に続いて源氏は、自分の死後に取り残される紫の上の境遇を、落葉の宮のそれに重ね合わせて心配する。この源氏の心配に導かれて、

女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、をりをかしきことをも見知らぬさまにひき入り沈みなどすれば、何につけてか、世に経るはえばえしさも、常なき世のつれづれをも慰むべきぞは、おほかたものの心を知らず、言ふかひなき者にならひたらむも、生ほしたてけむ親も、いと口惜しかるべきものにはあらずや、心にのみ籠めて、無言太子とか、小法師ばらの悲しきころにする昔のたとひのやうに、あしき事よき事を思ひ知りながら埋もれなむも言ふかひなし、わが心ながらも、よきほどにはいかでたもつべきぞ、（④夕霧456～457）

と、紫の上の述懐が語られる。この心内叙述からは女三の宮の降嫁後に内面と外部とを峻別して生きざるを得なかった紫の上の孤愁[13]が窺われる。ところで、源氏の心配に導かれることからすると、この内面叙述はやや唐突なものだと考えざるを得ない。紫の上の心内叙述は、彼女の境遇を心配した源氏の言葉に導かれながらも、それとは噛み合わず、「もののあはれ、をりをかしきこと」を知っていても知らない振りを強いられる女の生き方への嘆きは、前節に確認した落葉の宮の苦境とも関わらないように思われる。『玉の小櫛補遺』が「紫の上のこころをのべたる、やがてこの作者の心とみるべし」と、右の叙述を作者に結び付けて解しようとしたのも、おそらく以上のような理由に起因しよう。しかし、紫の上の心内述懐を作者に結び付ける考え方は、物語の文脈に即した考え方に置き換えられるべきであろう。[14]物語の文脈に即して紫の上の心内叙述を考えるためには、源氏が夕霧の前で想夫恋を演奏した落葉の宮を非難する内容に遡る必要がある。

一条御息所より柏木の横笛を渡された後に柏木が夢に表れたので、夕霧はその遺品の処置に思い煩って源氏のいる六条院へ相談に訪れた。六条院の東の対で源氏と向かい合った夕霧は、柏木の遺品を預かった際に見た一条宮邸の様子を詳細に語る。夕霧の話を聞いた源氏は、落葉の宮が想夫恋を演奏したという夕霧の話に耳を止めて、

かの想夫恋の心ばへは、げにいにしへの例にもひき出でつべかりけるをりながら、女は、なほ人の心移るばかりのゆゑよしをも、おぼろけにては漏らすまじうこそありけれ、と思ひ知らるることどもこそ多かれ。過ぎにし方の心ざしを忘れず、かく長き用意を人にしられぬとならば、同じうは心清くて、とかくかかづらひゆかしげなき乱れなからむや、誰がためも心にくくめやすかるべきことならむとなん思ふ（④横笛366）

と、女のたしなみに関する考えを披瀝した後に、夕霧に落葉の宮とは男女関係に発展しないことが良いという訓戒を施す。一条宮家の様子を伝えられた源氏が、落葉の宮を思慕する夕霧の気持を察知して、その気持を押さえて振る舞うように戒めたわけで、好色に振る舞ってきた源氏の言葉としてはいささか滑稽に思われる。ともあれ、滑稽としても捉えられるこの源氏の言葉が、六条院の東の対を居所とする紫の上の耳にも届いていた、と思しい。

感情表現のままならない窮屈な身の上を嘆いた紫の上の「女ばかり、身をもてなすさまもところせう、あはれなるべきものはなし、もののあはれ、をりをかしきことをも見知らぬさまにひき入り沈みなどすれば、…」という内面述懐は、横笛巻で落葉の宮を非難した源氏の「女は、なほ人の心移るばかりのゆゑよしをも、おぼろけにては漏らすまじうこそありけれ」という言葉と的確に照応する。物語は、紫の上が想夫恋の弾琴を非難した源氏の言葉を、女の感情表現への規制として受け止めたことを明らかにしたのである。ところが、源氏による感情表現の規制は、想夫恋を演奏した落葉の宮だけでなく、落葉の宮に惹かれる夕霧に対するものでもある。さらに、夕霧巻で源氏が落葉の宮と夕霧の関係に関する噂を聞いて「さし離れたる仲らひにてだにあらで、大臣（＝致仕ノ大臣）などもいかに思ひたまはむ、（夕霧ハ）さばかりのことたどらぬにはあらじ」（④夕霧456）と考えていることを考慮に入れると、源氏は、夕霧と落葉の宮の関係によって、致仕の大臣家を中心にした人間関係にもたらす波紋を憂慮して落葉の宮の想夫恋弾琴を非難し、夕霧を訓戒したのである。言いかえれば、「誰がためも心にくくめやすかるべきこと」と語られた円満な人間関係のために、源氏は、落葉の宮や夕霧に自重を要請したと言い得る。そのような源氏の配慮を、女三の宮の降嫁を伝えられるに際して彼に「誰も誰ものどかにて過ぐしたまはば」（④若菜上52）と諭された紫の上が知らなかったとは考えられない。紫の上は、横笛巻で発せられた源氏の言葉が、円満な人間関係の維持を目指すことを知っていながら、夕霧巻ではそれを、女の感情表現を規制するものとして捉え直しているのである。

紫の上が横笛巻で源氏の発した言葉を右のように捉えた理由としては、まず、落葉の宮を掌中に収めようと努める「まめ人」が源氏の訓戒に逆らったことがあげられよう。横笛巻で源氏に円満な人間関係を保つことを訓戒された時、夕霧は「人の上の御教へばかりは心強げにて、かかるすきはいでや」（④横笛366）と、それに強い反感を覚えていた。源氏のなす数々の好色を観察してきた夕霧が、源氏を単なる好色人だと誤解していることも興味深いが、ここでは源氏の追求した円満な人間関係という価値が、好色心にとらわれた「ま

め人」の夕霧によって否定されたことに注目したい。それは源氏の追求してきた、円満な人間関係という価値が否定されることでもあろうが、そこに夕霧を中心人物になした意義があると思われる。物語は、落葉の宮に対する恋情を貫く夕霧を描くことで、源氏の追求してきた円満な人間関係の外にも選択肢があることを示した、と言えよう。無論、夕霧がそのような選択肢を撰んだことに引き替えて落葉の宮は周りに誤解されて苦境に陥ったのであって、その経緯はすでに触れた。その、己の好色の成就を目指す夕霧によってもたらされた結果が、円満な人間関係を目指す源氏によってもたらされたものと同様な女の苦悩であることから紫の上は、男の恋に苦悩するしかない、女の身の上の窮屈さを覚えたのである。

円満な人間関係という価値観とは別に、苦悩するしかない存在として女を捉えた紫の上は、内面と外部を峻別してきた己の生き方がいかなるものだったかを問わずにはいられなかっただろう。その答えとして紫の上は、源氏の追求した価値に順応してきた己の人生を、感情表現の規制されたものでしかなかったと結論づけたのである。言いかえれば、紫の上の下した結論によって、円満な人間関係を維持してきた方法の意味が相対化されたと言い得る。その方法とは、死を目前にした紫の上が六条院に住む源氏の妻妾たちを「情をかはしたまふ方々」（④御法498）と思惟するところにも窺われるように、「なさけ」であった。妻同士の関係に関する源氏の考え方は、六条御息所と葵の上の車争いの際に「かかるなからひは情かはすべきもの」（②葵26）とあるところからも窺われるが、源氏は妻同士の円満な関係がその「なさけ」に支えられることを望んだ。そのような源氏の望みに順応して六条院を支えてきた紫の上が、夕霧巻に至っては己の人生を感情表現の抑圧されたものとして捉えたのである。夕霧巻に至って物語は、紫の上を、六条院を支える女君から、己を感情表現の主体として認識する存在に位置づけ直したのである。そのような位置づけ直しが可能だったのは、物語が紫の上に、源氏とは異なる価値を求める「まめ人」夕霧の恋を観察させたためである。

第五節　結び

夕霧巻には、落葉の宮を一条宮邸に帰宅させた夕霧が、六条院で花散里と対面する場面（④夕霧468～471）が設けられる。そこで夕霧は、嫉妬する雲居雁を「いと鬼しうはべるさがなもの」（④夕霧468）だと罵り、紫の上や花散里の「なだらか」（④夕霧470）な態度を褒め称える。その夕霧の称賛を聞いた花散里は、「身の人わろきおぼえ」（④夕霧471）が顕わ

になることだと言い、己の好色を顧みずに夕霧を訓戒した、源氏を笑う。源氏に顧みられないことを不満に思っている花散里[15]の本音が初めて明らかになったことから、源氏に顧みられないことを「なだらか」な態度で堪えてきた人生の軌跡が読み取れる。花散里にとって「なだらか」な態度は、夫に顧みられない不満を隠して、六条院に住む源氏の妻妾たちと交流するための方式である。

以上のように、物語は、六条院における円満な人間関係を維持させてきた方法、「なさけ」の裏面を暴き出す。紫の上ほど源氏に顧みられない花散里にとって「なさけ」は、源氏の愛情が劣ることを隠すためのものにしかなり得ず、六条院の中心軸をなしてきた紫の上にとっては、「なさけ」は女に感情表現までを規制するものにしかなり得ない。そのような女君の内面を炙り出すために、源氏に比して「なさけ」にこよなく劣る、夕霧の恋を花散里や紫の上に観察させた。特に紫の上は、己の好色心を満たそうとする「まめ人」によって対社会的に苦しむしかない落葉の宮の境遇を、内面と外部を峻別してきたわが身の上に収斂させ、円満な人間関係を追求する方法として源氏の提示した「なさけ」を相対化する。物語は、このような女君たちの内面を描くことで、「なさけ」をもって源氏の追求しようとした、円満な人間関係という価値がいかに虚構に満ちているかを示したのである。

【注】

(1) 野村精一「若菜巻試論拾遺―悲劇的状況について」『源氏物語の創造』桜楓社　一九六九年九月

(2) 小西甚一「苦の世界の人たち―「源氏物語」第二部の人物像」『言語と文芸』一九六八年十一月、ハルオ・シラネ「一夫多妻の三角関係」『夢の浮橋　『源氏物語』の詩学』中央公論社　一九九二年二月、池田和臣「源氏物語夕霧巻の引用的解析―反復・変奏の方法、あるいは「身にかふ」夕霧―」『研究講座源氏物語の視界1〈準拠と引用〉』新典社　一九九四年四月

(3) 増田繁夫「光源氏の女性関係」『源氏物語の探究　第九輯』風間書房　一九八四年四月

(4) 今井上「若菜巻の主題的変容―光源氏の相対化をめぐって―」『日本文学』二〇〇八年二月

(5) 石田穣二「夕霧の巻について」『学苑』一九六六年一月、伊藤博「夕霧物語の位相」『文学論輯』一九六九年三月、のち『源氏物語の源典』明治書院一九八〇年十一月

(6) 室伏信助「源氏物語第二部―夕霧物語を読む―」『国文学』一九八六年十一月

(7)藤原克己「幼な恋と学問」『源氏物語講座 第三巻 光る君の物語』勉誠社 一九九二年五月

(8)伊藤博氏の注(5)の論文に「外面と内面のけざやかに分離したものとして提示される」と語られる。また、森一郎氏は「落葉の宮物語―その主題と構造―」(『源氏物語作中人物論』笠間書院 一九七九年二月)で、このような夕霧の様子を「何やら表面と本心をつかいわける策略めいた姿勢」とされている。

(9)吉岡曠「夕霧物語」『源氏物語論』笠間書院 一九七二年十二月

(10)藤原克己氏の注(7)の論文、なお「なさけ」の意味に関しては藤原克己氏が「漢語の「情」と和語の「なさけ」と」(『ことばが拓く古代文学史』笠間書院 一九九九年六月)で作為性と外面性に注目して「心底深く思っている相手でなくとも、感動させるような言葉や態度を作り出してゆける力」だと論じられている。

(11)田中菜摘兒「夕霧の恋と一条宮家の矜持―源氏物語における皇女―」『国語と国文学』一九九五年四月

(12)田中菜摘兒氏の注(11)の論文。

(13)鈴木日出男「紫の上の孤愁の深化」『成蹊国文』第三十九号 二〇〇六年三月

(14)鈴木日出男氏の注(13)の論文。

(15)田坂憲二「花散里像の形成」『源氏物語の人物と構想』和泉書院 一九九三年十一月

終章

終章　子どもに照らし出される時間

第一節　桐壺帝の私情を導く方法

『源氏物語』の首巻である桐壺巻には公の立場にいる桐壺帝の私情が取り上げられる。[1] 故大納言の娘の桐壺更衣に対する帝の愛情は彼女を死に至らしめ、更衣の死は帝を哀傷の世界に誘う。その哀傷の思いが、歌語や引歌・詩文の引用に支えられて[2]靫負命婦弔問の場面を導き、やがては光源氏理想の女性藤壺を登場させるに至る。「先帝の四の宮」（①桐壺41）の藤壺の登場によって桐壺帝の愛情は公私の均衡を整えることになったのだろうか、物語には藤壺に対する帝の愛情はさほど取り上げられず、彼女に対する源氏の思いに興味を移してゆく。帝と更衣の身分不相応な悲恋の話という側面から、桐壺巻を完結した物語として考えても良さそうである。

ところで、桐壺巻には帝と更衣の悲恋以上に重要な事件が取り上げられている。言うまでもなく、「前の世にも御契りや深かりけん、世になくきよらなる玉の男御子さへ生まれたまひぬ。」（①桐壺18）と語られる主人公の登場、光源氏の誕生である。源氏は、弘徽殿女御の産んだ「寄せ重く、疑ひなきまうけの君と、世にもてかしづ」かれた「一の皇子」に対して、桐壺帝に「私物」として寵愛を受ける（①桐壺18～19）。源氏に対する帝の寵愛ぶりは、世間の譏りにも構わず春宮候補の第一皇子を凌ぐ盛大な袴着の行事を行うところ（①桐壺21）や源氏を立坊させようと思う思惟（①桐壺37）、元服の際に春宮を差し措いて左大臣の一人娘との婚姻を申し出るところ（①桐壺46）などから窺える。帝を父に持った源氏はその私情によって幼年期を育てられたのである。

右に述べた帝の私情という観点から桐壺巻を眺めると、そこには桐壺更衣の死と源氏の誕生とが二つの軸になる。言い換えれば、私人として桐壺帝を描くために更衣の死と源氏の誕生が設定された、とも考えられよう。命の誕生と死没によって正篇の首巻が切り開かれることははなはだ象徴的である。正篇においては誕生から死に至るまで、変化しつつある命に対する感慨が中心となっているように思われるためである。以下にそのことを確認するが、まずは、正篇を括るかのような二首の和歌を中心にそれを明らかにする。そしてわが子を愛おしむ源氏の様子が明石の姫君の成長を待つ時間を通して描かれること、避けられない命の衰えを感じる源氏の感慨を、順に確認する。

第二節　命の渇求

（ア）輦車の宣旨などのたまはせても、（桐壺帝ハ）また入らせたまひてさらにえゆるさせたまはず。「限りあらむ道にも後れ先立たじと契らせたまひけるを。さりともうち棄ててはえ行きやらじ」とのたまはするを、女（＝桐壺更衣）もいといみじと見たてまつりて、

「かぎりとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり

いとかく思ひたまへましかば」と、息も絶えつつ、聞こえまほしげなることはありげなれど、いと苦しげにたゆげなれば、（桐壺帝ハ）かくながら、ともかくもならむと御覧じはてむと思しめすに、「今日はじむべき祈祷ども、さるべき人々うけたまはれる、今宵より」と聞こえ急がせば、わりなく思ほしながらまかでさせたまふ。

（①桐壺22～23）

（イ）年暮れぬと思すも心細きに、若宮（＝匂宮）の、「儺やらはんに、音高かるべきこと、何わざをせさせん」と、走り歩きたまふも、をかしき御ありさまを見ざらんことよろづに忍びがたし。

もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世も今日や尽きぬる

朔日のほどのこと、常よりことなるべくとおきてさせたまふ。親王たち、大臣の御引出物、品々の禄どもなど二なう思しまうけてとぞ。

（④幻550）

（ア）は桐壺巻からの引用で、病が重くなった桐壺更衣が内裏を退出する場面である。桐壺帝は退出のための輦車を許していながら「かくながら、ともかくもならむと御覧じはてむ」と、更衣の最期を見届けようとも思う。宮中が更衣の死によって穢れてはならないという掟を背後にして帝の切迫した心境を描き出す物語の方法[3]も看過できないが、ここでは物語の最初の和歌として命を渇求する歌が掲げられていることに注目したい。更衣を死なせることでそれに傷心する桐壺帝を描く一方で、物語は更衣に生きる道を求める歌を詠ませているのである。

定められた最後の別れの道を悲しく思うにつけても行きたいのは生きる道なのだという更衣の歌の眼目は、「いかまほし」に「生かまほし」と「行かまほし」が掛けられていることである。「限りあらむ道にも後れ先立たじと・・・」と言った帝の言葉に呼応して、生きながらえて帝との情愛を全うしたいという更衣の心境が詠まれた、とまずは考えられよう。だが、続く点線部を視野に入れれば、更衣が命を渇求するのは帝との情愛のためばかりではないように思われる。

点線部の「いとかく思ひたまへましかば」とある反実仮想の構文に関しては、その死を

事前に知っていたら言い残したいことがあったと捉える『湖月抄』の師説のような立場と、『弄花抄』のように、「かたじけなき（桐壺帝ノ）御心ばへのたぐひなきを頼みにてまじらひ」（①桐壺18）をしてきた更衣の無念を読み取る立場とに分かれている。前者は、遺児の立坊への頼みという解釈[4]に受けつがれて大変魅力的だが、ここでは玉上琢彌氏の『源氏物語評釈』や『新編全集』のように『弄花抄』の解し方を支持したい。生きることを願う更衣は身分不相応な愛情ゆえに死ぬ羽目になったが、そのような彼女がわが子の身の上を顧みずに立坊を願ったとは考えられないためである。現に、秘かに源氏の立坊を考えていた桐壺帝も「御後見すべき人もなく、また、世のうけひくまじきことなりければ、なかなかあやふく」思って源氏の立坊を諦める（①桐壺37）。立坊したところで、はかばかしい後見もない源氏が帝位に即く可能性は極めて低く、不祥事も起きかねない。このような観点から考えると、「この人（＝桐壺更衣）の宮仕の本意、かならず遂げさせたてまつれ。我亡くなりぬとて、口惜しう思ひくづほるな」（①桐壺30）とある、故大納言の遺言も不可解なところがある。母君が「はかばかしう後見思ふ人もなきまじらひは、なかなかなるべきことと思ひたまへながら、ただかの（故大納言ノ）遺言を違へじとばかり（娘ヲ内裏ニ）出だし立てはべりしを、・・・」（①桐壺30）と語ったところから察せられるように、更衣の入内は後宮生活の厳しさを承知してのことだったのである。だが、「身にあまるまでの（桐壺帝ノ）御心ざしのよろづにかたじけなきに、（桐壺更衣ハ）人げなき恥を隠しつつまじらひたまふめりつるを、人のそねみ深くつもり、やすからぬこと多くなり添ひはべりつるに、よこさまなるやうにて、つひにかくなりはべりぬれば、かへりてはつらくなむ、（帝ノ）かしこき御心ざしを思ひたまへられはべる」（①桐壺30～31）と続くところから察すると、入内の結果桐壺帝の過分な寵愛によって命を落とす結末までは予想できなかったようである。その死は更衣にも意外なことだったようで、彼女には帝の愛情に寄りすがって過ごして来た時間に対する後悔の念もあったと考えられる。「かぎりとて別るる道の悲しきにいかまほしきは命なりけり」の歌に続く更衣の言葉は、愛情を全うするためにはそれを拒まなければならないという矛盾を晒し出す。更衣の最後の言葉が愛の両義性を顕わにしたとも言えようが[5]、それは同時に新たな疑問をも掘り起こしているのではなかろうか。すなわち、彼女が渇求した命はどのようなものだったのか、という疑問である。

（イ）からは五十余年を生き抜いた源氏の様子が窺えるが、彼の五十余年の生涯は愛情に生きたと言っても過言ではあるまい。源氏は藤壺を初めとする女君たちとの関係によって世にも類い稀な栄華を掌中に収めることができたものの、一方では夕顔や葵の上・藤壺など

に先立たれる悲しみや六条御息所の執念深さといった、愛情の負の面と言えるものをも見てきた。そのような彼の愛情に対する思惟は、「人をあはれと心とどめむは、いとわろかべきことと、いにしへより思ひえて、すべていかなる方にも、この世に執とまるべきことなくと心づかひをせしに、…末の世に、今は限りのほど近き身にてしも、あるまじき絆多うかかづらひて今まで過ぐしてけるが、心弱う、もどかしきこと」（④幻533）という、幻巻の春に明石の君の前で発せられた言葉から窺える。彼は人を愛することから遁れることを願いつつも、人への情愛を持ち続けてきた。[6] また、最愛の妻紫の上は出家を許されないまま死んだが、彼女の死後に「今は、この世にうしろめたきこと残らずなりぬ」（④御法513）と思うことから考えると、源氏は愛情に生きる道を全うしたと言っても過言ではなかろう。母桐壺更衣の歌に見られた愛に生きる道がその子を通して貫かれたと捉えても良かろう。

ところで、（イ）における源氏は「もの思ふと過ぐる月日も知らぬ間に年もわが世も今日や尽きぬる」と、その人生を「もの思ひ」に満ちたものだと捉えている。「もの思ひ」に満ちた生涯という認識は、紫の上に死なれた彼が、「いにしへより御身のありさま思しつづくるに、鏡に見ゆる影をはじめて、人には異なりける身ながら、いはけなきほどより、悲しく常なき世を思ひ知るべく仏などのすすめたまひける身を、心強く過ぐして、つひに来し方行く先も例あらじとおぼゆる悲しさを見つるかな、…」（④御法513）と反芻するところからも窺えるが、幻巻の（イ）においては出家による救済という希望さえ見あたらなくなっている。五十余年の生涯を愛情に生きて来た末に源氏が、その生涯を救済のない絶望的なものだ[7]と受け止めたと言えようが、（イ）における彼はなおもその「もの思ひ」に満ちた生に対する未練を持っている。その未練は、追儺の準備に夢中な匂宮を見た彼の心境が「をかしき（匂宮ノ）御ありさまを見ざらんこととよろづに忍びがたし」と語られるところから察せられ、母更衣による命の渇求とも類似するように思われる。

幻巻に関しては第三部の第二章ですでに述べたが、救済のない生という諦観によって変化を遂げた源氏の姿勢には今一度注目したい。（イ）の直前にある御仏名の日、源氏は「年ごろ久しく参り、朝廷にも仕うまつりて、御覧じ馴れたる御導師の、頭のやうやう色変りてさぶらふも、あはれに思」う（④幻549）。年老いた導師に対する源氏の感慨が読みとれるが、それは彼と長年付き合った自身の老いに対するものでもあろう。導師への盃のついでに詠まれた源氏の「春までの命も知らず雪のうちに色づく梅を今日かざしてん」（④幻549）の歌は、その感慨を背景にしたものである。源氏の歌における「今日」は死に近づいてき

た日でもあるが、「わづかに気色ばみはじめ」た梅の花（④幻549）の美しさを愛でる日でもある。「もの思ひ」から遁れられないと思う彼は、将来への期待はないものの、老いの感慨の中で新たな命の芽生える「今日」を愛でている。そのような「今日」に対する源氏の姿勢は(イ)において匂宮の成長を見守ることができないと悲しむところからも見出せよう。死に向かう悲しさと命に対する愛おしさを感じる時間。物語の開始とともに桐壺更衣が命を渇求しながら亡くなったことは以降の物語でそのような命の時間が描かれることを予告しているのではなかろうか。[8]

第三節　明石の姫君が成長する時間

前節でも述べたように、桐壺更衣が死んだのちの桐壺巻には、更衣を喪った桐壺帝の悲しみとともに、成長する源氏に対する帝の格別な愛情が描かれる。その寵愛ぶりは、「ただ人にて朝廷の御後見をするなむ行く先も頼もしげなめる」（①桐壺41）と、源氏の将来を案じて臣籍降下を決心するところからも窺える。物語にはその決定をくだすために高麗や大和の相人に源氏の観相を見てもらい、宿曜に占をしてもらうなどと帝が慎重を期していることが語られる。それらの中で、帝王でもなく臣下でもないという謎めいた高麗人の予言は、「太上天皇になずらふ御位」を得る（③藤裏葉454）源氏の運命を規定するものとなっている。

藤裏葉巻で源氏が准太上天皇になったのは、実父を臣下にしていることを後ろめたく思う冷泉帝の慮りによるが、実父が准太上天皇になったのちも、「かく（＝源氏ガ准太上天皇ニナッタコト）ても、なほ飽かず帝は思しめして、世の中を憚り位をえ譲りきこえぬことをなむ、朝夕の御嘆きぐさなりける。」（③藤裏葉454）と語られるように、冷泉帝の心労は続いている。が、父を准太上天皇に位置づけることで、冷泉帝は誕生の秘密を知った薄雲巻の当初よりは心の重荷が少しは軽減できたのではなかろうか。

薄雲巻には、源氏が明石の姫君を二条院に引き取る内容や藤壺の死、冷泉帝が夜居の僧都の密奏によって誕生の秘密を知る内容などが繰り広げられるが、そこでも事の真相を知った冷泉帝の「（源氏ノ）人柄のかしこきに事よせて、さもや譲りきこえまし」（②薄雲456）という思惟が取り上げられている。無論、それを伝えられた源氏は、「ただ人にて、朝廷の御後見をせさせむ」（②賢木96）とあった父桐壺院の遺志を理由に、冷泉帝の意向を謝絶する。冷泉帝の立場から考えると、彼は七年もの間、父を臣下にしているという後ろめたさを感じつつも、その父に「太上天皇になずらふ御位」を与えることができなかったの

である。言うまでもなく、「太上天皇になずらふ御位」は史実には例のない、桐壺巻における予言を実現させるために物語が創作したものである。それは物語に、冷泉帝の心労をより早く軽減させる選択肢もあったことをも意味しよう。が、冷泉帝は、七年もの間、心労を軽減することが許されなかった。

太政大臣になりたまふべき定めあれど、しばしと思すところありて、（源氏ハ）ただ御位添ひて、牛車聴されて参りまかでしたまふを、（冷泉）帝、飽かずかたじけなきものに思ひきこえたまひて、なほ親王になりたまふべきよしを思しのたまはすれど、世の中の御後見したまふべき人なし、権中納言（＝カツテノ頭中将）、大納言になりて右大将かけたまへるを、いま一際上りなむに、何ごとも譲りてむ、さて後に、ともかくも静かなるさまに、とぞ思しける。（②薄雲457）

右は桐壺院の遺言に託けて冷泉帝の譲位を固辞する源氏の言葉につづく叙述である。源氏は譲位の意向とともに伝えられた太政大臣への昇進も辞退し、加階と牛車の宣旨だけを受け入れる。それを「飽かずかたじけなきもの」に思う冷泉帝は今度は親王になることを提案するが、源氏は朝廷に後見がいないことを理由にそれも謝絶する。かつての頭中将が内大臣に昇進したら静かに暮らしたいと思う源氏の思惟から考えると、右に見るような冷泉帝の提案は、二人の昇進が語られる少女巻にもあってしかるべきであろう。ところが、少女巻には二人の昇進とともに源氏が実権を内大臣に譲ったことが、「世の中のことどもまつりごちたまふべく、譲りきこえたまふ。」（③少女31）と語られるものの、冷泉帝の動向は一向に触れられない。冷泉帝は、朝廷の後見という謝絶の口実がなくなったにもかかわらず、実父を臣下にしている後ろめたさを感じつづけていることになる。右の引用の点線部が冷泉帝の提案を辞退するためのその場しのぎの口実のようにも思われるが、より注目すべきは、冷泉帝によって実現する桐壺巻の予言、それに導かれる展開が一旦停止になったことではなかろうか。物語は、源氏が実父であることを知っている冷泉帝に七年間も心労をあたえつづけて予言の実現を延ばしているのである。

物語が桐壺巻の予言の実現を延ばしていることは、澪標巻に明かされたもう一つの予言と関わるように思われる。澪標巻における明石の姫君の誕生に際して物語は、「御子三人、帝、后かならず並びて生まれたまふべし。中の劣りは太政大臣にて位を極むべし」（②澪標285）と、生まれたばかりの姫君が中宮となる運命であることを示す。言うまでもなく、源氏の栄華が帝の外戚として保証されることを暗示する予言だが、この予言のために物語は高麗の相人の予言に導かれる展開を一旦停止させている。物語が桐壺巻の予言に則った

展開を一旦停止させて七年の時間を作り出したと言えようが、その時間は「蛭の子が齢」（②松風423）の三歳だった姫君を入内に相応しい年齢になるまで成長させるためのものであろう。

藤裏葉巻において明石の姫君は十一歳の年齢で四月に入内するが、宇多朝から後朱雀朝までの史実ではそのような若年で入内した后妃は見あたらない。ちなみに、管見の限りでは円融朝の皇后藤原媓子[9]と後朱雀朝の女御藤原延子[10]が二十七歳の入内で最も年長で、中宮彰子の入内が十二歳[11]で最も年少であった。物語としても、明石の君が入内に相応しい年齢になるまでの時間が必要だったのだろう。そのことは、紫の上が、入内した明石の姫君の後見役を自分と入れ替わりで務める明石の君に対して、「（明石ノ姫君ガ）かくおとなびたまふけぢめになん、年月のほども知られはべれば、うとうとしき隔ては残るまじくや」（③藤裏葉451）と懐かしく語りかける言葉から窺えよう。明石の君と初めて対面する紫の上は、明石の姫君が成人するほど長い年月をかけて育てて来たので、自分に対する遠慮は要らないと語っている。八年前に明石の姫君を預かった紫の上の言葉を通して、姫君が十分な時間を経て入内に相応しいほど「おとなび」たことが示されたのである。

ところで、物語には桐壺巻の予言を実現させたのちに、明石の姫君の成長を待って入内させる選択肢もあったはずである。にもかかわらず、物語は明石の姫君の入内ののちに源氏を准太上天皇に位置づけ、帝王でも臣下でもないという予言を実現させる。このような展開は、予言によって定められた子どもたちの運命を源氏に帰属させるためではなかろうか。すなわち、明石の姫君や夕霧の人生行路を源氏の運命として括るために、物語が彼らの成長を高麗の相人の予言が成就するまえに位置させた[12]、ということである。言うまでもないことだが、物語の関心は、冷泉帝や明石の姫君、そして夕霧といった源氏の子どもたちの時間ではなく、源氏の時間にある。

物語の関心が源氏にあることは、明石の姫君が成長する間、玉鬘と源氏の関係が中心に据えられることからも言える。玉鬘十帖に、かつての頭中将と夕顔の間に生まれた玉鬘が六条院に養女入りし、表向きには父親のように振る舞う源氏に恋情を訴えられる内容が中心となっている。無論、その間、物語は明石の姫君が和歌の作法や琴の奏法などの教育を受ける様子をも端的に描いている。その教育の方針は、内大臣が「太政大臣の后がねの姫君ならはしたまふなる教へは、よろづのことに通はしなだらめて、かどかどしきゆゑもつけじ、たどたどしくおぼめくこともあらじと、ぬるらかにこそ掟てたまふなれ。」（③常夏239）と語るところから窺え、源氏の細心な配慮の中で「点つかれたまふまじく」（③蛍216）

育てられる明石の姫君はひたすら入内の時期を待っているかに見える。そのような印象は、源氏と玉鬘が過ごす妖艶な時間が物語の中軸となっていることとも無関係ではなかろうが、その背後には源氏が明石の姫君に親愛の情を注いだ時間が流れているように思われる。

真木柱巻には、髭黒の掌中に落ちた玉鬘が彼の自邸に引き取られる内容と、二人の関係によって生じる髭黒一家の家庭内騒動が取り上げられる。婿の髭黒が娘の北の方を置き去りにして玉鬘に夢中になっていることを知った式部卿宮は、娘に「今は、（髭黒ガ）しかかけ離れてもて出でたまふらむに、さて（娘ハ）心強くものしたまふ、いと面なう人笑へなることなり。おのがあらむ世の限りは、ひたぶるにしも、などか従ひくづほれたまはむ」（③真木柱370）と言って彼女を実家に連れ戻す。それに際して北の方は髭黒の「いとかなしうしたてまつりたまふ」（③真木柱373）娘を連れて行く。邸を去る髭黒の娘が真木柱に残した和歌を見た髭黒は「手も幼けれど、心ばへのあはれに恋しきままに」式部卿宮邸を訪れる（③真木柱378）ものの、娘に逢うことも叶わず空しく帰る。髭黒父娘の別離が、娘の北の方の世間体を憂慮した式部卿宮の父情によって招かれたと言えようが、真木柱巻にはもう一つの父娘の別れが描かれている。物語は髭黒に引き取られた玉鬘と源氏の別れを父娘の離別のように仕立てているのである。

言うまでもなく、源氏にとっての玉鬘は恋慕の対象でもあり娘でもある。そのような玉鬘の位相は彼女が髭黒に横取りされたのちも変わらない。髭黒のために玉鬘に逢えないことを「かの昔の、尚侍（朧月夜）の君を朱雀院の后（＝弘徽殿女御）の切にとり籠めたまひしをりなど」（③真木柱392）に比肩する源氏だが、彼女に手紙を贈る際に彼は娘との対面を願う父親を装っている。その様子は、

（源氏ハ）鴨の卵のいと多かるを御覧じて、柑子、橘などやうに紛らはして、わざとならず奉れたまふ。御文は、あまり人もぞ目立つなど思して、すくよかに、

おぼつかなき月日も重なりぬるを、思はずなる御もてなしなりと恨みきこゆるも、御心ひとつにのみはあるまじう聞きはべれば、ことなるついでならでは、対面の難からんを、口惜しう思ひたまふる。

など、親めき書きたまひて、

「おなじ巣にかへりしかひの見えぬかないかなる人か手ににぎるらん

などかさしもなど、心やましうなん」などあるを、（髭黒ノ）大将も見たまひて、うち笑ひて、「女は、実の親の御あたりにも、たはやすくうち渡り見えたてまつりたまはむこと、ついでなくてあるべきことにあらず。まして、なぞこの大臣の、をりをり

思ひ放たず恨み言はしたまふ」とつぶやくも、（玉鬘ハ）憎しと聞きたまふ。

（③真木柱394～395）

と語られるところからも窺える。玉鬘に対する恋慕の思いがあったにもかかわらず、それを人に知られまいと思う源氏は、娘を慕う父親を演じ通している。そのような源氏の手紙を見て髭黒の発した傍線部の言葉には注意したい。髭黒は実の親子でも何かの用事なしには対面が難しいと言い、実の父でもない源氏が玉鬘との対面を望んでいることを非難する。源氏が宮仕えをさせつつ玉鬘との愛人関係を保とうとしているという噂（③藤袴336～337）が気になったためだろうか、髭黒は六条院での玉鬘が「心清くて過ぐい」たこと（③真木柱357）を知っていながらも頑なに二人の対面を許さない。それによって源氏は、玉鬘と過ごした時間が、記憶に収斂されるのみの、取り返しようのない過去となったことを痛いほど知らされる。それは、主のない玉鬘の部屋を訪れた源氏が、

「色に衣を」などのたまひて、

「思はずに井手のなか道へだつともいはでぞ恋ふる山吹の花

顔に見えつつ」などのたまふも、聞く人なし。かくさすがにもて離れたることは、このたびぞ思しける。

（③真木柱394）

と思うところから読みとれよう。『古今六帖』の「思ふとも恋ふとも言はじ口なしの色に衣を染めてこそ着め」（『古今六帖』五・「くちなし」）を引いた「色に衣を」は、玉上琢彌氏の『源氏物語評釈』や『新編全集』の頭注などが指摘するように、玉鬘に対する恋慕の思いを諦めようとする源氏の気持ちの表れであるが、彼は玉鬘を想起せずにはいられない。そのような進退窮まった状態で源氏が玉鬘との別離を実感するところに傍線を施したが、そこからは今という時間の重みを感じる源氏の様子が窺えよう。源氏が玉鬘と別離を通して、やがては過去になってしまう今という時間の重みに気づいたとも言えようが、この時間感覚が梅枝巻で突然明石の姫君の入内を延ばす一つの原因となっているのではなかろうか。

梅枝巻の春宮の元服を取り上げるところには、源氏に遠慮して娘の入内を諦める貴顕の人々に関する叙述があり、それを知った源氏が「いとたいだいしきことなり。宮仕の筋は、あまたある中に、すこしのけぢめをいどまむこそ本意ならめ。そこらの驚策の姫君たち引き籠められなば、世に栄あらじ」（③梅枝414）と言って明石の姫君の入内を延ばす内容がある。中宮となるわが子の運命を知っている源氏の自信も読みとれようが、物語は源氏にとっての明石の姫君が単なる栄華のための駒ではないことを示したかったのではなかろう

か。入内した明石の姫君は、髭黒の言葉にもあったように、「御暇のありがた」く（④若菜上86）里下がりもままならない。また、「内裏などにも、ことなるついでなきかぎりは参らず」（③行幸297）や「内裏に参りたまふべきこと難かるべきを」（③藤裏葉454）などから見られるように、源氏も参内が難しくなっている。明石の姫君の入内は栄華への道をたどることであると同時に、父と娘の対面が難しくなる時間の到来でもある。玉鬘との別れを通して今という時間の重みを知った源氏は、娘と過ごす時間を惜しむ父情から明石の姫君の入内を延期したのではなかろうか。

第四節　薫を見る源氏の視線

梅枝巻で延ばされた明石の姫君の入内は藤裏葉巻に、

御参りの儀式、人の目おどろくばかりのことはせじと思しつづめど、おのづから世の常のさまにぞあらぬや。限りなくかしづきすゑたてまつりたまひて、（紫ノ）上はまことにあはれにうつくしと思ひきこえたまふにつけても、（明石ノ姫君ヲ）人に譲るまじう、まことにかかることもあらましかばと思す。大臣（＝源氏）も宰相の君（＝夕霧）も、ただこのこと一つをなん、飽かぬことかなと思しける。三日過ごしてぞ、（紫ノ）上はまかでさせたまふ。（③藤裏葉450）

と語られる。太政大臣の娘の入内だけあって世間並みの儀式ではなかったが、紫の上にとってその儀式は大事に育てて来た娘との別れでもあった。傍線部の「人に譲るまじう」から考えると、紫の上は育てて来た娘を手放したくなかったようである。そのような紫の上の心境も明石の姫君の入内が延期された一要因だったと思われる。が、明石の姫君にとって紫の上は血の繋がった母親ではない。それを強調するかのように、点線部の「まことにかかることもあらましかば」の思惟や、紫の上に実の子がいないことを惜しむ源氏や夕霧の思いが綴られる。明石の姫君の入内によって紫の上は実母の明石の君に後見役を譲ることになったのである。

かくて、御参りは北の方添ひたまふべきを、常にながながしうはえ添ひさぶらひたまはじ、かかるついでに、かの御後見をや添へまし、と（源氏ハ）思す。（紫ノ）上も、つひにあるべきことの、かく隔たりて過ぐしたまふを、かの人（＝明石ノ君）もものしと思ひ嘆かるらむ、この（明石ノ姫君ノ）御心にも、今はやうやうおぼつかなくあはれに思し知るらん、方々心おかれたてまつらんもあいなし、と思ひなりたまひて、「このをりに添へたてまつりたまへ。・・・」（③藤裏葉449）

明石の姫君の宮中生活に紫の上が付添っているわけにはいかないので源氏はその後見役を実母の明石の君にしてもらいたいと思うものの、言葉に出すことはない。それを言い出したのは紫の上で、彼女は娘に逢えない明石の君の嘆きや実母に対する姫君の恋しさを察して明石の君による後見を提案したのである。彼女は育てて来た娘との別れを惜しみながらも、実母に対する娘の哀切な心情を察し得る人物だった。が、明石の姫君が出産したのちの次の場面における彼女は、養娘の心境が理解できない継母として造型されている。

宮（＝春宮）よりとく参りたまふべきよしのみあれば、「かく思したる、ことわりなり。めづらしきことさへ添ひて、いかに心もとなく思さるらん」と、紫の上ものたまひて、若宮忍びて参らせたてまつらん御心づかひしたまふ。御息所（＝明石ノ姫君）は、御暇の心やすからぬに懲りたまひて、かかるついでにしばしあらまほしく思したり。ほどなき御身に、さる恐ろしきことをしたまへれば、すこし面痩せ細りて、いみじくなまめかしき御さましたまへり。「かく、ためらひがたくおはするほどつくろひたまひてこそは」など、御方（＝明石ノ君）などは心苦しがりきこえたまふを、大殿（＝源氏）は、「かやうに面痩せて見えたてまつりたまはむも、なかなかあはれなるべきわざなり」などのたまふ。（④若菜上121～122）

若菜上巻に語られる明石の姫君の出産は、天皇の外戚という源氏の地位をより確固たるものにする事件である。が、その出産が引き金となって明石の一族の宿願が描かれることを念頭に置くと、物語は受領階層の悲願成就を意識していた[13]と考えられる。それは、御子の出産に際して明石の姫君と母方の血の繋がりを強調する物語の姿勢からも窺え、そのような姿勢は右の引用からも確認できる。右の引用は出産した明石の姫君の参内をせかす春宮の連絡から始まるが、そこにおける紫の上と源氏は、なかなか許されない里邸での生活を満喫したがる明石の姫君の気持ちを解せない人物となっている。ただ、明石の君だけが、もう少し養生してからの参内を進言している。十三歳にして出産を経験した娘を「心苦し」く思う実母ならではの気持ちが察せられ、一見すると、紫の上と源氏による参内の賛成は血の繋がった母と娘の紐帯を強調するところに意義があるように見える。ところが、紫の上が明石の姫君の参内に賛成した根拠の、子どもを愛でる思いは、のちに柏木と女三の宮の密通によって生まれた薫をわが子として抱く源氏からも見出され、第二部世界を貫通する軸の一つのように思われる。

紫の上が子どもを愛でることは「児をわりなうらうたきものにしたまふ御心」（②松風424）、「児うつくしみしたまふ御心」（④若菜上111）などと語られるところから確認できる。

彼女は子どもを愛でる心から血の繋がらない明石の姫君を育てあげ、それに対する源氏の評価は、

今は、かくいにしへのことをもたどり知りたまひぬれど、あなた（＝紫ノ上）の御心ばへをおろかに思しなすな。もとよりさるべき仲、え避らぬ睦びよりも、横さまの人のなげのあはれをもかけ、一言の心寄せあるは、おぼろけのことにもあらず。まして、ここになど（明石ノ君ガ）さぶらひ馴れたまふを見る見るも、（紫ノ上ハ）はじめの心ざし変らず、深くねむごろに思ひきこえたるを。・・・　（④若菜上129）

と、明石の姫君に発した言葉から窺える。右は、明石の入道の手紙を読んでその運命を知った明石の姫君に紫の上を疎かにすべきではないと教訓する源氏の言葉で、引用に続いては継母継子の関係に関する話がある。そのことから考えると、秋山虔氏の指摘したように、右の言葉が明石の姫君の実母ではないという紫の上の立場を際立たせると言えよう。[14] が、血の繋がりではなく「あはれ」の感情に結ばれた関係を讃える傍線部の言葉が、薫をわが子として育む源氏にも当てはまることを看過してはならない。

源氏にとっての薫がどのような存在だったかは、「あはれ、残り少なき世に生ひ出づべき人（＝薫）にこそ」（④柏木322）、「あはれ、そのおのおの（＝女三ノ宮ト薫）の老いゆく末までは、見はてんとすらむやは。花の盛りはありなめど」（④横笛350）などという源氏の嘆きから察せられる。第三部の第一章で述べたように、薫は源氏に命の衰えを感じさせる存在であり、そのことは、「残り少なき世」や、『古今集』の「春ごとに花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり」（春下・よみ人知らず97）を引いた「花の盛りはありなめど」という表現からも言える。が、やはり源氏には幼い薫を愛でる心もあったと思われる。五十日の祝儀に際して薫を抱いた源氏が「この君（＝薫）、いとあてなるに添へて愛敬づき、まみのかをりて、笑がちなるなどをいとあはれと見」るところ（④柏木323）や、成長する薫を見る彼の思惟が「月日にそへて、この君（＝薫）のうつくしう、ゆゆしきまで生ひまさりたまふに、まことに、このうきふしみな思し忘れぬべし。この人（＝薫）の出でものしたまふべき契りにて、さる思ひの外のこともあるにこそはありけめ、ののがれがたかなるわざぞかし、とすこしは思しなほさる。」（④横笛351）と語られるところから言えよう。幼い子どもの放つ命の美しさを看取する源氏の視線が感じられる叙述である。その視線が照らし出すものは後に触れることにし、まずは可愛らしい薫を見る源氏の視線を踏まえて右の傍線部を読み返しておきたい。血筋を超脱して「あはれ」の感情が結ぶ関係を肯定する物語の姿勢が浮上すると思われるが、その物語の姿勢は、若菜上巻の玉鬘の催

す若菜上巻の四十賀にも見られたものではなかろうか。

過ぐる齢も、みづから（＝源氏）の心にはことに思ひとがめられず、ただ昔ながらの若々しきありさまにて、改むることもなきを、かかる末々のもよほし（＝玉鬘ノ子）になむ、なまはしたなきまで思ひ知らるるをりもはべりける。中納言（＝夕霧）のいつしかと（子供ヲ）儲けたなるを、ことごとしく思ひ隔てて、まだ見せずかし。人よりことに数へとりたまひける今日の子の日こそ、なほうれたけれ。しばしは老いを忘れてもはべるべきを　（④若菜上57）

引用は玉鬘に発せられた源氏の言葉で、第三部の第一章ですでに引いたところでもある。源氏の老いが「末々のもよほし」によって照らされることが窺える部分だが、ここでは、夕霧に対する源氏の不満めいた傍線部の言葉が「大将（＝夕霧）のあまた儲けたなるを、今まで見せぬがうらめしきに、かくらうたき人をぞ得たてまつりたる」（④若菜上110）と、明石の姫君の出産の際に繰り返されていることに注目したい。さらに、右の引用において源氏に老いを知らせる「末々のもよほし」が養女の玉鬘の子どもであることを考慮すると、源氏に老いを知らせるに際して物語が意図的に彼の血筋を排除したかに見える。そのような排除は、恐らく、源氏の老いを両義的に象ることと関連していよう。物語は源氏の血を継がない柏木が引き起こす事件を通して、老いを深刻な衰えとして受け止めるようになった源氏を描き得た。が、源氏に対する「幻想の自己増殖」[15]によって死に至った柏木にとっての源氏は、「くやしくぞつみをかしけるあふひ草神のゆるせるかざしならぬに」（④若菜下232）の歌に見られる「神」のような存在だったのである[16]。柏木に対して「ありさまも人のほども（源氏ト）等しくだにやはある」（④若菜下243）と思う女三の宮の思惟を考え合わせると、柏木の幻想こそが傍から見られる年老いた源氏の位相を表していると言えよう。物語は柏木を通して年老いた源氏に若者を死に至らしめる威力があることを語ったが、そのことは澪標巻の予言によって運命が規定されている彼の子息によっては実現不能な展開である。

源氏の老いを両義的に象るために物語には彼の血筋を引き繋がない人物が必要だったと言えようが、それが柏木に限定されたのは、柏木の父と若い時の源氏が女性関係における競争者だったこととも関わっているかも知れない。かつての頭中将と源氏の競争に関しては第一部の第一章で触れたが、年老いた源氏は彼の子息の柏木よりも優れた様子である。それは、女三の宮が「ありさまも人のほども（源氏ト）等しくだにやはある」と柏木を思うところから窺える。物語は親子の二代にわたる競争において優位を占める源氏を描いて、

彼が時の流れに蝕まれないことを語り得たのである。

＊

さてでは、「末々のもよほし」の薫によって照らし出される源氏の老いはどのようなものだったのだろうか。この問いは第三部の第一章と重なるが、老いの暗鬱さの外にも注目すべきことがあるように思われるので、ここで少し補足しておきたい。年老いた源氏の暗鬱な内面は、「子だにあれかしと泣いたまふらむ」（④柏木324）柏木の両親に薫の存在を知らせないで彼をわが子として育てるところからも推測できる。のちの横笛巻で薫が柏木に似ていることを確認した夕霧が「（柏木ノ）父大臣の・・・こと名のり出でくる人だになきこと、形見に見るばかりのなごりをだにとどめよかしと泣き焦がれたまふに聞かせたてまつらざらむ罪得がましさ」（④横笛365）と思うが、この思惟は、源氏が明石の姫君を大堰から二条院に連れ出すことを「罪や得らむ」（②薄雲434）と思ったことと照応する。源氏は「罪得がましさ」を感じながらも薫の誕生秘密が「女の御ためこそいとほしけれ」（④柏木324）と思い、他人の子を育てることを「をこなりと見るらん」（④柏木324）女房たちの視線を甘受する。彼が薫の誕生を「わが世とともに恐ろしと思ひし事の報いなめり」（④柏木299）と、藤壺と犯したかつての過ちの報いとして捉えたことに照らして考えると、源氏にとって薫とともに過ごす時間は往時の過ちに対する償いのようにも見える。そのことを、薫を見て余命の少なさを嘆く源氏の思いに合わせて考えると、彼の老いが放つ暗鬱さが浮上してくる。

ところが、先に確認したように、年老いた源氏には幼い薫の可愛らしさを看取する視線もあった。「さるべき仲」ではないにも関わらず、薫に対して「あはれ」を感じずにはいられない心による視線だが、そのような心に自覚される老いは凄まじいほど生の時間に執着する源氏の内面を照らし出す。すでに掲げた、筍をかじる薫を見る源氏が、「あはれ、そのおのおの（＝女三ノ宮ト薫）の老いゆく末までは、見はてんとすらむやは。花の盛りはありなめど」と老いの感慨を抱くところに再び戻るが、衰えてゆく命に対する源氏の感慨が『古今集』の「春ごとに花の盛りはありなめどあひ見むことは命なりけり」を引いて表現されたことを見逃してはならない。無限に繰り返される美しい自然と有限な命を対照させつつ、命あってこそ自然の美しさも感じられると歌っている『古今集』の和歌は、幼い薫の放つ命の美しさとともに、暗鬱な老いの時間を過ごしながらもその時間が過ぎ去ることを惜しむ源氏の内面を浮上させるものではなかろうか。

第五節　消え去る時間に対する哀感

以上に述べたことから、生きる時間に対する肯定がこの物語に底流していると言えよう。それは源氏が二度と戻らない時間を惜しむ様子や、老いの暗鬱さを感じながらも消え去る時間を惜しむ様子を通じて表れ、幻巻に至ってはむき出しにされていた。清水好子氏が「源氏物語の時間が外側から人物を規制するのではなく、感情に深くかかわり、むしろそれにもとづいて動きながら物語の筋を展開させてゆく」と論じた[17]ように、物語は時間の経過を感じる源氏の内面を取り上げながら展開する。時間に対する源氏の感慨がそのまま物語の抒情となったとも言えようが、その根底には子どもを愛おしむ思いを媒介にして顕れる、消え去る時間に対する哀感があったのである。

最後に、消え去る時間に対する哀感が少女巻から浮上する所以に関して述べたおきたいが、それは予言に導かれる展開と関わっているように思われる。先に、少女巻と玉鬘十帖の時間をへることで明石の姫君の入内年齢が史実に即したものとなったことを述べたが、そのような時間意識からは光源氏に対する作者の愛着が感じられる。その愛着のために作者は彼の生を桐壺巻の予言の成就で終えることを避けたのではなかろうか。言い換えれば、物語の終焉を嫌った作者の視線が、時間の経過を通して臣下でも帝でもない源氏の運命をたどるうちに彼の時間へと移っていったということである。予言の実現に際して時間が丹念にたどられることは、「この御事（＝藤壺ノ冷泉帝出産）の、十二月も過ぎにしが心もどなきに、この月はさりともと宮人も待ちきこえ、内裏にもさる御心まうけどもある、…」（①紅葉賀324～325）とある冷泉帝の誕生場面や、彼の成長が「四月に内裏へ参りたまふ。（冷泉帝ハ）ほどよりは大きにおよすけたまひて、やうやう起きかへりなどしたまふ。」（①紅葉賀328）、「御髪はゆらゆらときよらにて、まみのなつかしげににほひたまへる（冷泉帝ノ）さま、おとなびたまふままに、ただかの（源氏ノ）御顔を抜きすべたまへり」（②賢木115～116）などと語られるところから窺えるが、このような時間を丹念にたどった作者は、源氏の時間が終わるのを惜しむ気持ちがあったのではなかったか。

【注】

(1)西郷信綱「源氏物語をどう読むか―小説論の試み（二）《公》と《私》の世界―」『月刊百科』一九七九年七月、「源氏物語をどう読むか―小説論の試み（三）《公》と《私》の世界―（承前）」『月刊百科』一九七九年八月、のち『源氏物語を読むために』平凡社一九八三年一月、なお『「主題」論の過去と現在　テーマで読む源氏物語論　第1巻』

勉誠出版 二〇〇八年十月

(2)小町谷照彦「小萩がもと―場面設定と和歌―」『講座源氏物語の世界 第一集』一九八〇年九月、のち『源氏物語の歌ことば表現』東京大学出版会 一九八四年八月

(3)益田勝実「日知りの裔の物語―『源氏物語』発端の構造―」『火山列島の思想』筑摩書房 一九六八年七月

(4)藤井貞和「神話の論理と物語の論理」『源氏物語の始原と現在 定本』一九八〇年五月

(5)藤原克己「桐壺更衣」『源氏物語必携Ⅱ』學燈社 一九八二年二月

(6)例えば、「いづこを面にてかはまた（藤壺ニ）見えたてまつらん、いとほしと思し知るばかりと思して、御文も聞こえたまはず。うち絶えて内裏、春宮にも参りたまはず籠りおはして、起き臥し、いみじかりける人の御心かなと、人わろく恋しう悲しきに、心魂もうせにけるにや、なやましうさへ思さる。もの心細く、なぞや、世に経ればうさこそまされと思し立つには、この女君（＝紫ノ上）のいとらうたげにてあはれにうち頼みきこえたまへるをふり棄てむことといとかたし。」（②賢木123）とあるところだが、源氏は情念を受け入れてくれない藤壺ゆえに出家を考えるものの、残される紫の上への思いのためにそれが遂げられない。

(7)鈴木日出男「光源氏の最晩年―源氏物語の方法についての断章―」『学芸国語国文学』一九七三六月

(8)益田勝実氏の注(3)の論文。

(9)『日本紀略』に藤原兼通娘である媓子の入内と死に関する記事がある。入内は天延元(973)年二月二十九日、堀河院で崩じたのは三十三歳の天元二(979)年六月三日である。

(10)『中右記』によると藤原頼宗娘の延子が薨じたのは八十歳の嘉保二(1095)年六月九日で、彼女の入内は『一代要記』や『扶桑略記』によれば長久三(1042)年三月二十六日である。

(11)『日本紀略』長保元(964)年十一月一日の記事に記される入内の記事に彰子の年齢が付されている。

(12)夕霧の成長に関しては、第二部の第二章を参照されたい。

(13)阿部秋生「明石の君の物語の構造」『源氏物語研究序説』東京大学出版会 一九五九年四月

(14)秋山虔「外的時間と内的時間―「若菜上」巻における明石物語、その一―」『国文学』一九七〇年五月

(15)高橋亨「柏木はなぜ自ら死を求めねばならなかったのか」『国文学』一九八〇年五月

(16) 今井上「若菜巻の主題的変容―光源氏の相対化をめぐって―」『日本文学』二〇〇八年二月

(17) 清水好子「場面と時間」『源氏物語の文体と方法』東京大学出版会 一九八〇年六月

【初出一覧】

序章　光源氏の生を語る物語を考えるために

（書き下ろし）

第一部　若年期の光源氏像

第一章　頭中将の視線―源氏の「隠ろへごと」に関連づけて―

原題「頭中将の視線―源氏の「隠ろへごと」に関連づけて―」

『東京大学国文学論集11号』二〇一六年三月

第二章　若紫登場の意義―藤壺に対する源氏の情念を中心に―

（書き下ろし）

第二部　壮年期の光源氏像

第一章　六条御息所の再登場―母と女の位相に注目して―

原題「六条御息所の再登場―母と女の位相に注目して―」

『東京大学国文学論集10号』二〇一五年三月

第二章　玉鬘十帖の意義

原題「玉鬘十帖の意義」『東京大学国文学論集12号』二〇一七年三月

第三部　若菜巻以降の光源氏像

第一章　光源氏の老い

原題「光源氏の老い」『東京大学国文学論集9号』二〇一四年三月

第二章　幻巻の一年

（書き下ろし）

第三章　夕霧巻再考

原題「夕霧巻再考」『むらさき49』二〇一二年十二月

終章　子どもに照らし出される時間

（書き下ろし）